
ぐれえとぴんく

さいわい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぐれえとぴんく

【Nコード】

N1196J

【作者名】

さいわい

【あらすじ】

とある地方大学に通う大学生灰島修吾と桃山桃とその周囲の人々のお話。

お父さんは昔映画監督になりたかったのさ『海の旅人』。ドッカーンと『爆砕』。ようzy……ゴホンゴホン少女の淡い恋心『亡き王女のためのパヴァーヌ』。小説って楽しいけど小説ばっか読んでてもまともな大人にやなれなかったなあ『ロイヤルロード』。

個人的には『亡き』を読んでくれたら満足ですが、いやそういうことは言っちゃ駄目ですね、好きなものをお好きなように読んで

くれたら嬉しいです。

海の旅人

0

「灰島さん、海へ行きませんか」と桃山桃^{ももやまもも}は言った。

ちょうど午後の麗らかな陽射しが西に面した研究室の窓から差し込み始めた頃で、本を読んでいた灰島修吾^{はいいましゅうご}が午睡への欲求に駆られていたときの話である。

桃山の提案はあまりにも唐突だった。

いつだって、彼女は唐突なのだ。以前、灰島と桃山がまだ知り合って間もない頃、キャンバスを歩いていた灰島は奇妙な光景を見かけたことがある。本に目を落としていた灰島がふと気づくとあたりはやけにざわついていて、大勢の人間が皆どこか一点を目指して歩いていた。どこかと思えば、それは灰島の属している文学部研究棟の方角であった。

何か催しているのかとふと思ったが、全く興味が湧かない。

が、文学部研究棟は灰島が今向かっている場所だった。研究棟の入り口を群集が囲んで、どうにも入れない。うんざりして周りを見渡すと、どうやら誰もが屋上を見上げているらしかった。

誰か自殺でもしようとしているのか。

そう思って灰島が目を向けたと同時に、その方角から声が聞こえてきた。否、声ではなく騒音だったかもしれない。

それはただのわめき声だった。

無論、自殺への恐怖でもなければ、何らかの自己主張ではない。そんな、何らかの意図をもった音でなく、それは痛快に突き抜けていくような、一種のさわやかさを持ったわめき声だった。

しかもその声は、曲山市中に聞こえるのではないかと思えるほどにでかい。ロックバンドのライブのようなものだ。その音は腹の底まで響いてくる。それほどの音量を、屋上にいる人物はマイクなしで放っているのだ。

声は一瞬途切れて、深呼吸してまた響き始める。

その人物の姿を捉えて、灰島は少し慌てた。それは紛れもなく最近自分の研究室へ入ってきた桃山桃だった。

その狼狽は、あるいは灰島にとって不覚だったかもしれない。その瞬間天頂にいる少女と関わるか無視するか、の計算が出来なかった。無視することも出来たはずだった。先輩後輩意識など、灰島には皆無である。条件は、棟を取り巻いているこの群集たちと同じだ。

しかし、このときの灰島は思った。

なにやってんだ、あいつ、と。

何とかしなければならぬ、と。

その頃には、群集のささやきの中に警備員という単語ちらほらと発せられるようになっていた。あるいは、警察か。

どうにも、それはまずい。そもそも、そんな大げさなこと何もやっていないではないか。

次の瞬間は、灰島は計算することが出来た。つまり自分の意思で後悔せずに済む方を選ぶことが出来た。平穏か諦めか。後者を灰島は選んだ。

選んだ瞬間、灰島の体は飛び出した。

が、群集の体に遮られた。無理やりこじ開けて、棟に入る。

エレベーターの上を押したが、走ったほうが速いという計算を灰島の頭ははじいた。扉が開く前に灰島の体は駆け出す。

屋上に着いた時には息が切れていた。

「なにやってんだ後輩」と灰島は叫んだ。

空が突き抜けるように青く、障害物のない天頂からの風景は馬鹿みたいに爽快だった。

「やあ、先輩ではありませんか」振り返って灰島を認めた桃山は笑顔を見せた。「先輩もやりに来たのですか」

「馬鹿め」灰島は忍者のように一瞬で間を詰めると、桃山の腕を取り強引に退散させた。

どちらかといえば意外なことに、桃山は抵抗しなかった。

「先輩、どちらへ向かうのですか？」

「研究室しかない」と灰島は答えた。そろそろ警備員や教授が騒ぎを聞きつけてやってくる頃かも知れない。そんな面倒からは逃げるに限るのだ。

逃げ込む先は、灰島にとって勝手知ったる日本文学研究室しか思いつかなかった。

合鍵を使って鍵を開け、入ってドアを閉めて施錠した。

「むう、妙齢の女子を密室に連れ込んでどういう魂胆ですか？」と桃山が言った。

「寝言は寝てから言え」灰島は手に持っていた分厚い本を投げつけるのを、冗談にならないと諦め、仕方がないのでチョップで代用した。「逃げたかったら勝手に逃げろ。教授に掴まって質問責めだ」

「一体私がなにをしたというのです？」

「何もしてないかも知れんな」息について灰島は椅子に腰を下ろした。「しかし世間はそう思わない」

「思いませんか？　ここは大学ですよ。あ、先輩コーヒーでも淹れます？」桃山は呑気な顔をしたまま棚に閉まってあるインスタントコーヒーを取り出した。

「苦いのにしてくれ。悩みが吹き飛ぶようにな」

「はいな」

「大学って言ったって、世の中馬鹿ばかりだからな。馬鹿というか、なんとなく生きているような人間ばかりだから。簡単にいうと、君は気違い扱いされる」

「私になにか悪いことしましたか？」

「していない。しかし後輩だって自分のしたことが平衡感覚から外れたことだというくらいわかってるんだらう」

「わかってないのかも知れませんか？」

「それはない。その歳まで生きて、大学にまで入って、それで変人というのは笑わせる」

「正答です」桃山は嬉しそうに笑った。「さすがは先輩、いいこと

言いますね」

「いいことは言っていない」灰島は本を読む気がなくなって、パソコンのスイッチをつけた。研究室には灰島のパソコンが持ち込まれている。

淹れたコーヒーを桃山は差し出した。自分のためにも淹れて、灰島の向かいに座る。パソコンを挟んでいるので、相手の顔は見えない。

「先輩、私、これでもずいぶんといろんなこと我慢してるんですよ」

「ほう、それは驚きだ。例えば？」

「先輩を襲うこととか」

灰島はコーヒーを噴き出しそうになった。

「でも、つまりですよ。私は結構悪いことしてないと思うんですよ。屋上行って叫んでただけですから」

「窓の鍵を壊しただろう」大学の屋上は本来施錠されている。灰島が上ったときも、ドアの鍵はかかっていた。屋上に出了れたのは、その横の窓が開いていたからだ。よくみれば、その鍵は何らかの圧力を受けて壊されてしまっていた。

灰島の指摘に、桃山はばれてましたかと笑った。「そりゃ、窓の鍵壊したりはしましたが、そうしなけりゃ屋上いけませんでしたからね。でも、誓って言いますけど、あれはもう半分壊れてましたよ。私がやったのはとどめをさしただけです。まあそれは謝るとして、でも問題になっているのは屋上で叫んだことでしょうか？ それのどこが悪いことなんですか？」

「悪くはないが、異常だね」

「異常ですか？ 例えば殺人よりも？」桃山は問うた。「殺人と私がしたこと、どっちが異常者扱いされますかね」

灰島は答えなかった。桃山の言った事は正しいと思ったからだ。突然叫び始める人間と突然殺人を犯す人間。どちらが異常かと言われれば、ほとんどの人間が後者と答えるだろう。しかし実情は？

民衆はどちらをより異端とみなし排除しようとするだろう。

それは一体何故だろう、と灰島は考える。殺人は自分たちが犯す可能性のあるもの、しかしいきなり叫びだすことはない、つまり自己との類似性の問題だろうか。それとも理由のある殺人は理解でき、理由のない行動は理解できないということだろうか。

どちらかといえば、後者かも知れない。

しかし、人間は全ての行動に理由をつけていると言っても言うつもりだろうか。

「後輩はもし人を殺したくなつたとして、自分を律することが出来る？」灰島は訊いた。

「出来ると思います。そりゃ、あまりにも強い怒りに駆られたら分かりませんけどね。でも、それは最終の最悪。行き着くところまで行き着いちゃったときの話でしょう」

「それなら問題はない。ただこれからは、人と違うことをしたいと思つたとき、もう少し自重したほうがいいかも知れない」

「何故ですか」

「面倒だから」

「退廃ですね」

「その通り」

「でもそんなところも格好いいですよ」

「からかうのはやめてもらいたい」

話を戻すが、そんなことがあつたところで桃山の奇矯がおさまるわけでもなかった。そもそも、嵐山教授のゼミに入つたのだから変人には違いない。止めさせようとするほうが無粋というものだろう。ただ、灰島は桃山と自分とは思考の仕方が違うのだろうと思つてゐる。桃山は反射的、思考と行動がほぼ同義である。灰島は反芻的とでもいおうか、思つたことを少なくとも一度は思い返してから行動がある。

もちろん、優劣があると思つてゐるわけではない。

しかし、こう唐突に話をされると戸惑つてしまうことがあるというだけの話である。

「海だったって、一体なんで」意味のない質問だと灰島は思いながらも、そう口に出した。本来、口から出る言葉の八割くらいは意味のないものなのかも知れない。

桃山の口からは「行きたいからです」と発せられるだろうし、事実発せられた。行きたいといわれれば、それ以上の理由を尋ねる必要はない。行動に意味を求めれば、結局のところ何故生きているのかという命題に行き着く。その問いに答えられるほど、灰島は信心深くないし、楽道家でもない。

「よし、行ってこい。そして春の波に連れ去られてさまよえ」

「では準備をお願いします」

「何故僕が君の準備を手伝わねばならんのだ」

「ではなく、あなた自身の準備をしてください」

そう、それが問題なのだ。何故灰島まで行かなければならないのか。

「何故僕も行くという話になっているのだ」

「灰島さんは行きたくないのですか？」さも意外だという表情を桃山はして見せた。「楽しいですよ、多分」

「海なんか行って、なにをする」

「吼えます」

「犬か貴様」吼えてどうする。「悪いけど、本を読んだ感想を書き留めておきたいんで、行くなら独りで行ってくれ。邪魔しないならここにいてもいい」

「感想なんて書いてどうするつもりですか。読書感想文コンクールに応募ですか？ 大学生にもなって恥ずかしい」

奇想天外奇天烈娘に恥ずかしいと言われるとはな。「気づいたことか思ったことを書き留めておくだけだよ。今後論文のネタになるかも知れないし、ならないかもしれない」

「論文なんて書いてどうするつもりですか」

「大学生だからな」

「そう思うなら卒業してくださいよ」と桃山は言った。この言葉について少し説明するとすれば、灰島は今大学五年目ということしかいえない。もちろん五年以上かかる大学もあるという突っ込みは積極的に無視させてもらう。

「あ、卒業しちゃって私に会えなくなるのが嫌なんですね。なんだあ、さすがは灰島先輩。心配しなくても私も同じ気持ちですよ」

「卒業するとしても院に残るつもりだしなあ」灰島は桃山のコメントを無視した。

「そうしてまた嵐山ゼミですか？」

「僕に師匠は要らないからな」

「ええ、そのとおり。ということで、海に行きましょうか」

「脈絡がないな」脈絡のない会話は嫌いではないが。

灰島は諦めてパソコンをシャットダウンした。思考は頭の中にセーブしておけばいい。覚えてなかったとすれば、その程度の思い付きだったということだろう。

「仕方ないですね。コーヒーくらいはおごりますよ」

「仕方ないな。一緒に行くか」

残念なことだが、桃山の奇行を止められるのは灰島しかないということなのだ。

1

海は寄せたり引いたりしている。海には一体なにが眠っているのだろう。有史以来、一体何人の人間が生きたままそこに放り出されてきたのか。神楽坂には想像もできない。一瞬カメラを海のそこに潜り込ませることを思いついたが、そうすれば長年のバイトでついに手に入れた念願のビデオカメラがおじちゃんになることは目に見えていたし、そもそも神楽坂は泳げない。海流に巻き込まれて海の墓

標の一部になることも面白かったが、そこまで神楽坂はペシミストではない。

海でかめでも撮ればよかったのだが、なにを思ったのかこうもりなんかが散見される。海でかめなぞ月並みとしかいえないのだが、しかし現実はどうもりであった。こうもりなぞとってなにが面白いのか。真正のリアリストならば撮るであろう。しかし神楽坂はリアリストではない。

が、暫く波を撮ったあと、思い直して神楽坂はレンズをその鳥とも獣ともいえない中間的な生物に向けた。海にこうもりも何らかのメタファーになりうるかもしれない、と思ったからだ。思ってから、メタファーとはなんという意味だったかな、と思ったりもした。多分何らかのブンガクテキな言葉だったと思う。そんなわかりづらい言葉は専門家だけわかっておけばいいのであって、自分みたいな似非監督は語感だけわかっておけば問題はない。

暫くそんな風景を撮り続けたあと、神楽坂は三脚を海に向かってセットしたままその場を離れた。やけにコーヒーが飲みたくなったからだ。

神楽坂がバイクを置いている駐車場の近くに自動販売機が設置されていたので、そこまで戻った。冷たいコーヒーが飲みたかったのだが、冷たいのではブラックしかなかった。暖かいカフェオレを飲むのもよかったが、しかし神楽坂は初心に従うことにした。一口つけて、もちろん神楽坂は後悔した。苦いものは嫌いじゃないが、苦すぎるものはどうも苦手だ。

そういえば、ブラックコーヒーばかり飲んでいる友人がいるのを神楽坂は思い出した。寒い日も暑い日も、運動のあとでさえいっつはブラックを飲んだ。

「よくそんなもんが飲めるもんだ」と神楽坂は言った。

「全くだ」とその友人は返した。「自分でも、こんなものが世間に流通していることが時々信じられなくなる」

「そりゃ、君みたいなファンがいるからだろう」

「ファン？ 僕が？」とそいつはきょとんとした。それから納得したように、「ああ、僕は別に好きで飲んでるわけじゃないよ」と言った。

神楽坂は少し驚いた。やけに毎日毎日飲んでいるので、よほどの好物なのだろうと思っていたからだ。「じゃあ、何故そんなに飲んでいるんだい？」

「うん、そりゃ……」少し考えたあと、というよりも言い出すかどうか逡巡したあと、彼は言った。「僕は煙草をのまないからね」

「煙草の話なんかしてないよ。君がコーヒーを飲む理由だ」

「うん、だから、要するにかっこつけてるわけだ。煙草なんかのんでたら少しはかっこつくのかも知れないけど、僕はそれをしないからコーヒーを飲むわけなんだね。それもブラックコーヒーならかっこつくと思ってるわけなんだ」

その話を聞いて、神楽坂は誇張して言えば心臓が飛び出るほどに驚いた。実際のところは「うわぁ」と小さく口に出すほどに驚いた。驚いた点は、その友人がかっこつけたいと思っているということだった。どう考えても女になんか興味がなく、それよりも宇宙の真理とやらにでも思惟をめぐらせているほうがあっているような人間だったからだ。

例えば、その人物は髪型になんか興味がなく伸びるがままにまかせていたし、年中ほとんど同じTシャツにジーンズを着ていた。そんな人物が、一体格好つけるなどと言う感性を持ち合わせていたとは。

もっとも、後日聞いたところでは、髪型については異論がないにしても、ファッションについては「本当はジャージのほうが動きやすいんだけどね、まあこれもかっこつけの一種だ」ということらしかった。Tシャツジーンズのどこが格好いいのか、わからないでもないがわからない話だ。

とにかく、その友人にとってはブラックコーヒーは煙草の代わりらしい。ちなみにその「かっこつけ」について長々とした評論を聞

かされたが、ここでは割愛する。意味がわからなかったし意味がない。

では、何故煙草をのまないのか。

「そこまで反社会的になる必要がない」と友人は言った。「もちろん、嫌煙も分煙も間違っちゃいないと思うがくだらないと思ってる。だから、近年の嫌煙ブームにのっかっているつもりはない。ただ、だからといってわざわざ喫煙する必要もないと思う。大人気ない。と、ここまでもっともらしいことを述べたけど、それ以上に大事な理由は、単に金もつたいないからだね」

さすがにこの友人らしく、禁煙にもすっかり理屈を持っているのだなあ、と神楽坂は思った。「喫煙しなくて済むんならそれに越したことはない」と神楽坂はこれも月並みなコメントを返しておいた。こういうことを思い返しても、こんな月並みなことしか言えない自分には芸術などできないだろうなあ、というこれすらも実に月並みな感想が思い起こされてくる。芸術とは一体なんなのだろう。神楽坂にはその定見がない。

ブラックコーヒーを飲んでいると、なるほどこんなものばかり飲んでいればあんな理屈っぽい人間も生れるかもしれない、と思ったりました。

思っているうちに空になった。どうも口の中が苦々しくって仕方がないのでもう一本、今度はスポーツドリンクを買って、それを持っただままカメラを設置している場所に戻った。

戻りながら、瀬戸内海が見えた。どうにも、瀬戸内海は狭い。島は林立しているし、すぐ向こうはもう本州だ。例えば水平線の持つ壮大さがない。しかもフェリーが手の届きそうなところを行きかっている。実にせせこましい。どうせ撮るなら、太平洋のほうがいい。太平洋の水平線を延々と撮った映像は、芸術だろうか。など思ったりもした。

いいかげん、撮影を止めて帰ろうと思った。撮影といっても一人で海を撮るだけで、要するにただの暇つぶしだった。暇つぶしとい

うか、逃避といったほうがよかったのかもしれない。逃避とすれば、芸術と学問からの逃避か。そもそも映画なんぞ撮り始めたのは、学問から逃げたかったからかもしれない。

神楽坂が映画を撮り始めたのは、高校生のころだった。神楽坂の高校は進学校で、入学式の日から受験の話が出た。そんな雰囲気能耐えられなかったわけではないが、なんとなく入った映像研究部で映画を撮ったりした。周囲が受験受験といい始めた時期も、神楽坂は一人芸術芸術と眩きながら映画を撮ったりした。

一緒に製作していた友人たちもいつしか勉強に専心するようになり、それでも神楽坂は映画を撮り続けた。とはいっても、不真面目な高校生だったから、高校時代に撮ったものでまともに作品と呼べそうなものは一本もない。

結局大して学力は伸びず、それでも地元の国立大学に何とか入れそうだったので、そこに進学した。そこでも相変わらず芸術芸術と眩きながらちぐはぐな映像を撮影し続けたりした。結局今まで作品と胸を張って言えそうなものは一本しかない。

映画を撮り続けていたわけなのだから、真面目な大学生であったわけもなく、四回生になった今年、どうあがいても卒業できないことになっている。単位を最大限とったところで必要単位数に届かない。

ならば神楽坂が今まで眩き続けた芸術というものに専心できるかといえば、そういうわけでもないのだ。神楽坂は暗然とすることもなかったが、自分はどうかやら完全に行き詰っているらしい、と思っていた。

海辺には風が吹き続けていた。これは、春とはいえ少し寒いな、と灰島は思った。

桃山は海につくなり短距離走を始めてしまっていた。クラウチングスタートで走り出す。五十メートルほど行く。止まる。逆向きに

もう一度。よく飽きないもので、何度も何度も続けていた。

砂浜はいい感じに乾いており、走りたくなる気持ちもわからないでもない。ただビーチフラッグ顔負けに一生懸命走り続ける女子大生というのは、やはりあまりお目にかかれるものでもない。桃山にはおそらく、他人の目を気にする回路が欠けているのだろう。

それはおそらく人間社会にとってもっとも必要なものであり、もっとも捨て去るべき回路だった。

何度も続けて、さすがに疲れたのか桃山は灰島の元へ戻ってきた。本でも持ってくればよかったのだが、あいにく失念してしまっていて、灰島は所在無く雲を眺めていた。それでも大して飽きなかった。空は遠くまで突き抜けており、雲は偉そうに聳え広がっていた。

桃山は肩で息をしていた。しかし灰島の前までくると全身満杯になるくらい大きく息を吸い、それから吐き出した。それでかなり平常に戻った。それから母を見つけた子供のように嬉しそうに笑った。

「気が済んだ？」と灰島は言った。

「疲れました」と桃山は言った。「けど、まだまだですよ。灰島さんもどうですか？」

「やると思う？」

「まさか」桃山は自分の後方を差した。ちょうど、海の方角だ。「あそこに面白いものがありますよ。見に行きませんか？」

「大して面白いもんでもないよ」

「行ってみなきゃわかりませんよ」

「わかるよ、見えている」灰島のいる砂浜から海まで何の障害物もない。流木や空き缶のある汚い砂浜だった。「あるのは三脚と、カメラだろう」

「知ってるなら何故行かないのですか？」

「行つてどうする」灰島は訊いてみた。写りたいのか、もしくは撮りたいのかもしれない。

「そりゃ、遊ぶのですよ」

「どうやって？」

「どうって……うん、考えてませんでしたね。愛しい人を永遠に記録しようか」

「映像は永遠ではないよ。そもそも、あれは人のものだ」

「いえ、あれは落ちているのです。落ちてるものを失敬したって犯罪になりません」

「なるよ」

「なるのですか？」

「うん、なる」桃山なら粗大ゴミくらいなら持って帰ったことがあるかもしれない。

「じゃあ止めておきましょう」桃山はあっさりと灰島に従った。どこまでが本気でどこまでが冗談なのかよくわからない。

もしかしたら、どこでも本気でどこでも冗談なのかも知れない。そういう思考なら灰島は羨ましかった。

「でも、持ち主はどこにいますのしょう」

「そりゃ、あそこだ。階段を降りてくる。何か取りに行ったか、ジュースでも買いに行ってたんだろう」

「何故あの人だってわかるのですか？」

「知り合いだからだ」と、灰島は言った。

階段から降りてきた人物は桃山のほう、というよりもカメラの方に近づいてきて、桃山にもその人物が誰だかわかった。

「あ、神楽坂さんではないですか」と大きな声をだし、おーい、と手を振った。突然だったので灰島は眩暈がするかと思った。

相手の方も桃山の頓狂な声に気づいて、驚いて駆け寄ってきた。

「なんだ、灰島と桃山さんか。びっくりした。こんなところでなにしてるんだ？」戸惑ったように、神楽坂は言った。

「そりゃもちろん、デートです」

「母親が子供を公園に連れて行くようなものだ」

「なるほど。いや、よくわからんが」神楽坂は持っていたスポーツ飲料の蓋を開いて飲んだ。「よくわからんが、お前らはよくわからんのが正しい」

「そうだな、そういう現象もありうる」と、灰島は同意した。

「あれは神楽坂さんのものだったのですね」と、桃山は海に向けられていたカメラを指差した。「なにを撮っているのですか？ 新作の映画ですか？」

「いや、新作は撮っていない」よっこりやしよ、とわざとらしくいながら、神楽坂は灰島の隣に座った。「ただの遊びだ」

「うわあ、だったら私、いじってきてもいいですか？ お願い。絶対に壊したり、撮ってあるもの消したりはしないから」

「好きにしていいい」と神楽坂は頷いた。それを見た瞬間、桃山は弾かれたように駆け出していった。

「相変わらず、元気な子だな」神楽坂は隣の灰島に言った。「お前、まだ手え出してないのか？」

「出すか馬鹿」と灰島は言った。空の前にこうもりが飛んでいた。

「そうか。あんな可愛い子なのにな。どこが気に入らん。ほっときや誰かに取られるぞ。俺がお前の立場なら、とっくに――」といい、神楽坂は止まった。

「とっくに、どうする？」

「いや、あの子は俺の手には負えんなあ。男はああい子好きなんだけどな、無理だろうな。お前くらいがちょうどいい。うん、今度桃山さんに言ってみよう。きっと喜ぶな」

「なに言っても喜ぶやつだ」こうした会話は、時候の挨拶のようなものだった。

「ちようど、お前のこと考えてたよ。そんなときに会うなんて偶然しちゃ出来過ぎだが、偶然か？」と、むしろ時候の挨拶の続きのように、さりげない様子で神楽坂が言った。

「偶然以外になにある」

「神様のお導きかな。灰島、お前運命って信じるか？」

「運命か。例えば化学の実験なら、同じ条件をそろえたら必ず同じ結果が出るよな。同じ構成で、同じ作用をすれば、同じ結果が出る。僕たちの世界ってやつも、同じように考えれば――」

とまで言った時点で、神楽坂は笑い始めた。「やっぱりいいなあ、お前は」

「何がおかしい」

「お前から見てると人生何とかなるなって気になる」

「そんなに楽天家に見えるか？」

「いや。けど、梓外には見える」

「そうか」とだけ言って、灰島は不機嫌そうに黙った。

神楽坂が言った梓外とはどういう意味なのだろう。世界にはおよそ無限に等しいほどの人間がいて、しかしほとんどの人間はある種の共通認識を持って生きている。例えばそれは、信号が赤なら渡ってはいけない、といったものかも知れない。もしくはもっと大きくして、信号の左端にある光は赤だと認識すること、といったことかもしれない。もちろん価値観はそれぞれで、人びとはそれぞれの思惟を持って暮らしているのだが、しかしその思惟はどこかしら大勢の共通認識からはみ出ない形で行われている、はずである。そうした共通認識のことを、神楽坂は「梓」と表現したのだろう。

「そう怒るなよ。誉めている」

「嬉しくはないさ」と灰島は言った。「変人と言われてもな」

「なあ、灰島、お前、卒業する気はあるのか？」

「卒業？ ああ、神楽坂、卒業できなくて悩んでんのか。そりゃ、でも、自業自得だ」

「わかってるさ、でも、勉強嫌いだからなあ」

「なら、退学して就職だな」

「就職はもっと嫌いだからなあ」

「なら、引き籠もりか。けど、引き籠もりは社会的にみて、あまり好ましい生き方ではないな」

神楽坂は力なく笑った。「さすがに俺も引き籠もりになる気はないさ。いや、退学する気もない。けど……」といって黙った。続ける言葉は見当たらなかった。「灰島は、どうすんだ？ お前は、確か俺より一年上だから、留年してんだよな。なのに、なんか悩まな

いのか？」

「悩みは尽んよ。人間ですから。けど、僕には研究があるからな。なかったらどうしてたか知らんが」

「研究か。それは俺にはない。桃山さんは、どうするんだろうな。なんか、就職活動してる姿が浮かばない」

「そうだな。あれはあれでなんとかなるんだろうが。……まあ、最悪俺が養ってやるけど」

へえ、という顔を神楽坂はした。「それ本人に言ってやれ。飛び上がって喜ぶぞ」

「馬鹿言え」灰島は立ち上がった。「コーヒー買ってくる」

「俺のやるよ」と、神楽坂は自分の持っていたスポーツ飲料を差し出した。コーヒーを飲んだ直後だったので、一口飲めば十分だったのだ。

「それはコーヒーじゃないだろう。それに、やつが戻ってきたときのジュースも要るからな」

「保護者だな」

「保護者だ」

2

神楽坂が最後に撮った映画のタイトルは、『海の旅人』という。

慎重しやかな自主制作映画で、完成の際には仲間内だけだったが上映会も開いた。内容は、夢破れた青年が仲間や恋人に支えられ、新しく出会った人々に励まされながら再起を誓うというある意味オーソドックスといえる内容だった。それでも青年の心情と登場人物の関係性をしっかりと描くことの出来た映画として神楽坂は傑作だと思えたし、鑑賞した者の中にもいい映画だと思った者がいた。

上映会では、完成直後には味わえなかった充足感を感じることができた。いい作品を作ったと思った。これ以上の作品を作ることとは

できないだろうと思った。アマチュアの自分には、それで充分だとも思えた。

しかし、映画の完成直後には、全く別のことを考えていた。この映画には不満足ばかりだった。構図のアングル、風景描写、音楽、間、脚本。全てさらに上の演出があったように思えてならない。考えに考え、練りに練って弾き出した演出であるとは言えた。文字通り心血を注いだと自負することができる。それでも、映画完成直後の神楽坂の胸に去来したものは、後悔ばかりだった。

その後悔も、上映会の時には満足に変わった。

しかし、時を経るにつれ、後悔が静かに押し寄せてくるようになった。ふと気づけば次回作の構想を練っている自分を神楽坂は発見するようになった。

やがて我慢しきれなくなった。次の作品を作ろうと思った。すでに神楽坂は三十に近くなっていた。就職活動を諦め、バイトを止めた。昔買ったカメラを撮り出し、新しいノートを買って準備を始めようとした。

しかし、挫折した。

なにをどう、描けばいいのかよくわからなかった。いいと思って書き進めていたものが、起きてから見るとずいぶんと駄作に見えた。無理して書き進めてみても辛いだけで、破り捨てたところで新たな工夫は思いつかなかった。

半年、我慢した。しかしついに窮迫が訪れた。就職するにはもう最後のチャンスかも知れなかった。神楽坂は、映画を捨てることを決意した。結局、描くことも見えないまま、ノートは捨ててしまった。カメラはまた、押入れの奥に仕舞った。

神楽坂は運よく就職することができた。ほとんど自暴自棄になっていたときの僥倖であった。もう生きることとは半ば諦めていたときのことだったために、神楽坂は涙を流さんばかりに喜んだ。それから、会社のために身を粉にして働いた。くたくたになって帰った床の中で、時折映画のことが頭をよぎったが、やがて忙しさに忘れた。

やがて神楽坂は結婚して、家庭を築いた。いい夫となり、いい父となった。休日には家族で公園に出かけ、息子とキャッチボールをした。時々、同僚や部下を連れて飲みに出かけた。映画については撮るほうではなく見る側に回った。

ただ、飲み会で、あるいは晩酌で、酔っ払っていい気分になったとき、俺は昔芸術家だった、と誰彼となく語った。俺は、あるいはお父さんは芸術をやっていたんだ、芸術芸術。彼が昔眩き続けた芸術芸術と言う言葉は、そんな風に彼の壮年も眩かれ続けることになった。

「しかし神楽坂さん」あるとき、神楽坂の同僚で芸術に興味がある者が、酔っ払った彼に問いかけたことがある。「芸術とはなんぞや」問いかけたほうも酔っ払っていた。

「曰く」神楽坂は答えようとした。答えようとして、沈黙した。深沈として、むしろ痛ましいような表情になった。往年の映画に対する情熱が一時に彼の胸に去来しているのかもしれないと周りにいた同僚は思った。しかしようやく口を開いた彼の言葉はこうだった。

「酔っ払って頭が回らんな。ビール、もう一杯」

神楽坂はもしかしたらこう叫びたかったかもしれない。「それがわかっていたらこんなところで酒なぞ飲んでいるものか」と。

彼の死因は実に月並みなことに癌であった。見つかったときは末期で、延命治療以外手の施しようがなかった。告知を受けた彼は、穏やかに見えた。平生と少しも変わるところのなかった。神楽坂は時折訪れる見舞い客に、大学時代の話をするようになった。若いまま無理やりに作った一本の映画のことを話した。大学時代のことを話す彼を見て、彼の妻は驚いた。出会い以来、そのころを話することはただの一度もなかったからだ。

死に臨んで、一挙に過去が神楽坂の胸に到来したのかもしれない。神楽坂は、毎晩、病室のベッドで映画のことを思った。神楽坂は芸術について考えた。それについては、『海の旅人』以上のものではないだろうと彼は思った。あの作品はあるいは芸術ではないかも

しれないが、しかし自分の精一杯であると思った。

しかし、描かなければならないものはあった。やがて彼は病院食ではなく一本の鉛筆とノートを求めるようになった。

このことが彼の晩年に影を落とし、また彩を与えた。

彼は止める意思も家族も振り払って退院した。

毎日机の前に座ってノートを眺めた。しかし眺めるばかりで何も書かなかった。一日中座ったままのときもあった。しかしノートは白紙のままだった。

「描きたいものがあるんだ」ある日神楽坂は彼の妻にポツリと言った。それは針の落ちる音にもかき消されそうなほど小さな声だった。「大学時代のあのころのことを。記録しておきたいんだ。あのころの、あの情熱を。それができればどんなにいいだろう。それが――それだけでいいんだけどなあ」

いよいよ死の苦しみが彼の上にのしかかってくるようになったころ、彼は何事かを書き始めた。しかしそれはいわゆるミミズののたかったような文字で、誰にも判読することはできなかった。ついに彼は映画を再び撮ることなくその生涯を終えた。

神楽坂の通夜の際には訪れた人々のために『海の旅人』が上映された。それが故人の残した最大のものであるだろうと彼の妻が思ったためである。上映はしんみりとした様子で行われ、終幕の時には僅かな拍手が起った。上映を終えたフィルムは遺言通り彼の棺に納められ共に火葬された。

3

神楽坂の「カット」と言う声が響いたとき、灰島は文学部講義棟一階に設置されている自動販売機で百二十円で買ったブラックコーヒーを飲んでいるところだった。冬にもかかわらずアイスで飲んでいるのは、かっこつけではなく習慣を崩したくないためである。灰

島は自分の飲むものはアイスのブラックと決め、決めてしまえば雪が降ろうが風が吹こうがてこでも動かないといった頑固さがあった。「じゃあこれまでにしときまーす。お疲れでしたー」と言う神楽坂の怒鳴り声が聞こえてきて、辺りはざわついていた。五人に満たないスタッフが帰り支度を始めているのだ。いくら大学の小さなサークルの自主制作映画とはいえ、照明のようなものがあつたし、カメラもあつた。

「よう」とカッチンを持ったままの神楽坂が花壇の柵を椅子にしている灰島の元にやってきた。「相変わらず、ブラックだな」

「うん」

「彼女の演技、どうだった？ 彼氏としては」

「彼氏じゃない」と灰島は否定してから、「意味がわからん」と言った。

「そうか？ なかなかいい演技だったけどな」

「いや、内容が」といつてから、灰島は立ち上がった。近くに設置されてあつたゴミ箱に空き缶を捨てた。「これはヒロインが何か知らないけど不治の病に侵されて死ぬという話だと思うんだけど」

「死に面した少女が自分の人生をどう振り返るか、という話だ」

「でも結局死ぬんだよね。で、何で死んだ瞬間立ち上がって走り出したの？」と灰島は言った。ちょうどさっきまで撮影されていたシーンは、まさにクライマックスだった。少女は自らの命が短いことを悟ったとき、大学に入ってからやめた陸上への情熱を取り戻す。そして大学構内で練習を始める。目標の市民マラソンが目前に迫ったとき、しかし練習中に少女は、というシーンだ。

「走っているヒロインが心臓を抱えて倒れるよね。で、いい人生だったとか、そんな台詞が入るわけだ」

「感動のシーンだな」

「で、何故次の瞬間元気に立ち上がって走りだすんだ？」灰島が言った。「実は死んでなかったのか？ それともなんかのメタファーか？」

「メタファーってなんだ？」灰島の言った耳慣れない言葉を、神楽坂は訊ねた。

「比喻」と灰島は答えた。「例えば、彼女の魂はまだ生き続けている、肉体は死んでも魂は走り続けている、とか、そういう描写だったの？」

「なるほど、それは考えなかった」

「考えなかったって……」灰島は少し考えた。「あれは、……つまり、桃山が勝手にやったってこと？」それは確かに灰島にも渡されている脚本には書いていない。

「そりゃまあ、そういうことだ」

「それで、何でオーケイなんだ？」

「そりゃ、あれだ、彼女の魂が走り続けていたんだろう」

「適当だな」

「そういうなよ。臨機応変と言ってくれ」

「そもそも、この脚本、空白が多すぎるな」灰島はこの映画の脚本を取り出した。灰島の言葉どおり、この脚本はある意味では脚本とはいえない。まともに書かれているのは登場人物表くらいで、あとは必要最小限のことすら書かれていないという有様だった。登場人物の台詞として「――（俳優によるアドリブ）」としている部分さえあった。

「それに、ヒロインの恋人が出ていないな」と、灰島が指摘した。脚本には、ヒロインの恋人の名前が出ている。最後のシーンではヒロインは恋人の腕の中で息絶えなければならぬはずであった。

「それについては簡単だ。要するに、灰島のせいだよ」

「俺の？ よく意味がわからない」

「つまり」と神楽坂は説明した。

ヒロイン役の桃山が嫌がったのだという。「私の恋人といえばたった一人しかいませんからね」と。

「灰島が出演してくれていれば全て問題なかった」

「モブではでているんだ。勘弁してくれ」

もつとも、最大の問題点は桃山を主演にしたことだろう、と灰島は思った。桃山のような奇矯人がスタッフにいれば、まともなものが出るはずがない。

「そもそも、まともなものを作ろうという意味がなかったんだな」と、灰島は言った。

「それはあるかもしれない」と、神楽坂は頷いた。

神楽坂にしてみれば、そもそも、まともに映画を撮ろうという意思さえなかった。大学生活の一つの思い出として、自分がかねてから呟き続けている芸術とやらを作ってみようかと思ったただけだった。仲間内を語らって製作についたが、しかし誰もやる気はほとんどなかった。

映画制作に灰島修吾と桃山桃を巻き込もう、と提案したのも神楽坂だった。変人と名高い嵐山教授のゼミに所属している奇想天外娘桃山桃とその恋人――(?) 灰島修吾。そうした変人たちを出演させれば、自分たちの作ろうとしているものは芸術とやらになるのではないか、と思った。

「でも、今思えば失敗だったな」

「当たり前だ」

「勘違いするなよ。お前らを巻き込んだのは、よかったと思っている。俺の人生の中でも最高のフラインプレーだな。後悔してるのは、俺のやる気のなささ」神楽坂はカッチンをかチカチと鳴らした。「いざ撮り始めて見ると、何にもわからなかった。自分が撮っているものがないものかどうかも、それ以前に、俺に撮りたいものなんてあるのかってことも。毎日、撮り終えた映像を確認してて、思うんだ、ああ、俺何やってだろうって。観てて、なんだこの映像はって、みんなと爆笑して、冷静になってみると、ああすりゃよかった、こすりゃよかった、そんなことばっか浮かんできて。なのに、何がしたいのかも、わからなくてさ。ああ、もっとちゃんと準備しとけばよかったって、そう思うんだ。ああ、お疲れ」神楽坂の元に帰り支度を終えたスタッフたちがやってきた。「編集は俺が適当にや

つとくから、帰っていいよ。うん、また部屋で」

「灰島さん、帰りましょうか」片付けを手伝っていた桃山も、終わって灰島のところへやってきた。帰るといっても、この二人の場合は日本文学研究室である。

「悪いね桃山さん。俺はもう少しこいつと話があるから」と神楽坂が言った。

「えー、なんですか灰島さん。浮気ですか。こんな可愛い美少女を差し置いて冴えないめがね男子を選ぶんですか。ビーエルですか。もういいですよ。もう灰島さんの味噌汁作ってあげないんだから」

「いいからさっさと帰れ」灰島が言った。

「はいはい。灰島さんがいないんなら私も家に帰りますからね。灰島さん、また研究室で会いましょう」

「じゃあな」

「引き止めてもくれないんですね。いいですよーだ。それでは。キーン」桃山はアラレちゃん走りで去っていった。

「悪いな、灰島。嫌われたか？」

「別にどうでもいい。けど、話って？」

「いや、要するに、俺はお前らには感謝してるんだ」と、神楽坂が言った。「ええと、だから、俺が作ってるもん、俺らにはやる気がなかったって言っただろう。そう、それはその通りなんだ。それについては後悔してる。けどな、それでも、撮れてる映像はすごいんだ。なんか、画面から何らかの力がほとばしってるんだ。こっちが、圧倒されるくらい」

何故だと思う？ と神楽坂は言った。

「俺が思うに、被写体がよかったんだ。つまり、桃山さんがさ。あの子の力が、ファインダーを通して見てるこっちにまで伝わってくるんだ。なあ、そんな映像を、俺なんかが、俺みたいなお目人間が、撮ることができたんだ。それってさ、すごいと思わないか？」

「さあなあ」僕はあいつの顔は見飽きるほど見てるからな、と灰島

は言った。

「のろけるなよ。とにかく、俺、やっと、映画のすごさってもんがわかったような気がするんだ。映画ってのは、多分、なんだかこう、何かしらの力を見てる側に伝えることの出来るものなんだな。俺は今まで、芸術芸術って眩きながら、そのすごさに気づいてなかった。だからさ、この映画撮り終えたら、次の作品はさ、ちゃんと準備して、撮りたいもん見つけて、すげーもん撮ろうと思ってるんだ。いや、この作品もだ。脚本むちゃくちゃの駄目な作品だけど、編集がらばって、どうだ立派な作品だって、胸張れるくらいのもんにはしてやるつもりだ」

「そうか」灰島は眠たそうな表情で呟いた。神楽坂の熱意に押されたのか、それとも本当にただ眠いだけなのか、よくわからない。

「まあその、なんだ、がんばれよ」神楽坂は知らないことだが、この男が人に「がんばれ」などということは実は珍しいことなのだった。

4

波が寄せたり引いたりしている音を、神楽坂はむしろ意外なことのように聞いていた。何故彼らは飽きもせず寄せたり引いたりしているのだろうか。それはもちろん滑稽な感想だった。しかし神楽坂には大切な疑問に思えた。その疑問は確かに永遠に解き明かされることのない疑問だった。

ふと、次回作は海を舞台にするのがいいかもしれない、と思った。そうした想念は、これまでなんども浮かんできたことだった。高校生を描こう、SFにしよう、一大歴史スペクタクルを撮ろう。しかしそのどれも空に浮かぶ雲のようにつかみ所のない想念だった。

「なかなか、上手く行かないんだ」と神楽坂は言った。

何が上手く行かないのか、灰島は一瞬で五種類ほど思い浮かべてから返答した。「そりゃ、上手くいかんさ」

「何故だ」

「神様は意地悪だからな」

「灰島、お前神様なんて信じてるのか？」

「そりゃま、憎むべき悪党として」灰島はニヤリと笑って見せた。神楽坂はこの男が諧謔を言うのはどこことなく意外に思った。

「でも、何故そう思う。俺たちが悩んでいるのは神様のせいかな？」

「世の中はわからないことだらけだ。何千年も前から研究者たちは世の中の不思議を解き明かそうと研究を続けている。なのに、信じられるか、未だに世の中はわからないことだらけなんだ。それは何故か。答えは簡単だ。意地悪な神様が答えを隠してしまったんだ。だから、僕たちは探検家なんだ。神様が隠した答えを探す」

「探検家か。なんだ、やっぱり、文学者は言うことが違うな」

「僕は文学者じゃないよ。どちらかといえば評論家という。どちらでもろくでもないことには変わらない」

「もしかして、お前、俺を元氣付けようとしてるか？」

「してると思う？」

「わからない」と神楽坂は言った。桃山ならば、「まさか」と即答するところだ。

「要するに、映画が撮れないんだ」と、神楽坂は言った。「次回作を作りたい、と言ったのは覚えてるか？」

灰島は頷いた。桃山が出演した映画のクライマックスを撮り終えた日のことだ。

あの作品、『太陽は南に　　SUN　RISE　AGAIN』と撮り終えたあと、神楽坂と灰島、桃山との交流は途絶えていた。完成したDVDは二人の研究室に届けられ、灰島のパソコンで二人は観た。桃山は「おおっ」とか「ああっ」とか「灰島さんかっこいい」とか騒がしく楽しんで、灰島は観終えた後「わけわからん」と一言だけ呟いた。

それから全く神楽坂からの連絡はなかったし、強いて会う必要もなかった。

「あれから、自分がなにを撮りたいのか、考えてみたんだ」と、神楽坂は言った。「最初は、色々な案が浮かんだ」

しかし挫折した、と言った。

「どれも途中でわからなくなってしまっただな。俺の描きたいことはなんなんだろう。こんなもの描いて一体何になるんだろう。そもそも、俺にそんな資質があるのか？俺なんかに映画を撮るだけの能力があるんだろうか。そんなことばっか考えて、結局上手く行かないんだ」

「ふうん。なら、やめるしかないんじゃないか？」

「なんどもやめようと思ったさ。でも、無理だった。どうしても、撮りたくなってしまった。何とか、あの時つかんだものを、もう一度掴みたいんだ。どうしても。なあ、灰島、俺はどうすればいいと思う？」

「さすがにそれはわからん」灰島は苦笑した。しかし、この最初はふわふわしているだけだった友人に、好感を持っていた。「誰しも悩むとか、産みの苦しみとか、そういう慰めは、慰めにならないしな」

「ならないな。そんな言葉は、とっくに反芻している」

「桃山を撮ったらどうだ。スタートはそこだったんだろう」

当の桃山は、現在服を着たままで泳いでいた。

「いいのか、あれ」

「マナー違反ではあるな」

「じゃなくて、服濡れちゃうじゃん。服着たまま泳ぐのは危ないし」「溺れたら助ける。帰るときは、僕が着替えを買いに行くのか、濡れたまま歩いて帰るのか、それは帰るときの話だな」

「悟ってんなあ」

「どうかな」

桃山は、自分がしたいと思ったことは基本我慢できない性質なの

だ。基本といったのは、彼女にも自律心はあるということ。例えば、この場で服を脱いで泳ぐことはないということだ。桃山の思考回路がどうというより、自律の基準が人と違うのかもしれない、と灰島は思ったりした。

「あんな感じで映画撮ったら、完成品はむちゃくちゃになるな。事実、『太陽は南に』はむちゃくちゃだった」桃山を眺めながら神楽坂が言った。

「そこを何とかするのが監督だろう」

「そうだよ。でもなあ」神楽坂は空を向いた。こうもりはどこへ行ったのか、そこには空と雲しかなかった。「桃山さんは俺には大きすぎるよ」

それを言っただけ何も出来ない、と言おうとして、灰島は止めた。

「なら、お前にできることはなんだ？」

「そうだなあ、何が出来るんだろう。こうもりを撮ることくらいかな」

「こうもりが主人公の映画か。それはみてみたいな」

「そういう意味で言ったんじゃない」

「そうなのか？」灰島は心底不思議がっているようだった。この男も、どこか測り知れないところがある。

「撮るんだったら、いや、撮りたいのは、そうだな、宇宙の真理が撮りたいな。この映画を見とけば、なんか胸に響くものがあるっていう。そんなものが撮りたいんだ。でも、できそうもない。術がわからない」

「そうか」灰島は月並みな慰めを思いついた。この場合、月並みなことしか言えることがない。「月並みなことを言うが、人生は長いからな。気長にやるしかないさ」

灰島は立ち上がり、少し海の方に踏み出し、「桃山、いい加減上がれ。風邪ひくぞ」と叫んだ。

悟ってるようで、恋人の身を案じる灰島の姿が、神楽坂はなんだか妙におかしかった。いや、そもそもこの二人は恋人ではないのか。

といつて、ただの先輩後輩でもない。関係性もそうだし、個人としての不可思議さも、神楽坂には到底測ることが出来そうもない。

こうもりは、もういなくなってしまったが、もう少し海を撮り続けてみようと思った。映画への情熱も、もう少しだけ続けてみよう。行き着く先に何があるのかわからないが、しかし行ってみなければわからないじゃないか。

神様はいつだって意地悪なものなのだ。

神楽坂は大きく伸びをして、砂浜に寝そべった。春風を受けて少し眠った。

爆砕

0

その頃、桃山は灰島のことを「先輩」と呼んでいた。遠くで灰島を見つけたときは「あつ、先輩」と叫び、研究室でコーヒーを淹れるときは「先輩、砂糖とミルクは入れますか？」と訊ねた。

その時も、桃山は「いや、先輩、掃除も一段落して、ほんとうかっただすね」とコーヒーを淹れながら本を読んでいる灰島に声をかけた。研究室には八月の陽が差し込んできていた。

灰島修吾と桃山桃は芽姫大学という大学の文学部に所属している学生で、その中でも人が寄り付かない嵐山ゼミというゼミに所属している。灰島と桃山では灰島のほうが一年先輩で、他に所属している学生はいない。

芽姫大学では学生に二回生の秋までにゼミに所属し卒業論文の指導教授を決めることを義務付けている。ほとんどの学生は自分の専攻にあったゼミを選択する。英米文学がやりたければその教授を選ぶし、哲学がやりたければ哲学の教授を選ぶ。もちろん教授と学生には人間同士の相性というものがあるので、どうしても教授と合いそうにない学生は自分の専攻に近い学問の教授を選ぶしかない。

嵐山教授の専攻は、近現代日本文学である。そのためその分野に興味のある学生が集まってきそうなものだったが、しかしそうではなかった。それは彼の人柄に問題があったからで、その授業内容から彼のゼミを志望する学生はほとんどいなかったし、もしいたとしても面接の時点で逃げ出してしまった。

もともとそれでも問題はなかった。

芽姫大学にはもう一人、近現代日本文学を専攻する准教授がいたからで、そちらは人気があった。その准教授、七瀬の講義は丁寧でわかりやすく、人当たりもよかった。さらにそれを読む学生はほとんどいなかったが、彼の書いた論文は卓越した構想と綿密な考証に

基づいた論文であると、各地で絶賛されていた。

嵐山は授業を休講にすることが多かったし、もし開講されたとしても早口で何を言っているのか学生にはわからなかった。もし学生の中に彼の早口を聞くことが出来た者がいたとしても、その飛躍の多すぎる理論を理解できるものはいなかったに違いない。さらに嵐山は、彼のゼミに所属したいと面接を受けにきた学生に対して、第一声に「この世の真理とはなんぞや」と語りかけた。そして学生が面食らっているのにも目もくれずものすごいスピードで嵐山が現在考えている理論を語り尽くすのだった。学生は最初嵐山の言うことを理解しようとし、やがて諦め、眩暈がしてきた頃に席を立ち、静かに研究室を立ち去り二つ隣にある七瀬准教授の部屋をノックするのだった。

灰島という学生は、その例外のうちの一人だった。もともと、灰島にはおよそ教師というものは必要なかった。彼はたった一人で論文を書くことが出来たし、研究とは一人でするものだと思っている。だから、灰島が嵐山ゼミを志望したのは、嵐山教授の教えを受けたいからではなかった。むしろ嵐山ゼミなら教授からの無用な干渉を受ける必要がないとでも思っていたのかも知れない。

彼が嵐山ゼミに入ったとき、そこに所属しているものは誰もいなかった。だから灰島には先輩も同輩もいなかった。ついでにいえば、彼はまともな部活やサークルには所属していないため、その点でも先輩も後輩もない。

半年余り、そんな悠悠自適の一人ゼミを過ごした後、もう一人、嵐山ゼミを回避しなかった例外が現れた。

それが桃山である。

灰島は基本的に、「灰島」という彼の姓でもって彼を呼んでくれることを願っていた。というのは、彼の名ではあまりにも彼そのものでありすぎて気恥ずかしいし、といってその他の呼称では彼自身から乖離しすぎているような気がしていた。だから基本的に彼の友人たちは「灰島」か、それに「さん」や「くん」をつけた形で彼の

ことを呼ぶ。

しかし桃山だけは、どうしてもその要求を聞き入れてくれなかった。

桃山が初めて灰島のことを「先輩」と呼んだとき、「僕のことは、出来れば灰島と呼んでもらいたいんだが」と灰島はいった。

「わかりました」と桃山は言った。しかし、いつまで経っても桃山は彼女にとって先輩に当たる人物を「先輩」としか呼称しなかった。彼女がある特定の人物をただ「先輩」と呼ぶことは、あるいは不都合を生じそうなものだったが、しかしそこは問題なかった。つまり彼女には、他に先輩と呼称すべき相手はいなかった。つまり、灰島と同じく桃山も他の集団に属していない人物だったのである。

桃山がいつまで経っても先輩の呼び方を改めない理由はわからなかった。灰島は一度問いただしてみたが、「申し訳ないです、ただの不注意です。以後気をつけます、先輩」という答えが返ってきて、その瞬間、灰島は桃山からの呼称を改めることを諦めた。

その代わり、風変わりなことを言った。「わかった。好きに呼んでくれ。ただし、君が呼び方を改めてくれない限り、僕も君の事を後輩と呼ぶ」

これは多少の嫌がらせになるかと灰島は思っていたが、「そうですか。なかなか素敵な呼び方ですね」と桃山は涼しい顔をしていた。この頃には灰島は桃山のことを常識と言う言葉で測ることを止めていたので、そんなもんか、とたいしたダメージもなかった。

そんなことがあったので、灰島は暫くの間呼称について考えていた。思考は彼の癖のようなものだった。灰島は何か行動をするとき、その行動がどういう結果を引き起こすのか予め考えてから行動するような人間だった。彼は呼吸をするように思考をするし、考えるべきことがないときは何故空は青いのか、といった差し当たって必要のないことまで考えた。

この頃の彼の命題は、要するに「人が人の名前を呼ぶということはどういうことなのか」というようなものだった。

窓の外からは蝉の声が騒がしく響いてきた。

桃山の言葉を聞いて、灰島は本から顔を離した。「ああ、終わってよかった。後輩も結構手伝ってくれたな。意外だった」

「ひどいですね。私だってやるときゃやるんですよ」

「そうあってもらいたい」いいながら、灰島は桃山からコーヒーを受け取った。通じているもので、灰島は何も言っていないのに桃山はコーヒーに何も入れていない。

桃山が席について灰島はコーヒーを一口啜った。そのあと「なあ後輩、いい加減先輩と言う呼称は止めないか？」と言った。

「またその話ですか」楽しそうに桃山もコーヒーをのんだ。「だって、先輩だって、私のこと後輩って呼んでるじゃないですか。私にだって、桃山って名前があるんですよ。これはお互い様ってモンじゃないですか」

「だからそりゃ……」そっちが先にはじめたことだ、と言おうとして、やめた。いい加減自分も諦めが悪すぎると思った。

「でも、先輩って呼称がありえるのに、後輩って呼称がありえないのは何故だろう」と灰島が言った。

「何の話です？」と桃山が相槌を打った。

「つまり、先輩っていう呼びかけは世の中にあるけど、後輩っていう呼びかけはないよな。誰々先輩のことを先輩と呼びかけても、誰々後輩のことを後輩と呼びかけることはない。同じ関係をあらわす言葉なのに、何故差が出るのか」

「思索ですか」と桃山は言った。「大学生っぽいですね」

「おそらくそれは、敬いの差だ。先輩という言葉には尊敬の意味が込められているけど、後輩という言葉にはない。それは先輩という意味自体が敬うべき対象であるのだから、センパイという音がどうこうとかいう話じゃない。つまり、何故敬うべき相手を、その関係性を表す言葉で呼びかけることが出来るのか、ということになる」

「そうですね」わかっているのかいないのか、とにかく桃山は相槌

を打った。こうした相槌は、会話をする上で実はもつとも大事な要素なのかも知れない。

「それは、もしかしたら日本人は名前を忌む習慣があったからかも知れないけど、詳しくはないからそれは置いておく。むしろ大事なのは、何故名前を忌むか、ということだ。それも、尊敬すべき相手の名前を。つまり、名前を呼ぶということは、相手自身をダイレクトに差してしまうことだからだろうな。生の相手自身全てを」

「そうですか」

「そうだと思う。呼ばれた相手は、いい気はしない。どころか、名前が自身そのものを差すことだとすれば、名前を呼ばれるということとは、自身を支配されているようなものなのかも知れないな。だから、日本人は名前を呼ぶことを避ける。代わりに、通称を用いたり、関係性を表す言葉を用いたりする」

「要するに、私が先輩のことを先輩と呼ぶのは、先輩を敬っているということになるのですね。素晴らしいじゃないですか」

「僕はそれを望んでいない」

「なら、修吾、と呼びましょうか？」

「それは気恥ずかしすぎる」

「いいじゃないですか。ねえ修吾、私のことは桃って呼んでいいですよ」

「勘弁してくれ」

灰島はコーヒーを啜った。甘味の全く入っていないそのコーヒーの苦味に、灰島は顔をしかめた。

1

深夜の大学は寝静まっていた。

大学といえば研究や論文執筆なんかで徹夜する人間が多く、世間とは違いもっと賑わっているものかも知れぬと思っていたのだが、案外そうでもなかった。夏休みに入って早々ということも大きな要

因かもしれない。誰が好んで深夜の大学などに残っているものか。もちろんいくつかの研究室と思われる場所から明りが洩れ出ていたりもして、外から見ていてそれらは星にも似た趣を感じさせるものではある。

もちろん本物の星々のほうが綺麗だ。

今、薄暗い構内を歩く平林とすれ違うものは誰もいない。

どこか遠くから、蟬の鳴き声が聞こえていた。一匹だけ、まだ寝入っていない蟬がいるのかもしれない。

心臓の鼓動が聞こえる。

あまりに強く打つので、血管を突き破りやしないかと平林はハラハラした。

深呼吸をした。

大丈夫だ。

侵入するのは簡単だった。校門は確かに締められていたものの、乗り越えるのは簡単だったし、なんなら四囲の塀を乗り越えたっていいのだ。自転車はいつもとは違い、外の歩道に置いている。駐輪場の門も閉まっていたからだ。

静かだった。

あまりにも、静かだった。鬼の世界に來たかのように、何も聞こえない。時おり、大学の側を走るトラックの音が趣を妨害する。それさえなければ最高の空間だった。簡単にいえば、人声がない。

いつものキャンパスは、こうではない。平林にとって、そこにはあまりにも多くの人びとが棲息していた。彼らはいつも何人もの群れを作って楽しげに語らっているのだ。そしてその光景は何故か平林の孤独感を促進させる。

やつらはいつでも楽しげで、充実していて、対して俺は孤独だ。

寂しさは平林の敵意を呼び起こした。

理由もなく、人間を憎んだ。

平林が一人で歩いているとき、後ろを歩いていた女学生が哄笑する。それだけで平林の神経ははちきれそうになった。

おそらくやつらは俺を笑っているのではないだろう。

しかしそうは思っても、平林はその笑いを彼への嘲笑と感じてしまふのだ。

そもそも、何の希望もなく入った大学だった。勉強が好きだったわけでもなく、かといって就職する気もなかった。一応進学を希望していたところ、平林の学力で行けそうで、かつ学費の安い大学として、担任の先生が紹介してくれたのが芽姫大学だった。それまで、地方都市の大学である芽姫大学の名前など聞いたこともなかった。それでも、モラトリウムのために入学した。そのため研究に情熱を感じていたわけでも、合コンやサークル活動が目的だったわけでもなかった。

大学生活が始まって、平林は孤独を感じるようになった。概論のような講義形式の授業は他人と話す機会もなかったし、演習のように少人数で行う学生の討論に主眼をおく授業は、なるべく取らないようにし、取らなければならない場合は出来るだけ目立たないようにした。他人と話すのは苦手だった。

あまりにも寂しくなると、平林はサークルに入ってみた。Pボール愛好会とか何とかいったそのサークルは、実際はスポーツをやることもなく飲み会だけを開催していた。一度だけ平林は飲み会に参加してみたが、それでも孤立した。皆サークル内の仲良しグループとだけ会話して、平林と接するものは誰もいなかった。居たたまれなくなると、平林は早々に退散した。店を出るとき、背後からサークルの人々の楽しそうな笑い声が聞こえてきた。

大学生活を続けるうちに、平林は少しずつ絶望を育てていった。大学には平林を知っている者は誰もおらず、平林を必要としてくれる人間は誰もいなかった。

大学に行くたびに孤独を感じ、死にたいと思った。家でゲームと接しているときだけが安らかだった。それでも引き籠もりになることなく、大学に通い続け、単位もきちんと取ってきたのは社会に所属するものとしての義務感としかいいようがない。

勉強は楽しくなかった。レポート提出を命ぜられるたび、何を書けばいいのか全くわからなかった。それでも死ぬ思いをして書けば単位はくれた。大学とはそういうところなのかも知れない。

やがて、平林の中で何かが切れた。

最初は、冗談半分だった。それでも、情報は簡単に手に入った。本気になって調べれば、その程度の情報は簡単に手に入る。

次第に熱中した。冗談と思いながらも、やめられなかった。怖さはなかった。むしろ絶望へと向かう退廃の快感があった。夏休みになれば決行することを決め、前期の授業は始めて何個か単位を落とした。

夏休みに入っすぐ、それは完成して、平林は今深夜の大学を歩いている。

目標は、あのサークルの部室だった。あのサークルに入ったことが全ての始まりで、全ての元凶なのではないかと思った。もちろん、それが嘘だという事は平林自身にもわかっていて。実際としては、何でもいから目標が欲しかったのと、部室なら手ごろな大きさかと思っただのが理由だった。

大学は暗かった。

電灯が何故かついていない。深夜だから電源を切っているのか、それとも電球が切れてしまっているのかも知れない。

妖怪でも出るんじゃないかと思った。

怖さはないはずだったが、さすがに体が震えていた。

蟬の声が耳の間近で聞こえた。

世界は回っているのかもしれない。

目標の建物にたどり着いた。

あのサークルの部室は、上手い事に一階にある。もちろん鍵がかかっているので、入り口から入ることは出来ない。窓を探して、石をぶつけて割った。ガラスは不協和音を立てながら粉々になった。いいよだ。

平林は窓から室内に入った。薄暗くて何も見えない。近くにあっ

た机に、持って来たものを置いて、すぐ部屋からでた。
充分に、距離をとった。どう考えても、ここなら巻き込まれることはない。

今日最大に鼓動が強まった。息が切れ切れになり、口の中はからだった。

それでも、やめる気はしない。

平林は持って来た物のもう一つを取り出し、それにあるボタンを押した。

2

灰島が「タイムマシン」という概念は浦島太郎物語における亀に由来する」という説を嵐山から聞かされたのは、灰島が嵐山ゼミに入って間もない、まだ暑さの残っている頃だった。SF研究部部室だと紹介されたブラック小屋の外からは秋の虫の声が聞こえてきた。

世界にタイムマシンという概念が生まれたのがいつか実際のところよく知らないが、H・G・ウェルズが同名のタイトルの本を出したのがもつとも有名な初出なのではないかと思われる。以後、タイムマシンの物語を人類は多数創造してきた。

有名なところに『Back・To・The・Future』などがあるが、日本でタイムマシンという概念を広く人口に膾炙させているのはなんといっても『ドラえもん』の存在だろう。かの国民的アニメのおかげで、タイムマシンと言われてピンとこない日本人はおそらくほとんど存在しない。

灰島にも、タイムマシンについての見識はその程度しか存在しない。しかし、彼も嵐山教授の説はいくらなんでも飛躍しすぎていると思っっている。ウェルズで何ら問題ないだろう。

灰島が嵐山から彼が顧問を務めるSF研究部に入ってくれと頼まれたのは、その数日前のことだった。嵐山と何か雑談をしていたときに、思い出したように頼まれた。

これを聞いて、灰島は、へえ、と少し意外に思った。嵐山のような人間がサークルの顧問を務めているとは思わなかったからである。しかし、サークル入部の誘いは断ろうと思った。何かに所属している自分は想像できない。

しかし、嵐山は言った。

「いや、名義だけでいい。結局のところ、研究は自分一人でやるから」

「一人で？」灰島はその言葉が気にかかった。確かに「SF研究部」と銘打っているからには、研究を行うのだろう。顧問ならばその研究の手伝いをすることもあるだろう。しかし、何故顧問一人で研究するというのだ。

「どういう意味ですか？」

「どうもこうも、部員がいらないだけの話だ」

つまり、芽姫大学に存在するSF研究部なるものは、顧問だけが存在して、部員は一人も存在しないらしい。聞くところによると、創設当初は部員は存在していたらしい。当たり前だ。しかし、彼らはもう卒業してしまい、以来部員は空のままだそうである。顧問だけの部というものが許されるのかどうか、灰島は知らない。

「ああ、だからこそ、名義だけでも僕に入部して欲しいのですね」

「そういうことだ」と嵐山は頷いた。あるいは、誰も入部しないのは顧問の嵐山の人柄を敬遠してのことかもしれない、と灰島は思った。ゼミと同じである。

「そんなことなら、いいですよ」と灰島は快諾した。そういういかがわしい部活こそ、むしろ自分のようなものにはふさわしいのかも知れないと思った。

しかし、一体何の研究をしているのか。

「タイムマシンを作っている」と言われたとき、さすがに灰島も少し驚いた。

「タイムマシンですか」

それがどういふものなのか、灰島は詳しくは知らないが、それが

未だ作られたことのない夢の産物であることは知っている。

「しかしそれは、相対性理論、つまり物理学の範疇なのではないのですか？」嵐山の専攻はあくまでも文学であり、物理学の研究に勤しむ謂れはない。

「そうだな」

と、何でもないように嵐山は頷いた。おそらく学問の境界など、嵐山には芥のように意味のないことなのだろう。

「しかし何故そんなもの作ろうと思ったのです？」

「色々あったからな」とだけ言って、嵐山は口を閉ざしてしまった。色々というのが何を意味するのか、灰島は知らない。『タイムマシン』を読んで感動した、も「色々」だし、ある日突然天啓が降りてきた、も「色々」である。そこにいかなるドラマが存在するのか、しないのか、灰島には興味がない。

しかしSF研究部に入って、というよりも嵐山を師匠に選んだことで、少しだけわずらわしいことがあった。というのは、嵐山の研究の雑用をやらされることがあるのだ。文学研究の手伝いをやらされるのならともかく、何故かタイムマシン製作の手伝いをやらされた。

と言っても、時々呼び出されて嵐山のおやつを買いにいかされる程度のことではあった。

SF研究部の部室は、大学内の隅、全く目立たないところに存在する。芽大には部活やサークルの部室の集まった、クラブハウスのようなものが存在しているが、SF研の部室はそこにはない。クラブハウスは多少がたついているとはいえとはいえコンクリート造りの、それなりにしっかりした二階建ての建物なのだが、SF研はその横に存在している。台風が来れば比喻でなく飛んでいきそうなバラック小屋で、しかも見ていて悲しくなってくるほどに古びている。さらにその隣に存在する、かつて使われていた焼却炉のせいなのか、側面が炭で真っ黒に染め上げられていた。SF研が部員なしでも部屋を与えられているのは、ひとえにこの小屋の存在のおかげだった

だろう。どんなマイナーなサークルであつたとしても、このボロ小屋は辞退したに違いない。

中也壁面が錆び付いている上にやけに埃っぽく、さらに雨が降れば雨漏りがし、風が吹けば建物全体ががたがた鳴った。

中には嵐山が持ち込んだと思われる机と椅子があり、嵐山は普段ここに座りノートに何か書き込んでいる。さらには木製のベッドが置かれており、どうやら嵐山はここで寝起きしているようだった。他に、地面は土足で歩いているにも関わらず、嵐山が読み散らした本が所狭しと散らばっている。その中には得体の知れないガラクタも多数あるらしい。

しかし何よりも目を引くのは、部屋の中央に置かれた妙な物体だろう。それは四つの車輪を持っており、その上に座席を持っている。その様はカーレース用の一人乗りの車に似ていた。違うのは、ハンドルが置かれるべき場所に、数字のボタンがついているコンピュータのようなものが置かれていることだろう。それはむしろガンダムのコックピットを思わせた。

灰島は一目見た瞬間、これが嵐山教授の研究しているタイムマシンなるものかと思った。

「まさかこれ、動くんですか？」

「動くわけではない」

嵐山によれば時間を超える理論すらまだ定まっておらず、この妙な物体は行き詰まったときの息抜きで作ってみただけのものであるという。「将来のタイムマシンの、モデルのようなものだな」

このタイムマシンモデルは未完成であるらしく、この後も灰島は嵐山に命じられて度々部品を買いに行かされたりもした。

そうこうしているうちに一年が過ぎ、桃山が嵐山ゼミに入った。

桃山もまた、SF研究部入部を命ぜられ、桃山は「それは面白そう！」と二つ返事で承諾したのだった。

SF研について灰島はあまり関わらないようにしていたのだが、桃山はそうでもなかった。

「タイムマシン！」と彼女は初めて部室に入ったとき嬉しそうにはしゃいで、タイムマシンモデルに座って無造作にボタンを押したり座席を叩いたりした。彼女の提案で二本のレバーが取り付けられることになり、ますますガンダムに近づいた。しかしやがて飽きて座席に座ることはなくなった。時間を超える研究を手伝うのかとも思ったが、そちらには興味はないらしかった。むしろ、「師匠、もし完成したら私を一番に乗せてくださいね」と言ったりしていた。

そんなことより灰島が驚いたのは、「こんなに汚いのでは、師匠の余命に関わります」といい、桃山が小屋を掃除しようと言いつたことだった。この後輩は他人のために活動することもあるらしかった。もつとも、「では先輩、手伝ってください」と言われたのは閉口した。手伝うのは百歩譲っていいとしても、むしろ自分が主体となってやらなければならなくなるんじゃないか、と予想した。もちろんそれは現実となった。

灰島はまず、ゴミは全て処分することにした。教授は一切手伝ってくれなかったが、そんなことは端から期待していなかったので問題は無い。それより、ゴミだかなんだかわからないものを処分していいか訊ねても、「うん、わからんなあ」としか言わないのが問題だった。ゴミだかなんだかわからないものはたくさんあった。仕方ないので灰島はそれも全て処分することにした。

ある時、本の山の中から黄色いファイルが出てきたので、これも訊ねた。

「教授、これは処分しても？」

「む。ああ、ああ、それはいかん」と珍しく教授が慌てた。「それは研究成果をまとめたものだ。そいつがなくなったら研究を続けられなくなるところだ」と、灰島の手からそのファイルをひったくった。

そんなもの地面にほっとくな、と思ったが、怒る気にもならなかった。

もちろん掃除は一日で終わらせたのではなく、日々の合間の気が

向いたときにだけ行われた。

そのため、教授がいないときに掃除することもあった。そんなときは灰島が独断で捨てたり、あるいは使えそうなものは日本文学研究室に摂取したりした。そのため研究室には大量の使いかけの鉛筆やメモ帳や付箋やのりが置かれている。

ある日、桃山が写真立てを見つけたりもした。

「先輩、これは捨ててもいいでしょうか」

「よくないだろう」

見ると、幸せそうな一組のカップルが陽射しの中で微笑んでいる写真だった。

「誰でしょうか。師匠でしょうか」

「さあな」

そこに写っている男性は若く、嵐山の面影があるような気もするが、同一人物だと断定することは出来なかった。というのは、嵐山は不精から髪も髯も伸び放題なのに対し、写真の男性は身だしなみを清潔にしていたからだ。

「教授に聞いてみればいいだろう」

「駄目です」と桃山は言った。「こんな大事なものを、放っておくのが悪いのです。これは罰として研究室に保管しておきます」桃山の意地悪だった。可愛げのある意地悪かと思ひ、灰島もやめさせなかった。

あらかた片付けた後、丹念に雑巾がけを行い埃を取り除いた。それからカーペットを買ってきて敷き、土足禁止にした。壁も出来る限り拭き清め、上から新しいペンキを塗った。大量の本は本棚を買ってきて全部そこに収めた。

「これくらいでいいだろう」

「いやあ、頑張りましたね」

終了までにずいぶんと時間がかかったが、おかげで多少は住みやすい小屋になったかと思った。もちろん嵐山は礼を言うこともなく、ひたすら自分の研究に没頭していた。礼が欲しかったわけではない

ので、灰島にも桃山にも不満はない。

3

平成××年八月四日午前三時十八分、芽姫大学SF研究部部室から火の手があがった。爆発音を聞いて駆けつけた学生によって119番がなされ、やってきた消防隊によって消火が始められ周囲へ延焼する前に火は消し止められたものの部室は全焼し見る影もなくなった。焼け跡の調査から火災は何らかの爆発物によって引き起こされたものと考えられ、警察によって犯人の捜査が開始された。

4

世間は夏真っ盛りだった。

道路では車が排気ガスを撒き散らしながら行き交いアスファルトの上には陽炎が立ち昇っていた。歩道では、プールへ急ぐ小学生の集団が自転車に乗って通り過ぎていった。

灰島は芽大の生協で缶コーヒーを一つと、アイスクリームを二つ買った。灰島の信念のようなもので、コーヒーはブラックである。それらを持って、SF研の部室に向かった。生協を出た瞬間、熱風が灰島の体を包んだ。ツクツクホーシの声がやけに耳に騒がしく響いた。

SF研の前には桃山が待っていた。いつもは騒がしい彼女だが、さすがにこのときはばかりは悲しげに沈黙していた。その視線の先、SF研の机があった場所には嵐山が深沈と座り込んでいた。

「あ、先輩」灰島を見つけた桃山が駆け寄ってきた。「あ、アイスですね。私へのプレゼントですか？　ありがとうございます」

「差し入れだ」灰島は持っていたアイスの一つを桃山に渡して、嵐山の方を見た。「教授は、相変わらず？」

「ええ、ずっとあのままです」桃山は頷いた。「ショックだったん

でしょう」

S F 研爆破があつて既に数日が経過していた。さすがに部室全てを吹き飛ばすほどの威力はなかったらしく、小屋の姿形は残っていた。

しかし、元々頑丈でなかった小屋は、屋根と壁面が半分吹き飛び、残った壁も床も真っ黒に焼き尽くされてしまっていた。本棚にあった本はほとんど焼失してしまい、形が残っているものも黒焦げて全く読むことが出来ない。爆弾が置かれていたらしい机はもっとも被害がひどく、文字通り粉々になって見る影もなかった。その横にあったタイムマシンモデルも同じく粉々になってしまっていた。

灰島は進み出て、黒焦げのS F 研に入った。灰島の周りに灰が舞った。

「教授」灰島は嵐山に声をかけた。「差し入れです」

「うん」嵐山は返事はしたものの、顔を向けなかった。

「アイスです。暑いから、食べないとすぐ溶けちまいますよ」

「うん。灰島君か」漸く嵐山は振り向いた。「君はなかなか気が利くね」

「教授には借りを作ってばかりです」灰島はアイスを渡した。「返してもらえとも思ってますが」

「師匠、いい加減元氣出してくださいよ。そんなにショックだったのですか？ タイムマシンなんぞ、また作ればいいだけの話じゃないですか。師匠なら簡単でしょう」桃山も灰島について入ってきていた。

「桃山君か。うむ、その通りだ」と嵐山は頷いた。

「後輩はこいつのことを言ってるんだらう？ 教授の落胆はこいつのせいじゃないよ」灰島は顎で、傍らにあった車輪のついたガンダムのコックピットを差した。「確かにこんなもんはまた作ればいい。これはある意味ではガラクタみたいなもんだからね。けど、教授には取り戻せないものがある」

「なんですか？」

「ファイルだ。教授の研究をまとめた」灰島は言った。ファイルとは、片付けのときにでてきた黄色いファイルのことだった。嵐山はルーズリーフに何か書きとめるたびに、そのファイルに綴じておいた。そのファイルは、ちょうどあの夜机の上に置いていたため机とともに焼失してしまった。

「複製しておかなかったのは研究者として迂闊でしたね。多少面倒くさくても」

「けど、師匠ならメモしたことくらい覚えているのではないですか？ 天才ってそのくらい出来そうな気がしますけど」と桃山が言った。

「桃山君、それは違う。私は天才ではない。ただの研究者だ。閃きは、保存しておかねばすぐに消去されてしまう。おそらく私の記憶力は、常人のそれに劣っているだろう」と嵐山が言った。

「しかし灰島君、君はなかなか頭がいいが、しかし君の言ったこともまた間違っている」

「何がですか？」

「私が失ったものだ。それは情熱だ」と、嵐山が言った。

「私はタイムマシンが出来ようが出来まいが、そんなことはどうでもよかった。ただ研究することに価値があった。研究を続け、閃きを得たときだけが至福の瞬間だった。今、私は研究を続ける手段を失った。もう私に情熱は戻ってこない」

「お言葉ですが、教授の本分はタイムマシンにありません。教授は文学専攻ではないですか」

「その通りだ。文学もまた、私にとって深遠なる樹海だった。私は夢中になってそこを探索した。しかしあるとき私の情熱は別に移ってしまったのだ。つまりタイムマシンだ。そして私の志向は、一度捨てたものには二度と向かないのだ。どうやらそういう性格らしい。私はもはや文学を捨てたのだ。そして今、タイムマシンも失った」

灰島は嵐山の言葉に異論があった。嵐山の言い分を認めれば、現在嵐山は文学研究を全くしていないことになる。年に一本の論文も

書かないで、教授を続けていられるものなのか。

しかしこれ以上言っても意味のないことだと思い、灰島は口に出さなかった。

代わりに口を開いたのは桃山だった。

「なににせよ師匠、こんなところにいつまでも座っていたら駄目ですよ。健康に悪い」

桃山の言葉の通り、嵐山はもう数日もこの場所に居座っている。居座ったままで、ただぼんやりとだけしている。その間食事に立つ様子もないので、それは灰島と桃山が運んでやっている。

睡眠もとることはない。ぼんやりとしていて、やがて肉体が耐えられなくなると気絶する。覚めればまたぼんやりとしている。一体これが生きた人間なのだろうか。

「いい加減、人間らしい生活をしないと、師匠、ほんとに死んじやいますよ」

「生きてどうする」と嵐山は言った。「生きてどうするんだ」

「簡単ですよ、そりゃ——」桃山は言いかけて、やめた。「——そうですね。どうしましようか」

横で聞いていた灰島も、その答えを考えてみた。少なくとも嵐山にかけてやるべき答えは考え当たらない。もしかしたら桃山は自身に関する答えは持っていたかもしれない。しかし嵐山の身になってみると、言えることは何もないのだ。灰島は、自身に関してのその答えさえ、持っていなかった。

しかしさすがにこのままにしておくわけにはいかない。生きているうちには、理屈では割り切れない場面もあるものなのだ。

「後輩、ちょっと手伝え」灰島は彼の敬愛する師の脇から手を差し込んだ。彼の後輩はすぐ先輩の意図を汲み取り、阿吽の呼吸でその師匠の足の方に回った。

かの変人教授はその弟子たちによって持ち上げられ、運び去られたのであった。教授は諦めたような表情を浮かべ抵抗しなかった。

参ったなあもう、今度ばかりはほんと自分が嫌になった。どうすりゃいいんだろうなあ、どうしようもないんだろうなあ。一体、世の中に俺ほど惨めな人間があったもんか。能無しの上に愛嬌も無し、夢も希望もありゃしない。一体誰が悪いんだ。誰を恨めばいいんだ俺は。神様なんてものがあるんなら、それはきつと悪党さ。俺のような、惨めで馬鹿で駄目な人間が、のた打ち回るのが楽しいんだ。またあいつがへましやがったなんて、腹抱えて笑ってやらあ。憎めるもんなら憎みたいけど、残念ながら俺は無神論者だからなあ。平林は寢床にもぐりこんでから、延々とあれこれ考えていた。途中から悲壮な気分が増えてきて、その考えが口をつくようになっていた。ハムレットのような悲劇の中にいるような感傷が平林を支配していた。

平林は爆弾を仕掛けた日、興奮のせいでその日は眠れなかった。夜が明けて早々、彼は授業もないのに大学へ出かけた。爆弾を爆発させたとき、さすがに体が震えてその様子を見ることが出来なかったからだ。しかし確かに爆弾は爆発し、建物は崩壊したはずだった。崩落の大音量で、近くの民家から野次馬が集まってきたかもしれないが、それすら平林にはわからなかった。ただひたすらに闇の中を真っ直ぐにかけて帰った。

自分が仕掛けた爆弾は一体どういう状況を引き起こしたか。クラブハウスをどの程度崩壊させ、どの程度周囲の耳目を集めているのか。平林が何より気にしたのは、警察が動いているのかどうかだった。

大学に向かった平林は、確かに警察の姿を目にした。数人の制服姿の男たちが、きびきびと何かを探すように動き回っていた。学生の姿も見られたが、疎らにしかないのは、今が早朝のためと、夏休みに入っているからだろう。研究など、何らかの理由で大学に来ているものしか、まだ爆破事件を知らないのだ。

しかしその前に平林が驚いたのは、彼らがいた場所がクラブハウスの隣だったからである。当のクラブハウスは、胸をそらせるかのようにでんと聳え立っている。代わりに崩壊しているのは、その隣のちんまりとしたバラック小屋だった。

その光景を見た瞬間、平林は混乱した。一体何が起こっているのかわからなくなった。というより、平林のある部分は正確にこの状況を理解していただろう。しかし平林の理性は理解することを拒んだ。自分が一体なにをしてしまったのかわからない振りをした。

要するに、平林は爆破する対象を間違えたのである。

あの夜、平林は自分がかつて所属していたサークルの部室に忍び込んだつもりが、実は隣のバラック小屋へ侵入していたのである。そしてそこに爆弾を仕掛け、爆破させた。大破したのは当然バラック小屋のほうである。

かつてこんな間抜けな爆破犯がいただろうか。

平林は、あるいはこの光景は自分が現出させたものではないのかもしれないと思った。つまり、自分が仕掛けた爆弾は何らかの不具合で爆発せず、同時に誰かが隣のバラック小屋に仕掛けた爆弾が爆発した。そんな可能性だってあるじゃないか、それならば自分は無罪だ。

もちろんそんなことがあるはずがない。

その程度のことは平林にもわかっているのだが、どうしてもそんな逃げ道が頭に浮かんでくる。あり得ないと何度も打ち消しながらも、次から次と卑怯な考えは浮かんでくる。

一応、と言い訳しながら隣のクラブハウスを確かめると、自分が割ったはずの窓ガラスすら綺麗に無事なままだった。

どう考えても、バラック小屋を爆破したのは自分しかない。

平林はフラフラしながら家に帰った。帰りながらしきりに「俺のせいじゃない」と呟いていた。もちろん、その呟きを論理づける材料は何もない。

帰ってから、平林はテレビゲームのスイッチを入れた。やりかけ

のRPGが起動した。平林は一心不乱になってそのゲームをやった。逃避であった。

昼前になってやけに眠気を感じたので、セーブして寢床に着いた。よく考えれば前夜から一睡もしていなかった。そのためすぐに夢の中に逃れることが出来た。

それからずっと、逃避している。逃避しながら考えることは、どうにもこうにも馬鹿げたことばかりだ。明日隕石が落ちてきて地球が消滅すればいいのに。宇宙が爆発して全て無になってしまえばいいのに。そんな小学生のような空想だ。

人は何故生きているのだろう。生きることには理由があるのだろうか。そんなことばかり頭をよぎる。陳腐な悩みだ。恐らく考えたことのない人間はいないだろうというくらい、月並みな考えだ。それでもずっと考えている。

もちろん、行き着く場所は決まっている。

わかってはいるのに、何度も考えている。恐らくそれは、「死にたい」という思惟の代わりなのだろう。しかし真正面から死にたいといえるほど覚悟はない。だから、生きることには疑問を投げかける。投げかけることによって、生を否定しながらも生を肯定する。しかしだからといって、その疑問に解があるわけではない。解を得られないまま、それでも何度も考える。全く生産性のない活動だ。

生きることには理由はあるのかって？ 答えは簡単だ。

「理由はない」

なら何故生きる？

「死ぬのが怖いからさ」

相も変わらず蝉は鳴き続けている。かつてSF研があった場所の隣には、一本の大樹が聳え立っている。それはほぼ垂直に落ちてくる陽射しを遮って、枝葉が淡い影を地面に投げかけている。それらは微かな風にも大きく動揺してきらきらと輝いていた。

蝉はこの木の幹に止まっているらしい。

平林は自動販売機で買ったコーラを飲みながら、SF研の廃墟を眺めていた。額から頬を伝って流れ落ちる汗が心地よかった。

爆破事件からもう数日が経過していた。警察はすでにここから去っており、それぞれ地道な作業に戻ってしまったらしい。捜査がどの程度進展しているのか知らないが、少なくともまだ平林には至っていない。

警察に捕まることに對する恐怖はあまりなかった。もう全てがどうでもいいという心境だった。警察がやってきて自分の腕に手錠をかける光景を想像することに、微かな快感があった。それは爆弾を爆発させた瞬間に感じた快感に似ていた。

崩壊に對する退廃の快感だ。

崩壊したSF研に對して、平林はどういう感情を抱けばいいのかわからなかった。謝りたいなら自首すればよかったし、そもそも目標ではなかったのでもいい気味だと思うわけにもいかない。

どういう考えも抱けないので、ただ蟬の声が自分の体内を貫いているのを感じている。

平林は最近毎日ここへやってきて、ただひたすらに茫然としていた。どういう感情もないのに、何故ここへ来るのか。自分でもよくわからない。後悔しているのか、あるいは爆発跡の退廃した感じを味わいたいのかもしれない。

大学内には、それほど多くの人はいなかった。平常の大学は多くの学生たちで賑わっており、充実しているような彼らの笑い声は平林の神経を蝕むのだが、夏休み中の大学はむしろ静穏と表現している場所だった。時おり学生が汗を拭きながら平林の視界を横切った。それだけだった。

ふと気づけば、隣に見知らぬ老人が平林と同じように佇んでいた。老人の目は焦点が合っていないかのように、何物も宿していない。この老人も崩壊に對して快感を感じているのかもしなかった。

老人もこちらを向いて目が合ったので、平林は一礼した。話しかけるつもりはなかったが、なんとなくそうした。老人は平林に礼を

返すこともなく、ぷいと顔を建物のほうに向けた。平林も満足して顔を前に向けた。

「この建物はね」平林は話をするつもりはなかったのに、老人は声を発した。老人は前を向いたままなので、平林に話しかけているのかどうかはわからない。「私の青春だった」

平林は老人に見えているのかどうかわからないまま、うなずいた。老人は話を続けた。「情熱とは概ね一過性のものだ。何故あれほどの情熱を注いだのか、今にして思えばよくわからない。文学にしてもそうだった。大学時代に文学研究と出会い、熱中した。夢中になって調べ、思索し、そのいくつかを論文にまとめるうちに、いつの間にか教授になっていた。教授という肩書きなど、私には何の価値もないものだったが、研究と生活を両立することができたのは幸いだった。しかしやがて情熱は薄れた。契機があったようにも思えるし、そんなものはなかったようにも思える。しかし大事なものは、情熱を注ぐ瞬間を持つことができたということだ。その瞬間、私はきっと幸せだった。私が言っている意味がわかるかね」

平林にはよくわからなかった。そもそも、老人が誰に対して問いかけたのかも、よくわからない。

「それでいい」老人は微笑んだように見えた。「こうして小屋が壊されて、返ってよかったのかもしれない。私は情熱を忘れた、しない老教授に戻るとしよう。弟子を薫陶するのも、私の仕事だ」

不意に、平林にこの老人に全て見透かされているのではないかという感慨が押し寄せてきた。しかし恐怖も焦りもなかった。捕まるのであればそれでよかった。そうでなくてもよかった。どう転んだところで、大していい人生でもないのだ。

贖罪とは、一体なんだろう。

自分が今捕まったところで、自身が罪を感じていなければ、それは贖罪とはいえないのではないか。であれば、今自分が捕まる意味はない。

「あなたは」と、平林は口を開いた。「ここでなにをしていたので

すか？」

このみすばらしい小屋で、老人はなにをしていたのだろう。老人は先ほど文学研究と言ったが、しかしこんな小屋で文学研究をするものなのだろうか。

しかし老人は微笑むばかりで何も言わなかった。

太陽の光はますます猛々しく地上に降り注いでいた。

平林は光を遮るものがない場所で、小屋を見つめたまま立ち尽くしていた。容赦なく陽射しは平林の頭上を焼いた。平林は帽子さえかぶっていない。

見つめている小屋が縮んだようにゆがんだのは、陽炎のせいだったかもしれない。

しかしそのときまでに、平林の中の何かが崩壊していた。

思考は錯綜し、吐き気がしてめまいがした。暫くともに食事を摂っていなかった。

やがて平林は気絶した。

気絶する瞬間、このまま死ねればいいのにと、最後にそれだけ考えた。

夢を見た。

生きている夢だ。

人生のような夢だった。

確かにそれは夢だったと思うのだが、覚めてしまってからそれが本当に夢だったのかどうかよくわからない。

人生も似たようなものだ。

起きて終わったことはもう記憶の中にしか存在していなく、そしていつでも記憶は不確かなものだった。

夢は本当に起ったことのように思えるし、現実の実体のない不確かなもののように思える。

なにが本当のことで、何が偽物のことなのか。
まあいい。

夢の中で平林は、警察に出頭した。

裁判になって親を泣かせて少しの間刑務所に入った。

出所してから暫く生きた。生きづらい世の中だったが、一日一日必死で生きれば何とかなるものだった。何とかならない人生もあるのだと思えば、自分はずいぶん恵まれているものだと思ったりもした。それでも、生きることに対する漠然とした不満はいつまでも消えてなくならなかった。

夢の中で平林は終生孤独だった。親が死ぬまではそれなりに孤独で、死んでからはずいぶんと孤独だった。人付き合いがないということとはなかったが、特に友人と呼べるものはできなかった。それが平林のせいなのかどうかはよくわからない。

親が死んだときは泣かなかった。しかしある夜一回だけ、ものすごく寂しくなって独り泣いた。

泣いた場面で目が覚めた。

夢は時系列がむちゃくちゃで、泣くまでに自身の死も経験したし、壮年になった自分の姿の時もあった。

夢にしては妙に生々しく、あるいは正夢のようなものだったのかもしれないと後になって何度か思ったりもした。

目覚めたときも平林は泣いていた。何故泣いているのだろうと思ったが、すぐに思い返してそのまま泣き続けた。人間、生まれたときも泣いたものだ。

長じるにつれて泣かなくなるのは何故だろう。

平林は泣き続けた。自身にかけられていた白いシートに突っ伏して、嗚咽を殺して泣き続けた。

そこは大学構内に設けられた救護室だった。平林は室内のベッドに横たえられていたらしかった。

ひとしきり泣き続けたあと、傍らに二人の人間がいることに気がついた。大学生くらいの男女で、男のほうは退屈そうに本を読んだり、女のほうは耳につけたイヤホンから何か曲を聞いているらし

く、しきりに体でリズムを取っていた。

「あの」と平林は声をかけた。何か訊こうと思ったが、何を訊けばいいのかとっさには思いつかず口籠ってしまった。

「ああ、目が覚めた？」男のほうで平林に気づいた。女のほうは耳が塞がっているのだから、当然気づいていない。

「熱中症らしいよ」と男が言った。ちゃんと処置をして熱も呼吸も安定しているから大丈夫らしい、と続けた。

「けど、一応誰か呼んでこよう」

「あの、あなたたちは？」

「僕ら？　僕は灰島修吾という名前で、こっちは桃山」灰島と名乗った男は、女のほうの肩を叩いて注意を促した。それで桃山というほうも平林に気づき、「ありゃ、気がついたのですね。気分はどうですか？」といいながら耳からイヤホンを外した。

やけに陽気な声だな、と平林は思った。そう評するなら、男の方は対照的に重々しい雰囲気だ。

「災難でしたね。こんなに暑くっちゃそりゃ熱も出すってもんですよ。気分、悪くないですか？　吐き気とかないですか？　お腹減ってないですか？　減ってない？　減ってるでしょう。私は減ってます。ということで先輩、何か買ってきてください」

「馬鹿なことばかり言うな」と、灰島は桃山を嗜めた。「すまんね、こういうやつだ」

「はあ」夢から覚めたばかりでまだ頭に霞がかかっているような感じで、平林はただただ圧倒されるばかりだった。

「あのう、あなたたちは？」

「それはさっきも言ったように、僕は灰島で、こっちは桃山」

「桃山桃です。変な名前ですが、突っ込みは両親の方に」

「はあ、いや、そうじゃなくて、あなたたちは一体」誰なんですか、と言おうとして、これじゃあさっきの繰り返しになるな、と思った。

「ええと、つまり、えと、どう訊けばいいんだ？　えと、あなたは」と、平林は灰島を示した。「何でここにいるんですか？　どうい

いきさつでというか、素性というか」

「あなた、ではないよ」平林が質問の語句に困っていると、灰島が口を挟んだ。

「え？」

「僕は灰島で、あなた、じゃない。当然先輩という名前でもなくてね」

「はあ」平林は灰島が言っていることがわからなくて、頭の上にはてなマークを浮かべてしまった。

「人間というものを定義することは難しい」と灰島は続けた。

というのは人間というものは様々な存在であり、特に生きている人間というものは無限の可能性を秘めたものであり、実に混沌とした存在だからだ。だからそれを単一であると見なすことは本当は難しい。ならば自己とはなんなのかうんたらかんたら。

「気にしなくていいですよ。先輩はただの理屈屋ですから」灰島が話している横から、桃山がささやいた。「先輩はね、寝てる時もうんこしてる時もいつだって何か考えてる人で、考えすぎちゃってもう頭の中わけわかんなくなっちゃてるから。マグロみたいなもんですね。考えてないと死んじゃうの。それで別に、意味のあること言うわけじゃないの。ただ、だらだらだら理屈並べて、お終い。聞き流しとけばいいんですよ。別にテストがあるわけじゃないんだから」

「はあ」そうなんですか、と未だ定まらない頭で応えた。どうも二人とも、妙な人間だった。自分の頭が働かないのは、この二人の妙なエネルギーに圧倒されているからじゃないのか、と思った。

「要するに」と、灰島が言った。「僕のことは灰島と呼んでもらいたい。別に、君、をつけても、さん、をつけても呼び捨てでもいいけれど、お前、とか、あなた、とか、先輩、とかはやめて欲しい」

「はあ、でも、何故ですか？」

「人を名前で呼ぶ、ということは相手を承認する、ということだからだよ。その理屈が正しいかどうかは知らないけど、僕はそう思っ

ている。だからそうしてもらいたい」

「ごめんなさいね。先輩って、妙に頑固な人だから」

「別にいいだろ。それより後輩、誰か呼んで来てくれないか？　この人――あ、えと、名前なんだっけ」

「平林です」

「平林さんが起きたってこと、知らせとかなきやいけないから」

「雑用ですか。はいはい、いいですよ。後輩は先輩の命に従わなきゃならないってのは世界のルールですもんねーだ」と、桃山は多分に冗談を込めて恨みっぽく言いながら立ち上がった。

「待て。ついでにこれで何か買ってきてくれ。生協行つて、腹の足しになるもんでも」と、灰島は桃山に財布を差し出した。

桃山は、わあ、といいながらその財布を受けとった。「さすが先輩、愛してますよ」

「さっさと行け」

「はい。平林さんにも、何か買ってきてあげますからね」
では、と敬礼すると桃山は部屋から出て行った。

「彼女ですか？」と平林は訊いてみた。

「いや」灰島はむしろ平静すぎるほどの表情で否定した。

「さて、僕の素性だったっけ？　僕は要するに、平林さんをここまで運んできた人間。平林さん、倒れたときのことは覚えてる？」

「はい。ええ」平林は、夢を見る前老人と話をしていたことを思い出した。

「君は教授と話していた」

「教授って、俺が話していた老人のことですか？」

「その通り。嵐山って教授は知ってる？」

平林は少し考えてみた。少なくとも、自分が今まで取ってきた講義の中に、嵐山という教授の授業はなかったように思った。

「それは幸運だ」と、灰島は言った。「嵐山教授の授業は、授業じゃないから」

「ひどいんですか？」

「それはもう」灰島はおもちゃの兵隊が動いている様を見つけたときのように笑った。「一度受けてみるといいよ。ひどさがわかるから」

「考えておきます」

「いや、そんなことはどうでもいいか。僕はその教授のゼミ生で、教授から連絡を受けて君を運んだ。それだけだよ」

「そうだったんですか。それは、あの、どうも」平林は礼を言うのに慣れていないのか、多少どぎまぎしながら、それでも頭を下げた。

「あの、一つ、訊いてもいいですか？」と、平林がいった。何、と灰島が応じた。

「あの人は、えと、嵐山さんでしたっけ、彼は何故、あの場所にいたんですか？」

「あの場所、ああ、SF研跡地か」灰島は頭に手を持っていきながら答えた。記憶を探っているようにも、名探偵が推理を開始しているようにも見える。

「嵐山教授は、タイムマシンを作っていたんだ。いや、いたいこととはわかる。同感だ。だけど、あの教授は多分本気だったんだ。毎日毎日朝から晩まで愚にもつかない計算や思索を繰り返していたんだ、あの小屋で。専門分野ってわけでもないのにね。毎日毎日籠っていたあの小屋が、ある日突然爆破されたんだ。誰がやったのかわからないけど。教授の研究成果は全部あの小屋にしまわれていて、爆破されたときそれが全部ぶつとばされちゃったから、もう研究を続けることは出来ない。それが悔しいのか、名残り惜しいのか知らないけど、そんなわけで教授はあの爆破跡地を眺めているんだ」

「タイムマシン、ですか」

「馬鹿げてると思う？」

平林はその問いには答えなかった。

あの老人は確か、情熱はもうなくなってしまった、というようなことを言っていたような気がする。それはもちろん、自分があの小屋を爆破してしまったせいだろう。そう思っても大して罪悪感が湧

いてくるわけでもなかったが、あの爆破が過失であったことが平林を暗い気持ちにさせた。本来、爆破されるべきは隣のクラブハウスだった。

あの老人は過失によって情熱を奪われたことになる。

運命ってのは、どうもやりきれないものなんだな、と思った。

思ってから、その論理が責任逃れに過ぎないことに気づいた。

「恨んでますか、犯人のこと」と、平林は灰島に訊ねた。

「さあね」と灰島は答えた。「僕らに学生にとっちゃ今回のことはありがたいんだけど。おかげで教授が授業に専念してくれるから。けど、どうも教授が小さくなってしまったようで、それだけは残念だな」

6

九月になったある日、この日も平林は元SF研の跡地にやってきた。ツクツクホーシが鳴いていた。快晴だ。この日もその場所には先客がいた。嵐山教授だ。

小屋の隣に木材を並べて、嵐山は日曜大工のようなことをやっていた。廃墟の壁に木材を沿わせて、釘で打ちつけている。

「何してるんですか？」と平林は訊いた。

「再建しようと思ってね」と嵐山は答えた。「よければ君も手伝っていきたまえ」

平林は命ぜられるがままにその作業を手伝った。果たしてこんな作業に意味があるのかわからなかった。しかし次の日もそのまた次の日も平林はこの場所にやってきてSF研の再建を手伝った。嵐山は毎日その場所にいた。

毎日毎日、木材を切り取り、運び、釘で打ちつけた。炎天下でのその作業はかなりきついものだった。しかしその疲労は平林にとって心地よいものだった。毎日へとへとになって帰り、眠った。筋肉痛の体を動かすと生きているという感じがした。

作業は二人の弟子、灰島と桃山も携わっていた。二人とも気の向いたときにやってきて、思うがままに作業して、気の向くままに帰っていくようだった。それでも二人とも最大限に教授をいたわっているのだということは伝わってきた。

嵐山も灰島も桃山も、奇妙なくらい平林のことは何も訊かなかった。もしかしたら自分が犯人であることはばれているのかもしれないと思ったが、しかし自分から口に出すこともなかった。

それでも、居心地が悪いということはなかった。灰島はあまり話すこともなかったが時々コーヒーを奢ってくれたりした。一度灰島の真似をしてブラックを飲んでみたが、苦すぎて口直しを飲まなければならぬはめになった。

桃山は何を考えているのかよくわからない人間だった。一度「なにぬねの！」と声をかけられて、なんだそりゃと聞いてみれば挨拶だということだった。今度その挨拶をされたら「まみむめも！」と返そうかと思っていたが、一度やって飽きたらしくその機会は訪れなかった。ともあれ、自分に対して猜疑の目を向けるような人間でないことは確かだった。

灰島も桃山も、平林を呼ぶとき多くの場合その姓で呼んだ。平林には他人を呼ぶときに名前を呼ぶ習慣がなかったが、このときその習慣を身につける努力をした。結局完璧に身につくことはなく、生涯その努力を続けることになったのだが、それでも努力をしないよりはましだった。

時々自分が透明になったような気がしたときは、灰島や桃山や嵐山やその他彼のことを「平林」と呼んでくれた人のことを思い出した。

夏休みが終わりに近づいていたある日、平林は嵐山と二人きりになった。嵐山はよほど不精な人間なのか、誰かが食事は用意してあげなければ食べないという人間だった。そのためその日の昼ご飯は

平林が買ってきた。

板を敷き詰めた小屋の中で、二人並んで座った。

「もう作らないんですか、タイムマシン」と、平林は訊ねた。

「情熱は過ぎた。もう戻らない」と老教授は答えた。

「恨んでますか、爆破した人間のこと」

「恨む？ 何故？」

「何故って、大切なものを奪われたのでしょうか？」

「いや、情熱はいつか過ぎるものだ。それは誰のせいでもなく、強いて言うなら自分自身のせいだ。誰かを恨むことはありえない」

その言葉を聞いた瞬間、平林は自由落下をしているような感覚に襲われた。自分を押さえつけているものは何もなく、どこか知らない国まで飛ばされていくような気がした。

胸が収縮するような感覚があつて、目から涙がこぼれてきた。嗚咽するわけにはいかなかったので、身を縮めて必死でこらえた。

その時漸く、自分はなんということをしてしまったのだろうと思つた。

安堵と後悔の両方の針が限界まで振れた。

「過失だったんですよ、あれは」涙が枯れたあと、妙に乾いた声で平林が言った。「本当は、隣を爆破する予定だったんです」

「平林君が爆破したのだったか」と、嵐山は今気づいたかのような声を出した。

「全部爆破してしまいたかった。この世の中全部」といって、平林は嵐山を見て微笑んだ。

「俺にはどうも、無理だったみたいです」

爆砕（後書き）

なんとか書けました。とりあえず完結ってことにします。で、次が書けたらまた投稿します。とりあえずそういう形式で。

亡き王女のためのパヴァーヌ

0

集会所の中にはピアノの演奏が鳴り響いていた。板敷きの間のこの部屋は綺麗に整頓されていて、ピアノがあるほかはがらんとした空洞のようだった。白壁の上の方に設けられた窓の向こうには夕日が輝いている。傘立てに置かれた赤い傘がより真っ赤に染め上げられていた。緩やかな風が吹いて葉のない銀杏の枝を揺らせた。

桃山は独りピアノを弾いていた。

もう何曲目になるだろう。休むまもなく弾いているせいで腕が攣りそうだった。お腹が減っている気もする。なんども流れては乾いていく涙のせいで頬が荒れてしまつて痛い。

それでも桃山は演奏を続けた。どれだけ流れても涙を拭う気はない。

僅かな音を立ててドアが開けられて、灰島が入ってきた。灰島は幽霊のように静かに歩き、壁を背にして床の上に座る。

桃山は演奏を続けたまま、泣き顔を灰島の方に向けてその姿を認める。桃山は何かいおうとするのだけれど、言葉が出てこない。灰島も目だけを桃山の方へ向け、何もいわない。

灰島は沈黙したまま、じっと目を閉じ演奏に聴き入る。

いくつかの演奏が終わり、桃山は次の曲の演奏を始めた。『亡き

王女のためのパヴァーヌ』だ。

「下手くそだな」灰島が呟いた。

「灰島さん」震える声で、桃山は言った。涙と疲労のせいで演奏はめっちゃくちゃだった。

「構わない」灰島も微かに声を震わせながらいった。頬を流れ落ちた雫が編みの拙いマフラーを濡らした。「いいからずっと聞かせてくれ」

赤十字病院の広い玄関を出ると、小雨が降っていた。紅葉は傘立てから持参していた自分の傘を取り出し、パツと開いた。紅葉の目の前に赤い花が開いた。色とりどりの花で飾られているその傘は、紅葉のお気に入りのひとつだった。昔お母さんとデパートへ買い物に行ったとき、ふと見たその傘に一瞬で心を奪われた。紅葉には大きすぎる、とか、学校行くときに使う傘があるでしょ、とか言って渋るお母さんを、必死で説得してその場で買ってもらった。それ以来、紅葉は雨が大好きである。

今日も、朝どんよりと立ち込めている雲を見たときから、雨が降ればいいと思っていた。病院に行かなければならない日は少しだけ気分が落ち込む。雨が降れば、傘を差せる。真っ赤な傘をさして歩いて帰ろう、と思えば少し気分が和らいだ。

病院の玄関からぴょんと飛び跳ねると、紅葉はあらと思った。ちょうどそこに水たまりがあったため、靴が少し濡れてしまった。まだ靴下までしみこむほどではないけれど、帰っているうちに濡れてしまうだろうな、と思った。そうになったら冷たいなあ。

まあいいか。

紅葉は困ったことや嫌なことがあったりすると、決まって最後に、まあいいかと考える癖がある。いつからその癖が身についたのかわからない。生まれつき楽天的に出来ているのかもしれないし、後天的に身についた諦めの境地かも知れなかった。どちらにせよその癖があるおかげで紅葉は落ち込むということがなかった。だから彼女は明るい性格だと周囲に思われていたし、友人も多かった。いつもニコニコしている紅葉を誰にも同情することも仲間はずれにすることも出来なかった。

紅葉が小さなステップを踏みながら歩いていると、ふと何かに気づいたように「あら」と声を上げた。道路の左右を確認して、車が来ないのを確認してから、彼女は道路に飛び出す。昼過ぎの学生通

りには人気もまばらだった。

「修兄ちゃん」道路の向かいにたどりついた紅葉はそこにいた人物に声をかけた。

彼女に修兄ちゃんと呼びかけられた人物は、「ん？」といい、紅葉の顔を確かめた。

彼は紅葉の施設によく「遊びに来る」大学生だった。遊びに来るくせに、あまり子供と遊んでくれないのでほとんどの子供たちには人気がない。ただ、勉強を丁寧に教えてくれるので小数の子供たちから慕われている人だった。

勉強よりも遊ぶほうが好きな紅葉にはあまり縁のない人だが、顔は覚えていた。

「えっと、君は」修兄ちゃんは紅葉を覚えていなかったらしく、少し戸惑っているようだった。

なんだ、こっちはちゃんと覚えているのに、と紅葉は不愉快になった。すぐ気を取り直して「私は」と名乗ろうとするのを、修兄ちゃんは手で制した。

「いや、大丈夫、覚えている、確か――向田紅葉さんだっけ？」

なんだ、覚えていたのか、と思って、少し意外に思った。ほとんど話したこともない紅葉の名前をフルネームで覚えているんだから、さすがに頭のいい人は違うな、と思った。いつも勉強の好きな子たちの相手をしている修兄ちゃんは、紅葉にとっては頭のいい人だった。紅葉は修兄ちゃんのフルネームまでは覚えていない。

「よく知ってたね」と紅葉は言った。

「名前はね、大事なものだから、人間が人間であるために。いや、そんな話はやめておこう。どうしたの、今日は？」

それはこっちの台詞だ、と紅葉は思った。

「私は病院の帰り。修兄ちゃんこそ、こんなところでなにやっているの？」

紅葉と修兄ちゃんがいるのはバス停で、時刻表があり、歩道に沿ってベンチが備え付けられている。ベンチを覆うようにしてつけら

れている雨避けの黒い庇から雫がぽたぽたと流れ落ちていた。

「どこ行くの？」

「いや、雨宿り」修兄ちゃんは空を見上げる振りをした。「急に雨に降られたんでね。いい加減止まないかと思うんだけど、そう上手くはいかないな」

雨宿りか。ということはこの人は今日の朝傘を持って出かけなかったんだな。今日の雨雲の様子じゃ、誰だって雨が降ることは予想できるはずなのに。見かけによらず、抜けている人なんだな。

そのまま見捨てて立ち去ることはためらわれたので、紅葉は言った。

「ねえ修兄ちゃん、どこまで行くの？ こっから遠い？ かろうそ園の近く？」

かわうそ園の近くまでなら、傘に修兄ちゃんも入れて、一緒に帰ってあげよう、と紅葉は思った。かわうそ園というのは紅葉のいる施設の名前で、紅葉は今からそこに帰らなければならぬ。

相合傘っていうのは大好きな人とやるもので、紅葉はとても恥ずかしかったのだけど、まあいいかといつものように結論付けた。ここでこうして困っている人を見捨てて帰るほうが、恥ずかしいよりずっとよくない。

しかし、修兄ちゃんの答えは紅葉の予想とは違ったものだった。

「いや、すぐそこ」と修兄ちゃんが差したのは、病院の道路を挟んで向かい側にある芽姫大学だった。

そういえば、修兄ちゃんは大学生なので、そこにある大学の学生なのかもしれない。ならば、修兄ちゃんがこんなところで雨宿りしているのは当然ありうべき現象なのだ。

もちろん、傘を持って外出しなかったのは失策だけれど。

「でも、こんな近くなんなら、雨宿りなんてしてないで、走ってこっちやえば良かったんじゃない？ ちょっと濡れるけど、大して濡れやしないよ」

「それはそうだと思うし、その通りなんだけど、ちょっとでも止ま

ないかなと思ってね」と修兄ちゃんは言った。「止むのは諦めるとして、小降りにならないかなあと思って、でも思っているうちにどんどん大降りになってってね。どうも今日は判断ミスが多い。上手く勘が働かない」

本当に参ったという修兄ちゃんの顔を見て、紅葉は顔をほころばせた。修兄ちゃんは頭のいい、近寄りがたいイメージのある人物だったけど、実際はそんなことはなかった。紅葉たちと同じく隙のある、いや、ずっと隙の大きい人だったのだ。

「じゃあ、近くだし、いいや、ほら修兄ちゃん、入りなよ」といいながら、紅葉は傘を差し出した。身長差があるので、上手く修兄ちゃんの身体が入らない。

「入れてくれるの？」と修兄ちゃんはいいい、一瞬の間があって、「好意は受け取ろう」と言って紅葉から傘を取り上げた。

取り上げられたのかと思って、紅葉はちょっとあわてたが、修兄ちゃんは傘を心持ち左にずらして、紅葉の入るスペースを空けていた。またあわてて、紅葉はそのスペースに入り、並んで歩き出した。なんだかなあ、と紅葉は思った。大人は、ずっこい、なんだって、背が高いんだもん。

このとき紅葉は気づかなかったが、紅葉の身体は全く傘に覆われていて濡れなかったし、歩調もいつものペースで歩くことができた。修兄ちゃんが上手く子供の紅葉に合わせて行動しているからだった。それでも紅葉は少し窮屈だった。なんと言っても、修兄ちゃんと話すためには見上げなければならぬのだから。

「今日の朝ね、園の玄関に新しい絵がかかっていたの。綺麗な紫陽花の絵だったの。園長先生が持ってきたのかな。修兄ちゃんまだ見てないでしょう。今度来たときに見るといいや。とても綺麗な絵だから」

「絵か、それは見てみたいもんだ」と修兄ちゃんは言い、少しして「ま、相沢次第かな」と言った。

相沢って誰だったろう？ 私の知っている人だろうか。

「ああ、えっと、園では健兄ちゃん^{けん}って呼ばれてる人だよ。僕をかわうそ園に連れて行った張本人」

健兄ちゃんといわれて、紅葉はようやくわかった。健兄ちゃんも修兄ちゃんと同じく大学生で、修兄ちゃんとは違って面倒見がよく明るくみんなから人気のある人だった。ただ少しだけ無神経なところのある人で、紅葉はなんとなく好きになれない人だ。

紅葉たち子供たちにはよくわからないことだったが、恐らく健兄ちゃんが大学生たちのリーダーで、その証拠に多くの大学生が健兄ちゃんに気を使っているし、大学生が来るときはいつも健兄ちゃんがいる。修兄ちゃんなんかはほとんど来ない。

多分、修兄ちゃんは健兄ちゃんに無理やり園に遊びに越させられているのだ。

と思い、紅葉は同情と憤慨がない交ぜになった感情を感じた。同時に、やっぱり修兄ちゃんは頼りにならないな、と思った。

「修兄ちゃんは健兄ちゃんに無理やり連れて来られてるんだね」と紅葉は率直に言った。

「まあ、そういうことになるかな。だから、あいつが行かない限り、僕も園にいかない」

「よわっちい」と、紅葉は言った。「修兄ちゃん、よわっちいな」怒るかと思ったが、修兄ちゃんは、その通りだと笑っていた。

なんだ、怒ることもできないのか、と紅葉はますます情けなくなつた。やっぱり、ガリベンって奴はよくない。なよなよしていて細っこくて頼りない。

紅葉は半ば憤った調子で、「とにかく、健兄ちゃんなんかには構わず、遊びに来てよ。本当に綺麗な絵なんだし、みんな修兄ちゃんと遊びたがってるんだから」と言った。これは完全に嘘だった。綺麗な絵ではあったが、わざわざ無理に見せなければならぬほどの絵ではないし、みんなが修兄ちゃんと遊びたがっているということはない。そもそも時々遊びに来る大学生など、子供たちにとって台風と同じで、来ているときは楽しいけれど過ぎ去ってしまえば忘れ

去ってしまうほどのものでしかない。

紅葉は言ってしまったから自分が嘘を言ったことに気づいたが、言ってしまった以上もう撤回することもできない。どうしようと思っただが、まあいいやと思った。撤回するほどのことでもない。

修兄ちゃんはその嘘に気づいているのかいないのか、じゃあそのうちに、と言って紅葉に傘を預けた。いつの間にか紅葉と修兄ちゃんは大きな建物の前に来ていた。これが大学というところなのだろうか。外観だけ見れば、紅葉の学校と変わらない。

「帰り道は、わかる？」と修兄ちゃんが聞いてきたので、紅葉はうなずいた。うなずいてから、大学から出る道のことだと気づいた。紅葉の周りは明らかに紅葉の知らない土地だった。まあいいか。来た道をたどればえられる。

「じゃあ、どうもありがとう」と言って、修兄ちゃんは手を振った。紅葉は「うん」とだけ言って別れた。

数歩歩いて振り返ってみると、もうそこには誰もいなかった。不意に重苦しい空気が上から紅葉を圧してきたようだった。雨は飽きることなく降り続いていた。

2

父親の顔を紅葉は覚えていない。もし見たことがあったとしても、それはよほど幼いころの話で、要するに物心つく前の話だ。多分見たことすらないのだろう。

何故自分に父親がいないのか、よくわからない。お母さんと喧嘩したからなのか、それとももう死んでしまっているのか。紅葉は聞いたことすらない。聞くといって、誰に聞けばいいのか。

お母さんの顔は、よく覚えている。それも笑った顔のほうを、よく覚えている。紅葉が悪い子供だったせいか、お母さんはよく怒っていたのだが、それでも時々はお母さんは笑った。そんなお母さんの顔が紅葉は好きだった。

かわうそ園にやってきてから、紅葉は一度もお母さんに会っていない。他の子達は時々お父さんやお母さんがやってきて一緒に出て行ったりするのに、紅葉の母親は一度も顔を見せに来ることすらない。

「そりゃ、あんた、捨てられたんだよ」と零ちゃんは言った。零ちゃんというのは紅葉と同じくかわうそ園で暮らす子供で、もう高校生である。零ちゃんは頭がよくって学校の成績が優秀で、奨学金と言うものをもらって大学にいくことがほぼ決まっている。

しかし紅葉は――かわうそ園に暮らす子供みんな、零ちゃんが先生たちに隠れて煙草を吸っているのを知っている。煙草を吸う子供は園にはたくさんいたし、もし先生に見つかれば説教されるのだけど、零ちゃんが見つかったことはない。誰も先生にちくったりしない。それは裏切り行為になるからだ。おかげで零ちゃんは、先生たちの間では優等生ということになっている。

そういうわけで、零ちゃんをやっかみ半分で嫌っている子供はいる。いるというより、多い。

しかし紅葉はそうではなかった。零ちゃんは煙草を吸うけど、面倒見もよかったからだ。紅葉たち歳の離れた子供とも、よく遊んでくれた。先生に許可をもらって、遊園地に連れて行ってくれたこともある。紅葉にとって、零ちゃんは大好きなお姉ちゃんだった。

そんな零ちゃんに、ある日「どうして私のお母さんは私に会いに来てくれないのかな」と言ってみた。

すると零ちゃんは「そりゃ、あんたは捨てられたんだ」と言った。よく意味がわからないできょんとしている紅葉を尻目に、零ちゃんは続けた。「あたしも一緒だよ。あたしは捨てられたんだ。あたしたちは独りなんだ。何者にも頼らず、独りで生きていかなきゃいけない」

そのときの紅葉には零ちゃんの言った意味はわからなかったが、成長していくにつれて少しずつわかるようになってきた。紅葉のクラスメイトたちは、もちろんみんな両親がいる。彼らはみんな、ど

こか甘ったれていると、紅葉は感じていた。芯が通っていない。誰かに寄りかかっている。

というより、諦めていない。

それは彼らが孤独でないからだった。頼るべき誰かを持っているからだ。例えば、ふざけて煙草を吸っても、怒ってくれる人がいる。そんな安心感の中で、彼らは生活しているのだった。紅葉とは違う。

紅葉は日々の中でよく笑った。楽しいときも笑ったし、楽しくなくても笑った。辛いときには声を上げて笑った。それはいつのころからか身についた習慣だった。しまいには、自分が今なにを考えているのか、わからなくなっていた。

「紅葉はよく笑うんだな」と、みんなで遊んでいて、紅葉と零ちゃんが一緒に端で休憩していたとき、零ちゃんが言った。

「笑ってないよ」と紅葉は言った。紅葉は実際に、その自覚がなかった。

「笑ってるさ。馬鹿みたいにへらへらと」と言って、零ちゃんは何かを考えるように空を見上げた。その横顔が紅葉にはすごく大人っぽく見えた。

「馬鹿かなあ、私は」と言って、紅葉は笑った。馬鹿といわれて、憤りも感じたが、それよりも笑顔が先にきた。笑ってしまえば、怒るわけにはいかない。

「笑う必要なんてないさ」と零ちゃんは言った。「笑う必要なんてない。私たちは誰にも媚びる必要はない。私たちは独りで生きてかなくや行けないけれど、独りで生きていくことができるだろう？」

「零ちゃんはそういうけれどさ、私、考えてみたんだけど、零ちゃんは独りじゃないよ」

「そうかな。一体誰がいる。捨てられてしまった私に」

「かわうそ園のみんながいる。私がいるよ」

と紅葉が言うと、零ちゃんは頭をかいた。それから微笑した。「

「そうだな」と呟き、「そうかな」と呟いた。

零ちゃんは「紅葉はいい子だな」と言い、紅葉の頭をなでた。子ども扱いされているので反発も感じたけれど、くすぐったいように嬉しかった。

「でもな、やっぱり私は、誰とも繋がっていない。寄りかかっていない。それでいいんだ。でも、やっぱり紅葉は、笑わなくていいよ。あんたが笑ってるのは、そりゃ私たちからすりゃ楽しいんだけど、そんなの、関係ないよ。あんたは、あんたのしたい表情をすればいいんだ」

お母さんに会えないのは悲しかった。お母さんに連れられて初めてこの園にきたときは、知らない場所で寝起きするという体験でどきどきしていた。夕方になり初めて知った人の居ない場所で夕食を取る時、さびしくなった。その夜は泣かなかったけれど、次の夜は我慢しきれなくなつて泣いた。その次の夜も泣いた。その次の日にはようやく、自分が一人である事に気づいて泣かなくなった。そのころから、言語にはできなかったが、紅葉は生きていくということとは何かということについて考え始めていた。

「生きていくってのはな」ずっと後になって、零ちゃんが言った。編み物の手を休めないまま、紅葉はその言葉を聞いた。「孤独なレースみたいなもんだよ。ずっとずっと独りで走り続けて、いつか力尽きてあっけなく終わるんだ」

3

春がたけて桜の花びらが空の中で舞っていた。紅葉は春のおいを嗅いだ。薄く爛れて、それでいて桃源郷のような匂いだ。この香りに感慨を抱くためには、紅葉はまだ若すぎる。

「ね、ね、次は何して遊ぶ？」

「そうだねえ」と桃ちゃんはひょうきんぶって応えた。「あたしゃ、もう何も思いつかんよう。なんかリクエストはあるかい」

かくれんぼしよう、と紅葉の一つ下のりつくくんが答えた。一緒に遊んでいるのは十人ほどで、これはかわうそ園に住む小さな子供ほぼ全てにあたる。紅葉は普段、男子とはあまり遊ばない。男子が嫌いというわけじゃないけれど、なんとなくそういう形になっている。今日は例外だった。その理由はこの桃ちゃんという人にあった。

桃ちゃんはかわうそ園に来るなり、高声で「オッス」と叫び、「鬼ごっこする人この指とーまれ」と手を高く掲げたのだった。

その表情があまりにも楽しそうだったので、つい何人かがその誘いに乗ってしまった。紅葉もその中の一人だった。何人かは自己紹介もしないこの大人の女の子を訝って動かなかったのだが、桃ちゃんは「へいへいへいへいその子らも一緒にやるよ。なんたって遊びつてのはみんなですら楽しそうだからね。ほらほらほらほら集まった集まった」といって全員集めてしまった。一体何のために志願者を募ったのだろう。

紅葉はあまり乗り気でなかった冬ちゃんや梢ちゃんのために「まあいいじゃん」と極めておぎなりの慰めをかけておいた。楽しそうなことは楽しんでおかなくては損だ。

それから二時間ばかりはあつという間に過ぎた。子供のパワーというのは好奇心のためか、すさまじいものがあるが、しかしこの場で最もパワフルだったのは桃ちゃんだった。誰よりもエネルギーに走り回り、誰よりも陽気に楽しんでた。そんな桃ちゃんに釣られてか、いつしか全員が全力で楽しんでた。

りつくくんのかくれんぼという提案も悪くないものだったが、しかしそれは二つ前にもうやってしまった遊びだった。

「桃ちゃん、いいかげん自己紹介してよ」と紅葉が言った。休憩するのは子供たちにとっても必要なことだった。

「私？ 私は桃ちゃんです大学生だよ。よくこんな風に大学生が来るんでしよう。それと似たようなもんだよ」といって、快活な笑顔を見せた。「みんなのことも名前くらいは教えてほしいところだけど、もう大体覚えちゃったなあ」

桃ちゃんが遊びに来た大学生である事はみんななんとなく理解していた。いつも来ている健兄ちゃん他の知った顔はあったし、桃ちゃんも大学生くらいの年齢に見えたからだ。しかし、本来なら行われるはずの挨拶が桃ちゃんのせいでうやむやになってしまい、結局彼らは何者なのかわからないまま時間だけが過ぎていった。遊び始めて数十分ほどはリーダーである健兄ちゃんが桃ちゃんを止めようとしていたけれど、寸隙いれず遊び続ける桃ちゃんを止めることはできず、苦虫を噛み潰したような顔で遊びに加わっていた。

得意げでない表情の健兄ちゃんを見るのは初めてだった。紅葉はなんとなく勝ち誇った気分になった。

「桃山さん」ちょうど遊びが一段落したところだったんで、健兄ちゃんが口を挟んできた。桃山さんというのは桃ちゃんのことだろう。

「俺らそろそろ帰らなきゃいけないんで、終わろうか」

「むむっ。でも私はまだもうちょつと遊び足りない気分なんですな」と桃ちゃんは言った。桃ちゃんを帰らせたくない何人かが桃ちゃんの袖を握った。

「でも、先方にも予定ってもんがあるから。俺らの勝手に向こうの都合を崩しちゃいけないだろう」

桃ちゃんはんーと考えて、下を向いて「駄目？」と訊いた。訊いた相手はもちろん紅葉たちだった。子供たちは誰も首を縦に振らなかった。夕食までにはまだもう少しだけ時間があつたし、もう少しこのエネルギーシユなお姉ちゃんと過ごしていたかった。

「駄目じゃないそうです」

「いや、でもね」

何か言おうとする健兄ちゃんを制するように、紅葉が言った。

「桃ちゃんだけ残ればいいじゃん」

「ん？」

恐らく健兄ちゃんのほうが正しいことを言っているのだ。けれど紅葉は健兄ちゃんの肩を持ちたくなかった。それに実際自分たちにとって桃ちゃんは魅力的な人物だった。

「帰らなきゃいけないんだったら、健兄ちゃんだけ帰りなよ」

健兄ちゃんは困ったような笑みを浮かべて何か言おうとしたけれど、その前に別の声に遮られた。

「ま、問題ないだろう」

気づけばいつの間にか健兄ちゃんの隣に修兄ちゃんがやってきて、肩に手を置いているのだった。「あとのことは僕が責任を持つ」

健兄ちゃんは修兄ちゃんの言葉に反抗しようとして、しかし言葉は出てこなかった。

「やれやれ、というところか」

「うん悪い」

健兄ちゃんはすぐさま他の大学生に号令して、引き上げる準備をさせた。先生に丁寧にお辞儀をすると、子供たちへの挨拶もなしに帰っていった。子供たちは桃ちゃんに夢中なのだから仕方がない。

「迷惑かけましたか？」と桃ちゃんが言った。

「まあな」とだけ修兄ちゃんは答えて、あとは黙ってしまった。

後で聞いた話だと、修兄ちゃんは桃ちゃんの先輩で、今日桃ちゃんがかわうそ園にやってきたのも修兄ちゃんに言われてであったらしい。「後輩のほうが僕よりも適しているからね」と修兄ちゃんはやっていた。

さてなにをしようか、と思っていると、桃ちゃんが目を輝かせながら「わあ」と叫んだ。

「ピアノがあるんだね」桃ちゃんかわうそ園にあるピアノを見つけて喜んでいらしい。今まで気づかなかったんだろうか、と紅葉は思った。

「桃ちゃん弾けるの？」

「へっ」と桃ちゃんは言うなり、ピアノの前に座った。子供たちは啞然として桃ちゃんのすることを見守っている。

桃ちゃんはピアノを弾き始めた。

それは静かな、しっとりとした、やさしい曲だった。今までのエネルギーギッシュな桃ちゃんの姿とは似ても似つかない曲だった。子供

たちはその曲を誰も知らなかった。しかし誰も文句を言わなかった。音色が綺麗だった。その音色は紅葉の視界に白いもやがかかったように、紅葉を陶然とさせるのだった。

この世にはなんと美しいものがあるのだろう。

曲が終わると桃ちゃんは元の元気娘に戻って、「はいじゃリクエスト募集!」と快活に言った。しかし誰も応じなかった。

「桃ちゃん、その曲」なんて言っていていいかわからないまま、紅葉は言った。「……なんて曲?」

「亡き王女のためのパヴァーヌ」と桃ちゃんは言った。「いい曲でしょう。私の大好きな曲なんだよ」

4

紅葉の体の外から見えないところに、十センチばかりの傷がある。今はもうすっかり治ってしまつて、触っても全く痛みを感じないのだが、それはくっきりとした痕になって紅葉に刻まれている。何の原因でついた痕なのか紅葉は全く覚えていない。思い出そうするとお腹が痛くなる。呼吸が苦しくなる。思い出す必要もない。

この傷のことは園長先生と少数の年配の先生が知っているだけで、ほとんどの先生にもかわうそ園の友達にも秘密にされている。それは紅葉が希望しての配慮ではなかったが、紅葉にとってありがたいことではあった。この傷のことを知られることは、なぜだかわからないけれどお母さんにとってよくないことだと思われたからだ。

だから紅葉は、特例として一人でお風呂に入ることが認められている。消灯時間の少し前、みんながお風呂を使い終わったあとの最後に紅葉は一人でお風呂に入る。シンとした一人で使うには少し広すぎるくらいの浴室の中で、紅葉は毎日一人で身体を洗う。鏡はでさるだけ見ない。時々、湯船に浸かってため息をつく。大人の真似事のように、その実妙に身体の内奥に染み入るものがある。

一度だけ例外があった。紅葉が脱衣所に入ってみるとそこに衣類

を脱いでいる途中の零ちゃんがいた。零ちゃんは紅葉が入ってきて、ああ、という表情をしただけで手を止めなかった。紅葉がどうしていいかわからなくなつてまごついていると、初めて紅葉がそこにいることに気づいたように「そうか」と言った。

「そういえば紅葉は特例なんだったな」

特例という言葉はこの場合紅葉の身体に巻きついて嫌な感情を引き起こした。それでも紅葉は笑っていた。

「悪いね。十分もすれば出るから、そのあとに来てくれる？」

「うん」といって紅葉は出て行こうとしたが、ふと振り向いて零ちゃんに声をかけた。零ちゃんは浴室へ向かうところだった。

「零ちゃん、怪我したの？」

零ちゃんは振り向いた。確かにその左腕には引っかけ傷のようなものがついているのだった。ただその傷はもう癒えていて、紅葉の傷のようにただ痕が残っているだけのようでもあった。

「ああ、これのことか」と、零ちゃんは言った。「そうだよ。昔、怪我をした」

その声は極めて平静な声だった。

「大丈夫？」何気なく紅葉は訊いた。

「大丈夫だよ。結局、誰にも知られることもなかったんだから。ただなんとなく、やってみたかっただけなんだろうな。ただ切っただけなんだから。死ぬつもりなんて、なかったんだよ、きつと」

思いがけず死ぬという言葉聞いて、紅葉はびっくりした。

「死ぬって、どういうこと？」

「なんだ、わかって訊いたわけじゃなかったのか」

「じゃ、それは、自分で切ったの？」

「そうだよ」そのときの零ちゃんは全く怖じる様子もなく、やけに堂々としていた。選ばれて読書感想文を発表している子のようにだった。

「痛くなかった？」

「痛かった」零ちゃんは何故かほつとしたように笑った。紅葉の質

問が意外だったのかもしれない。「痛かったから、もうやらない。紅葉もこんなこと真似しちゃ駄目だ」

どうして自分がそんな真似しなくちゃならないことがあるのか。そう言おうとして、言えないでいると、零ちゃんはさっさと浴室のほうに向かっていってしまった。

紅葉は一人で部屋に戻って本でも読もうかと思ったけれど、上手く頭に入ってこなかった。どうしても零ちゃんのことを考えてしまう。

何故零ちゃんは自分の腕を切るなんてことしたんだろう。それは紅葉にとつてあまりにも不可解なことであった。

人はどうしたっていつか死ぬ。死にたくなかったって絶対に死んでしまうんだ。わざわざ自分から死ぬ必要はないじゃないか。それは明らかに、死なない人間の驕りおごりのように思えた。

にもかかわらず、紅葉にはどうしても零ちゃんのことを憎むことも蔑むことも理解不能な人間だと割り切ることもできなかった。むしろ親近感のようなものを覚えた。何故だろう。

その傷痕について、そのあと紅葉はなんども零ちゃんに訊ねようとした。しかし、なんと訊ねればいいのかわからない。訊ねる言葉も見つからないまま、しかし紅葉の頭の中には疑問が渦巻いていた。言葉にもならない疑問を抱えていることは真っ白なもやに包まれているようで気分が悪かった。零ちゃんを見かけるたびに、零ちゃんとおしゃべりするたびに、紅葉は訊ねる機会を窺った。そのチャンスは何度でもあった。しかしその都度、紅葉は口籠くさかってしまつて何も訊けずじまいなのだった。

まあいいか。

結局いつものようにまあいいかで済ませてしまった。その代わりに、もやは澱おりになって紅葉の体内に残った。

病院での診察を終えてかわうそ園に帰ってくると、中から子供たちのわいわい騒ぐ声が通りの方まで聞こえてきた。いくら小さい子

供が多い園でも、こんなに賑やかになることはほとんどない。中でも最も大きな声は大人の女の子の声だった。

この声は、と紅葉は思った。聞いたことのある声だ。大人とは思えない、底抜けに明るい声。

紅葉は広場に面した正門からは入らず、裏門から玄関に回った。広場に行ってみると遊ぶのもよかったけれど、その前に着替えてジュースを飲みたかった。それから、診察のことを先生に報告しなければならぬ。何でもその報告が紅葉は嫌いだった。

玄関のガラス戸の前に立つと、向こうに誰かいるのがわかった。背の高いその人は紅葉に横顔を見せる格好で壁に向かって突っ立っていた。壁にある何かを見ているらしい。あれは修兄ちゃんだ。

「修兄ちゃん」と紅葉が声をかけると、修兄ちゃんは顔だけ紅葉の方へ向けて「やあ」と言った。冴えない笑顔だ。どうにも修兄ちゃんという人はパツとしない。そのくせ妙に圧倒されるような存在感のある人なのだ。

「なにしているの?」といいながら修兄ちゃんの方へ近寄っていくと、答えを聞く前に解決された。修兄ちゃんの前の壁には一幅の絵がかかっていた。修兄ちゃんはこれを見ていたのだろう。

「絵なんか見て、楽しい?」と紅葉は訊ねた。世の中には美術館というものがあって、そこには日々絵の鑑賞をする人びとが集まっているということを知っているが、そんなコウショーな趣味とは紅葉は全く無縁な人間だった。

「いや」あっさりと修兄ちゃんは首を振った。「まあそれなりに面白けれど、正直絵画はよくわからないな」

「だったらなんで見ているの?」

「そりゃ、向田さんが見ろって言ったからだよ」
そう言われて紅葉はびっくりした。そんなこと自分が言っただろうか。修兄ちゃんは何か勘違いしてるんじゃないだろうか。それとも、自分が忘れちゃってるだけだろうか。

まあいいか。詮索しても仕方がない。

「てか、向田さんって」そんな呼び方、生まれてこのかたされたことがない。

「変かな」

「変だよ」

「じゃあ、どうしよう」

「そりゃ、紅葉ちゃんとか、みいちゃんとかそういう風に呼んでくれればいいよ」

「そういうのは、苦手だ」修兄ちゃんは困ったという風に耳の後ろをかいた。「でもそうしろというならそうしよう」

なんだか修兄ちゃんって、変な大人だな、と紅葉は思った。他の大人なら、何の疑いもなく紅葉のことは紅葉ちゃんって呼ぶのに。

「修兄ちゃんが来てるってことは、やっぱり桃ちゃんが来てるんだね」

「ん、うん」

やっぱり通りまで聞こえてきた声の正体は、桃ちゃんらしい。

「ということは、健兄ちゃんとかも来てるの？」

「いや」

「へえ、珍しいね」

「そりゃ、今回は僕の私用だからね」

「シヨウ？」

「自分勝手な用事ってこと。つまりこれを見ることだよ。前は忘れていたから」

修兄ちゃんはこの玄関にかかっている、誰が書いたのかもわからない一銭の値打ちもないような絵を見るためにやってきたらしい。それだけのことでわざわざやってくることに呆れもしたが、もしかしたら本当に自分がそう言ったのかもしれない。

「ん、じゃあどうして桃ちゃんも来ているの？」

「後輩は勝手についてきただけだよ。とはいえ、絵を見るってだけで来るわけにもいかないから、實際助かった」

紅葉は修兄ちゃんを促して、食堂へ向かった。さっきから喉が渴

いて仕方がなかったからだ。冷蔵庫からオレンジジュースを取り出して、コップに注いで一気飲みする。ひんやりとしたジュースが喉の中を駆け巡っていった。今度は別のコップにも注いで、修兄ちゃんにも渡してあげた。

「いいの？」

「うん」本当は勝手に部外者に飲ませていいものではない。「修兄ちゃん、その代わりに、一個質問していい？」

返事の代わりに、修兄ちゃんはコップに口をつけた。

「桃ちゃんって、修兄ちゃんの彼女？」

ドラマやマンガみたいにむせてしまうかと思ったが、修兄ちゃんは極めて冷静に口の中のジュースを飲み干し、ゆっくりと口からコップを離してから首を振った。

「いや」

「なんだ。てっきりそうなんだと思ってたけどな」修兄ちゃんの様子からすると、どうも嘘ではないらしい。

「じゃ、片思いだ」

「どっちがどっちに對して？」

「そりゃ、修兄ちゃんが桃ちゃんに對してだよ」

「残念。逆なら正解だったのに」

逆ってことは、桃ちゃんが修兄ちゃんのことを好きなわけだ。

「うっそだあ！」と紅葉は叫んだ。

修兄ちゃんにはやっと笑って、「その通り」と頷いた。

「うっわ、なにそれ。ひどいや」といいながら、紅葉は笑った。

「しかし、紅葉ちゃんくらいの年頃でも、そういうもんかね」

「なにが？」

「だから、えっと、恋愛とか、そういうものに興味があるんだね。

僕にはさっぱりだが」

「修兄ちゃんって、初恋もまだなんですよ」

「そういう、わけでも、ない」

「それも嘘だね」紅葉はなんだか楽しくなってきた。

「私も、そういうことはよくわからないよ。クラスの友達の中には、付き合ったりとか、そういう話する子はいるけど。私は、好きになったりとか、よくわからない、というより」

紅葉は言葉に詰まった。というより、なんだろう。興味が無い、というのとも違う。それよりも、もっと隔絶した感じだ。自分とは、全く縁がない、という感じ。自分の人生とは、全く交わることの無い直線。

「そういうことしたって、意味がないよ。人間は最後には死んじやうんだから。そうでしょ、修兄ちゃん」

こういうことは、本来誰にも言うてはいけないことだ。なぜなら、こういうことは誰も言わないことだからだ。言ってしまうばみんなから別種の生き物であるかのように見られてしまう。だから、今までは誰にも言わなかった。今日つい言ってしまったのは、零ちゃんのこと、それが頭に残っていたからかもしれない。

「うん、その通りだ」と、修兄ちゃんは頷いた。

「修兄ちゃんは死のうと思ったことある？ だからえっと、手首なんか切って、自殺しようとしたこと」

「思っただけならあるよ。やったことはない」

「どうして思ったの？」

修兄ちゃんは少し考えてから答えた。「いや、理由はない。ただなんとなく」

「そうやって、適当なこと言ってるんでしょ」

「いや、実際に、いじめられたわけでもなく、お金がないわけでもなく、ただなんとなく死にたくなった」

「私にはわからないな。どうせ最後には死んじやうのにわざわざ自分から死んじやう気持ちがある」

「どうせ最後には死んじやうから生きていても仕方ない、ということも出来る」

「ふーん」そういう考え方もあるのか。

「ねえ修兄ちゃん。人は何で生きるんだらう。どうせ最後には死ん

じやうのに」

「それは僕も色々考えたけど。紅葉ちゃんはどう思う？」

そんなこと、今までに考えたこともなかった。

「文学があるからだとか、そういうことを言ってもいいんだけど、実際のところはどうか。もしも絶対不変の確実なことを言えというのなら、僕の場合、それは死ぬのが怖いからというしかない。それ以外の言葉は、多分嘘になる」

死ぬことは怖いことだろうか。紅葉にはわからない。紅葉は今まで死ぬことが怖いと思ったことがない。なんとなく死は紅葉の隣にあって、それはいつか紅葉と静かに重なり合うのだと思っている。

「もし死ぬのが怖くないとしたら、修兄ちゃんは死ぬ？」

「さあ、どうともいえない」

「私は、どうだろう。私はどうして生きているんだろう」と、紅葉は呟くようにいった。「私、死ぬのが怖くない」

「そりゃ、いいことだ」

「ちっともいいことなんかないよ。私死ななきゃならないのかな」

「ふむ」修兄ちゃんは中空に目を向けて、少し考え込んだ。それから紅葉に目を向けて「紅葉ちゃん、ジュース飲みな」と言った。

「ん、どうして？」

「いいから」

促されるままに紅葉はジュースに口をつけた。

「おいしい？」

「うん」

「ま、そういうことだろう」

「はあ？」

「それで充分だ」修兄ちゃんは一人満足げに頷いていた。

なんだかはぐらかされてしまったみたいで、紅葉は眉をひそめた。修兄ちゃんなんて、結局のところは頼りにならないのだ。そう思いながらも紅葉の心の奥のほうは少し満足していた。

「後輩が暴れ回っているみたいだから、加わってきたら？」

「うん、そうだね」紅葉は立ち上がって、二・三歩行きかけたところで止まった。

振り向いて「修兄ちゃんも遊ぼうよ」と誘った。

「いや、僕はあのテンションにはついて行けないから」

「いいからいいから」紅葉は満面の笑みを浮かべて、無理やりに修兄ちゃんの手を引っ張っていった。

5

その日紅葉が学校から帰ってくると、どこかの部屋からピアノの音が鳴っているのが聞こえた。蟬が遠くで鳴いていた。拭っても拭っても汗が滴り落ちてきて、紅葉は部屋に帰ってからすぐシャツを着替えた。

普段かわうそ園のピアノが演奏されることは少ない。昔ピアノが好きだった子供がいて、その子が園にいたときはよく演奏されていたらしいが、その子はもう大人になってしまっただけに園にはいない。紅葉がそのピアノの音を聞いたことがあるのは、不意に興味を持った子供が何気なく弾いてみたときくらいだ。

軽快な演奏だった。紅葉はとりあえず台所へ行って麦茶を一気飲みすると、そのままピアノのある集会所へ向かった。

ピアノを弾いていたのは桃ちゃんだった。桃ちゃんはまるで子供のように様々に表情を変えながら、一心にピアノに向かっていく。しかめつらをしたと思えば陶醉し、眉をひそめたと思えば笑窪を作る。体全体で演奏するその様は、見ていだけで楽しくなってくるようだ。

「桃ちゃん」と紅葉は声をかけた。「また桃ちゃん勝手に来ちゃったんだ」

本来桃ちゃんはかわうそ園と何の関わりもない人物で、出入りすることはない。ただしかわうそ園のような「可哀想な子の集まっている場所」には大学生の集団が「遊びに来る」ことがあり、桃ちゃん

んはその集団の一員である（のだと思うのだが、紅葉はその点自信がない）。

しかしそうしたお兄ちゃんお姉ちゃんが来るときは、事前に先生から通達があるものだ。先生に言わずに勝手に入ってくる人は、ただの不審者だ。

しかし桃ちゃんは時々、そうした先生の通達なしでいきなりやってくることもある。何の前触れもなしに園の前にやってきて、例えば「もーみーじちゃん、あーそーぼー」とやる。小学生が友達を誘うのとは違うのだから、当然先生の間で問題になったのだが、どう収まったのか紅葉はよく知らない。ただしばくして健兄ちゃんとその仲間たちと修兄ちゃんがやってきて、先生と長い間話し合っていたのだけは知っている。

その話し合いの間も桃ちゃんは子供たちと遊んでいたので、紅葉が訊ねてみると、

「のけ者にされちゃったんだ。私が入ると余計ややこしくなるって先輩がさ」

「どうして桃ちゃんは勝手に来ちゃうの？」

「んー、友達と遊ぶのに、いちいち許可なんか要らないって」と、桃ちゃんはケラケラと笑っていた。

その話し合いの後、桃ちゃんは自由に一人でかわうそ園を訪ねるようになった。もしかしたら裏で先生に連絡していたのかも知れないけれど、少なくとも表面上は桃ちゃんは勝手気ままに子供たちと遊ぶようになった。

健兄ちゃんたちもその後遊びに来ることはあったけど、桃ちゃんや修兄ちゃんと一緒に来ることはなくなったようだ。そんな問題があった後でもちゃんと活動が続けて、しかもちゃんと笑顔で子供たちと遊ぶことが出来るんだから健兄ちゃんもたいしたものだ。

「や、みいちゃんか」紅葉に声をかけられて桃ちゃんは手を止めた。

「いいよ、ピアノ、続けて」

「んー、むずいなあ」と言いながら、桃ちゃんは演奏を再開した。

話しながらの演奏なのでむちゃくちゃだ。

「勝手じゃないよ。みいちゃんいないから、るうに入れてもらったよ」いくら桃ちゃんでも、園内に勝手に入ってくるわけではないのだ。誰か子供が誘わない限り、桃ちゃんは園内に入らない。

「るうは？」

「友達るところ、遊びに行くって。約束してたんだって」

「それで、一人でピアノ弾いてたんだ」

「誰か来ないかなあって。みいちゃん、よく来てくれました」

「桃ちゃん、一人で来たんだね」

「んー、まあねえ。先輩、あれはあれで忙しい人だから」

「そっか」修兄ちゃんは来てないのか。紅葉は少しだけ落胆して、落胆した自分には気づかなかった。

「んー、みいちゃんさ、先輩のこと好き？」

「は？」

「言っとくけど、先輩は渡さんからね」

「いやいやいやいや、そんな気ないって。修兄ちゃんなんて、ぜんつつつぜん！ タイプじゃないし。ありえないって」

「ほんとに？ ほんとにいい？」桃ちゃんは器用に、演奏しながら紅葉に疑惑の視線を向けて見せた。

「う、うん」

「ほんとのほんとに？」

「ほんとのほんとにだよ」

「ほんとのほんとにほんとに？」

「ほんとのほんとにほんとにだよ」

「ほんとのほんとにほんとにほんとにほんとにほんとにほんとにほんとにほんとに？」

「ほんとのほんとにほんとにほんとにほんとにほんとにほんとにほんとのほんとにほんとにだよ！」

「残念、一回多い」桃ちゃんはガーンと、不協和音を鳴らした。フフフツと、二人顔を見合わせて笑う。

「ねっ、桃ちゃん、あの曲やって。桃ちゃんが初めて来たとき弾いてたやつ」

「ああ、えっと」桃ちゃんはちよっと考えて「亡き王女のためのパヴァーヌだ」と言った。

「そう、それ」

「いいね」と桃ちゃんは言っ、練習するように鍵盤を叩いた。「みいちゃん、あの曲好き？」

「うん、よくわからないけど」

「私も大好き。先輩も好きだって言ってたなあ」
ふうん。修兄ちゃんも好きなんだ。

「そういや、この曲の演奏、ちゃんと先輩に聞かせてあげなきゃいけないだったなあ」といいながら、桃ちゃんは演奏を始めた。

少しテンポの速い、美しい音が室内を満たし始めた。

「ねえみいちゃん、どっかピアノのあるところ知らない？ 私が演奏できて先輩に聞かせられるところ」

「そんなの、どこでも」

いや、ピアノのあるところなんて限られるのだ。

「だったら、ここに連れてくりゃいいじゃん。ここに連れてきて、修兄ちゃんに聞かせてあげなよ」

「いいの？ じゃあみいちゃん、約束だからね。あ、けど」桃ちゃんは演奏を続けながら言った。「みいちゃん、先輩とっちゃったら駄目だかね。ぜったいぜったい、それも約束」

6

目覚めたとき、視界の端に白いものがちらついているのに気づいた。蛍光灯の白い明りのせいで世界が一瞬ぼやけた。ピントが合うと窓に目をやった。

雪だ。

芽姫県は南の県だから雪はめったに降らない。紅葉も雪を見た記

憶はほとんどない。紅葉がもっと小さかったときかわうそ園に雪が降ったことがある。積めることはなかったが子供たちは目を輝かせてはしゃいだものだった。その時園長先生が、「昔はもっと降ったもんだがね」と小さなため息とともに言ったことを紅葉はよく覚えている。

紅葉は病室のベッドから下りて何もつけていない足にスリッパを履き、窓に近寄って静かに開けた。

雪は微かな風の中でまるでダンスをするようにひらひらと舞い落ちていた。

手を伸ばせば雪は掌の上に舞い落ちてきた。

その雪というにはあまりにも頼りない欠片はすぐに融けて痕さえ残さなかった。

粉雪だ。

紅葉は窓を閉めベッドの中に戻り、出来ればもう一度眠りたいと思う。しかし、一度覚醒した意識はもう夢幻の中に戻ることを拒んだ。

紅葉はため息をついて、病室の中を見回した。病室の中には楽しめるようなものは何もなく、せいぜいテレビがあるくらいだが今は見る気にはならなかった。

退屈だ。

紅葉は自分の体に何が起こっているのか、何も知らなかった。大人たちは何も教えてくれない。聞いても多分教えてくれないから、紅葉も無理に聞こうとは思わなかった。

入院したのは初めてではない。今までにも数度入院して、毎日検査されたり手術されたり薬を飲まされたりした。検査も手術も薬も嫌いだったけど、紅葉を思っていてくれることなのだから仕方がない。

ただ、今回の入院はなんだか違うな、と思った。どこがどうとはいえないが、確かに違った。もし強いて言うとするなら、誰も彼も明るすぎた。みんなことあるごとに「もう少しだから頑張ろう」と

か「早くよくなつてまた遊ぼう」とか言ってきた。医者も先生も、もう少し事務的でなければならぬ。そのくせ、病室にはあまり近づこうとはしないのだ。

自分はそろそろ死ぬのだろうか。

確かに毎日のように吐いたし、たくさん髪の毛が抜け落ちたし、腕が見違えるほど細くなった。医者は、吐くのも髪が抜けるのも薬の副作用だと言った。病気なんだから体重が減るのは当たり前だよ。病気が治れば全部元通りさ。

元通りになるのはいいが、吐くのは正直辛かった。毎日バケツの中に吐いて、吐き出すものがなくなつてからも吐いた。胃の中のもの突き上げてくるのを感じるたび、紅葉は目の前が真っ黒になった。吐くとき、看護師さんが付き添ってくれるのはいいけど、できればお母さんだったらなあ。

まあいいか。

よくないのは、先生たちの表情。笑顔っていうのは二種類あつて、それはいうなれば自然な笑顔と作り笑顔だ。見舞いに来てくれる先生はみな怪人の仮面をつけているような笑顔をする。紅葉はその笑みを見るたびに暗い気持ちになつて、笑わなきゃと思つて紅葉自身も怪人になつてしまう。怪人ばかりの病室っていうのは気味が悪すぎるから、用がないときは来ないでもらうようにした。

かわうそ園の友達も来るには来たけれど、一時間くらいいいわいしゃべつて「早く元気になつてね」と言つて歸つてしまった。それから一度も来ない。学校の友達は来たことすらない。そりゃあそうだろう。紅葉が逆の立場だったとして、わざわざ毎日見舞うだろうか。子供の毎日は忙しいのだ。

じゃあ毎日来る人は忙しくないのかというと、「そりゃあ、全く忙しくないねえ」とのことだった。彼女は大学生なのに、忙しくないのだろうか。もしかしたら彼女が紅葉に氣を使つてそう言っているだけなのかもしれないし、本当に大学というところは暇なところなのかもしれない。

どちらであつたとしても、多分大学に行くことのできない紅葉には確かめようがない。

桃ちゃんは毎日、比喻ではなく本当に毎日やってきた。毎日やってきて、飽きることなくずっと何かをしゃべり続け、下手をすれば面会終了時間まで居座って帰っていく。何で毎日毎日見舞いにくるのかと訊ねたら「そりゃ、気を使ってんだよう。みいちゃん一人で寂しいと思ってねー」と言われた。

「そんなに気を使うことないよ」と言うのと「了解」と返事があつたのに、それから変わらなず毎日やってきた。桃ちゃんの考えてることはよくわからない。

桃ちゃんの笑顔は大人のくせに、あまり気に障らなかった。多分何も考えていないんだろう。

気分がいいとき、桃ちゃんなら別に問題ないかと思って「私死ぬのかなあ」と聞いてみた。

「さあ。未来のことはわからんね。私は占い師じゃないからな」

「そうじゃなくなつてさ、私、死ぬような病気なんだと思う？」

「人間はみんな死ぬよ」

そんな一般論が聞きたいのではなかった。「そういう意味じゃなくつてさ」

「私はどうせ部外者だから、何にも知らないけど」桃ちゃんは少し困つたように腕組みしながら言った。「どうも、そんな風に見えるねえ」

「そんな風って？」

「だから、その、あれさ」

桃ちゃんがどきまぎしているのを見て、紅葉は、死ぬって言葉を避けてるんだな、と思った。

「そっか、やっぱり私死ぬんだ」

「や、それはただの私の勘だから」

「いいよ、覚悟はしていたし、それに」紅葉は言った。「元々生きていたってしょうがないし」

「そう、ふーむ。そっか。なんだか、ちょっと残念」桃ちゃんは本当に落ち込んだような素振りを見せた。

「私が落ち込まなかったから？」

「そうじゃないよ。みいちゃんはなんか、白けてっから、そんなもんとは思ってたけど、そうじゃなくなっけさ、生きていたってしょうがないって」桃ちゃんは悔しそうに頭を叩いた。「私はみいちゃんのこと友達だと思ってるんだけどさ」

紅葉には桃ちゃんの言っていることがよくわからなかった。「桃ちゃんは友達だよ」

「私、多分泣くからね。みいちゃん死んじゃったら。そんなことしたって意味ないのはわかってるけど、それでも泣いちゃうからね。天国からそれ見て、ああ泣いてるな、って思えばいいさ、ふん」

「ああ泣いてるなって」それは一体どういう感情なのだろう。

そっか、桃ちゃんは私が死んだら泣いてくれるのか。だからと言って、なんだというのだろう。いくら泣いてくれたところで、死ぬのは紅葉で、死なないのは他のみんななのだ。泣いてくれるからといって、どうだというのだ。どうということもない。だから、妙に悲しくなってきた涙が出てきたけど、どうということもない。だから「泣かれたって困る」

「やだ」

「やだじゃないよ。大人でしょ」

「大人じゃないよ。桃ちゃんだ」

なんという人だ。これはなるほど、大人じゃない。

「桃ちゃんだからって、駄目だよ。絶対ぜったい、泣いちゃ駄目。じゃないと、修兄ちゃんだってあげないんだから」

「なにようそれ。先輩はみいちゃんのものじゃないでしょー」

「でも駄目。絶対ぜったいあげませんー」

「やだ、ひどい！ みいちゃんなんてだいいっ嫌い」

「私だって、桃ちゃんなんてだいいっ嫌い」

紅葉は夜になってこの場面を思い出して、ああ、これは喧嘩した

んだなあ、と思った。感情と感情をぶつけ合う、子供の喧嘩だ。自分が悪いとは決して思わないけれど、本当に桃ちゃんが嫌いになったわけでもない、そもそも何で喧嘩したのかもわからない、子供の喧嘩。

その証拠に、桃ちゃんはずっと紅葉の友達だった。

次の日、幾分気まずそうにしながらやってきた桃ちゃんは、素直に「ごめん」と謝ってきた。道端に咲いていたという秋桜を差し出し、「あげるよ」と言った。

「ピアノ」コップを花瓶代わりに飾ろうとしている桃ちゃんの背中に、紅葉が言った。「弾いてくれないかな、私のために。泣いてる姿より、音楽のほうがいい」

入院した当初同室だった老婆は、治ったのかすぐに退院していった。それ以来二人部屋の病室に紅葉はずっと独りきりである。寂しくはなかった。むしろ独りのほうが、気楽でいい。

夜眠れないときは、闇の天井を見つめながらよくお母さんのことを考えた。笑った顔のお母さんはとても綺麗だった。他の表情のお母さんを思い浮かべようとしても駄目だった。紅葉の中のお母さんは笑顔で綺麗でなければならなかった。

お母さんとの思い出を思い出そうとしても駄目だった。もう全て忘れてしまったのかもしれない。仕方がないので、想像で補うことにした。想像の中で紅葉は、お母さんとピクニックへ行ったりデパートへ行ったりした。想像のお母さんは全部笑顔だった。紅葉も笑顔だった。

想像しているうちに眠り中に落ちていって、夢の中でお母さんと一緒にいることもあった。そうした日は夢から覚めた瞬間はやけに楽しく、しっかり覚醒してからは妙に悲しかった。

今日の夢はそれとは少し違っていた。お母さんはいたが、他にもたくさんいた。かわうそ園の友達もいたし、学校の友達もいた。先

生たちもいた。それらの人々はみな笑顔だった。その人たちと次々に紅葉は遊んだ。どんな遊びだったかは思い出せないけれど、どれも楽しい遊びだった。そしてそれら全ての人は紅葉のことを愛していた。それが紅葉にはわかっていた。

夢のことを思い出して、紅葉は泣きそうになった。現実では、誰も紅葉のことを愛していないからだ。

コンコンと病室のドアが叩かれ、紅葉が返事をする。ドアが開けられた。入ってきたのは修兄ちゃんだった。珍しいことに、一人だけで入ってきた。修兄ちゃんが来るときは桃ちゃんを連れ添っていることが多いのだ。

「なんだ、意外と元気そうだ。安心した」修兄ちゃんは紅葉を見るなりそう言った。どこが元気そうなのか。紅葉の腕はもう骨と皮しかない。

修兄ちゃんはそれだけ言うと、ベッドの脇にある椅子に腰をかけて、持って来た本を読み始めてしまった。修兄ちゃんはいつもこうだ。

修兄ちゃんはお見舞いに来てもずっと本を読んでいた、何にもおしゃべりしない。本を延々と読んで、一段落すると帰って行く。一体、何のために見舞いにくるのだろうと思うのだけれど、紅葉は文句も言わなかった。

読んでいる本はいつも分厚い本で、ちょっとだけ見せてもらったところ難しそうな漢字や英語が一杯並んでいた。紅葉なら一ページだってまともに読むことが出来ないだろう。その本には、赤ペンでたくさん線の線が引かれていた。修兄ちゃんが引きながら読んでいたのだろう。

「さすが、修兄ちゃんは頭いいんだね」とため息混じりに言うと、「頭のいい人は線を引く必要もない」と言われた。頭のいい界にも色々あるらしい。

難しそうな顔をして本を読んでいる修兄ちゃんでも、紅葉が声をかければちゃんと応えてくれる。

「今日は寒いね」と言えば「全くだ」と応え、「お茶が飲みたい」と言えば淹れてくれる。桃ちゃんの雷雨のようなおしゃべりを聞くのも楽しかったけど、修兄ちゃんと過ごす静かなひとときも紅葉は好きだった。

「雪が降ってきたね」と本を読んでいる修兄ちゃんの横顔に、紅葉は話し掛けた。

「うん、寒い日だな」と修兄ちゃんは顔も上げずに応えた。

「雪は、好き？」

「うん、綺麗だ」

「そう。私も好き。綺麗だ」紅葉は修兄ちゃんの言い方を真似て言った。

紅葉がベッドから降りようとしているのに気づいて、修兄ちゃんが「何？」と本から顔を上げた。

「今朝、雪をね、掌の中に、収めたから、もう一回」

「寝てていい」

修兄ちゃんは立ち上がって窓辺に行くと、掌を上に向けて外へ差し出した。代わりに雪を取ってくれるつもりらしい。しかしなかなか紅葉の方に顔を向けなかった。

しばらくしてようやく振り返ると、「駄目だな」と言いながら掌を紅葉の方へむけた。もちろんその上には何も乗っていない。「掬っても、すぐに融けてしまう」

そんな当たり前のことを気づいてなかったのかと、紅葉は呆れた。修兄ちゃんって頭いいくせに、妙にぬけたところがあるんだ。

紅葉は修兄ちゃんの介添えを受けながらベッドからおり、朝のように窓から手を差し出して掌を上に向けた。

ひらひらと雪が紅葉の手の平に舞い降りてきて、すぐに融けて消えた。

「修兄ちゃん」紅葉は寒さで重くなった指と次々と舞い落ちる粉雪から目を離さないまま言った。「どうして人間は生きるの？」

「何故だろうな」と修兄ちゃんは答えた。

「私、お母さんに捨てられたの」と紅葉が言った。「だから、私は誰もいないんだ。誰も。私はずっと一人で生きてきて、私はずっと一人で生きていく。誰の助けもいらぬ。一人で。修兄ちゃん、私、強いでしょう？」

「そういうのは、強さとは言わぬ」

「もう遅いよ。私は死ぬの」

「君は、死なない。まだ生きる」

「まだ？」紅葉が言った。「そうだね、まだ、生きる」

「戻ろう」

「駄目、まだ」

掌の上に雪が落ちて、一瞬の後に消える。

かじかんだ手はもう紅葉のものではないかのようだ。

その掌を、後ろから伸びてきた掌が包み込む。

温かい。

「戻ろう」修兄ちゃんは紅葉の体を引っ張って、病室の中に戻す。紅葉をベッドの上に座らせると、窓を閉めた。

修兄ちゃんは黙ったままお茶を淹れて、紅葉の方に差し出した。手を温めろということだろう。

「修兄ちゃん、私、お願いしてもいい？」

「どんな？」

「駄目。先に返事をして」

「そういうのは、フェアじゃないな」

「だってさ、私、もう、死んじやうんだよ。死んじやうたら、きっと、後悔するよ。ああ、俺はあの時お願いを聞いてやればよかったなあって。そうなくてもいいの？」

「紅葉ちゃんはまだ死なないよ」

「でもいつかは死ぬでしょ？」紅葉は笑った。多分、いたずらっぽい笑顔になったはずだ。「その時、きっと後悔するよ。だから、ね、お願い。私の願い事、聞いて？」

修兄ちゃんはやれやれ、と言った様子で鼻から息を吐いた。「わ

かった」

「やったあ。それじゃあね」紅葉はうきうきしながら考えた。

きつと、文字通り一生に一度のお願いになるのだから、うんと大変なことを言ってもいいだろうか。修兄ちゃんの一生を左右するよ
うな、大変なこと。

でも、それは言っちゃ駄目だ。きつと、一生で最後のお願いになるのだから、そういうことは、言っちゃいけない。

悲しいけれど、それは言わない。

「遊園地」紅葉は言った。「に行きたいな」

「なんだ、それくらい。退院したらいくらでも」

「駄目よ。退院は、しないもの。きつともう最期だもの。今日、今すぐ連れて行って」

「そんなことが、許されると思う？」

「返事はもう、しっちゃったでしょ？」

修兄ちゃんは少し考えてから、やがて諦めたように言った。「つまり、誰にも見つからないように、隠れて連れ出せってことか」

「そういうこと」紅葉は嬉しそうに答えた。「私はお姫様なのよ。

王子はお姫様を魔法の国へと連れ出すの」

紅葉は手を差し伸べて空から降ってくる雪を手袋の上に受け止めた。手袋の上に落ちた雪はしばらく融けずにそこに留まっていた。

紅葉はそれを宝石を見るかのように眺め、そつと息を吹きかけて空へと舞わせた。

「雪だ」と紅葉は言った。生涯最後の雪かもしれない。

「寒い」と修兄ちゃんは言った。

「うん」

ありったけの防寒具を着込んできても、芯の方からまだ寒かった。紅葉の体を守るべき肉がなくなってしまっているからかもしれない。修兄ちゃんはコートを一枚着ているだけで、マフラーも手袋もしていない。

「そんな格好じゃ寒いのも当たり前だよ」というと、
「まあこんなもんだ」と返された。意味がわからない。

タクシーに二十分ほどゆられて、紅葉と修兄ちゃんは街外れにある遊園地へやってきた。この遊園地は目隠しして一周できそうなくらい狭くて、吹けば飛びそうなくらい古い。ただしそんなことは子供は気にせず楽しめるし、その分だけ地元民の愛着も深い遊園地だった。紅葉も何度か来たことがある。

修兄ちゃんが入場券を買おうとしているとき、紅葉は後ろから「大人二枚!」と叫んだ。紅葉の歳なら当然子供券で入れるのだが、今日だけは大人でなければならなかった。これで今日一日修兄ちゃんと対等でいられる。

園内は閑散としていた。寒いのがから当たり前だ。おかげでほとんど貸し切りのような気分で遊ぶことが出来た。

紅葉は面倒くさがる修兄ちゃんの手を引いて、色々な乗り物に乗った。ジェットコースターにも乗ったし、メリーゴーラウンドにも乗った。コーヒークップを調子に乗って回していると、完全に目が回ってしまった。「本気で吐きそうだ」と修兄ちゃんも言っていた。

「楽しいね」と修兄ちゃんに言うのと、

「疲れた」と素っ気無い。

「駄目だよ、修兄ちゃん、一緒に楽しんでくれなきゃ」

「紅葉ちゃんがはしゃぎすぎなんだ」

「今はしゃがなくて、いつはしゃぐの」

紅葉が手を取って駆け出せば、修兄ちゃんもペースを合わせて駆けてくれる。

このまま二人で、どこまでも駆けていきたいと思います。

途中から、寒気がした。多分熱が出ているんだろう。眩暈もした。何度か意識が飛びそうになった。

負けるわけには行かない。今負けてしまえばそれで終わりなのだ。何度もこけそうになった。その都度、修兄ちゃんが手を引いて支えてくれた。

「いつ帰る？」どの時点かで修兄ちゃんが聞いてきた。

「最期まで」と紅葉は答えた。修兄ちゃんは頷いて、その後はもう聞いてこなかった。

観覧車に乗って、冬の町並みを眺めた。夕日が山の向こう側へ隠れようとしていた。綺麗だった。

「楽しいね」向かいに座り外の景色を眺めている修兄ちゃんの横顔に向かって、紅葉はさっきと同じことを言った。

「悪くない」修兄ちゃんの反応はさっきとは違った。

「景色が？」

「うん」

「ひどいや」

「どうして？」

「私は、修兄ちゃんと一緒に遊べて、楽しいのに」

「ああ、そりゃ悪かった。僕も楽しいよ」

「そんなとってつけたような言葉、いらないもん」

紅葉は拗ねたような振りをしてそっぽを向いた。

「いや、本当に。また、来たいくらいだ。今度は、もっと大勢連れて来るといい。友達をたくさん呼んで」

「そんな機会、もうないよ」

「未来のことはわからんさ。わからない以上、そんな機会があるかも知れないじゃないか」

「そう？ そうなのかな」

「そうだよ」

「だったら……でも、そのときは、また、二人で来たい」

「二人で？ それでいいの？」

「うん、二人がいい」

観覧車を降りて、また次の乗り物を探して走り出そうとしたとき、それはやってきた。

最初、目の前が真っ暗になった。

一瞬、意識が途切れて、次の瞬間世界が回っていた。

ああ、ここでゲームオーバーか、と思った。

世界がやけにぼやけていた。

修兄ちゃんが何か叫んでいるような気がするけど、上手く考えることが出来ない。

息の仕方が、よくわからない。吸いたいと思うのに、上手く吸えない。どうしても切れ切れの呼吸になってしまう。

悲しくないのに涙が流れる。顔が引きつっているのがわかる。胸の辺りが痛い。

やだなあ、やだなあ。

どうしてこんなところで終わらなきゃならないんだろう。

だって私、まだ全然生きていない。

もっと、遊びたかった。

もっと、遊びたいのに。

冬ちゃんとか、梢ちゃんとか、桃ちゃんとか、色んな人と。

お母さんとかと。

こんなところで終わりなんて、やだなあ。

こんなに、今になって、どうして。

死にたくない。死にたくないなあ。

だって、世界には素晴らしいものがもっとたくさんあって。

もっと、生きて、私、それを。

駄目だな

苦しくて上手く考えることが出来ない。

もっと色んな、

素晴らしいものを。

たくさん見て

たくさん出合って

息が上手く出来ない。

もっと遊ぶ大切な人と。

笑顔を。

楽しく。

ずっと。

一緒に。

駄目だ、意識が。

駆けて。

笑顔で。

遊ぼう。

みんなで。

駄目だ、もう。

いやだ、

まだ、

誰か、お願い、誰か。

死にたくない。死にたくない。

いやだ、いやだ、いやだ。

修兄ちゃん。私、まだ生きていたい。

もっと生きたいよ。

「修兄ちゃん」自分の声も、よく聞こえない。息の合間に、声を振り絞る。

「やっぱり、行かないでね、もう二度と。これで最後にして、ここに来るのは」

7

目が覚めても、時間の感覚がまるでない。暗いのか明るいのかで昼なのか夜なのかを判断する。

吐き気がずっとしていて。眠りたくても寝られないのに、時々起きるのは、やっぱりたまには眠っているからだろう。起きていてもずっと眠たくって、全然起きている気がしない。

夢も現実もわからなくて、それでも苦しいんだから、やっぱり生きていく証拠だろう。

遊園地で倒れて病院に運び込まれた紅葉は、医者 of 適切な処置に

よって何とか一命を取り留めた。しかし元々衰弱していた体は無理がたたつてさらに消耗し、完全に病状は進んでいた。

お医者さんも看護師さんもすごくやさしい。いつも笑顔で声をかけてくれる。笑顔っていいな。安心する。

先生たちも時々やってくる。やっぱりみんな笑顔だ。

みんながんばって紅葉に心配させまいと笑顔を作っているのだ。すごくありがたい。笑顔を見ていると元気が出てくる気がする。少なくとも、暗い顔をされるより百倍いい。

あれから、修兄ちゃんも桃ちゃんも一度もやってこない。二人とも何をしているのか先生に訊ねようとする、

「大丈夫だよ。もうあんな人たち二度とやってこないから、安心していいよ」と元気付けるように言われた。なんだかピントのずれた返答だ。

もしかしたら迷惑かけたのかもしれない。

きっと、すごく迷惑かけたのだろう。

そう思うと悲しくなってくるのだけど、みんな過剰に反応するから、そうそう悲しそうにするわけにもいかない。結局修兄ちゃんたちがどうなったのか訊くことは出来なかった。

自分の体のことも、よくわからない。誰も教えてくれない。子供って損だ。

先生に頼んで、毛糸と編み棒を買ってきてもらった。本当なら自分の買い物は自分のお小遣いで買わなければならないのだけど、先生は二つ返事で買ってきてくれた。病人の特権ってやつだ。

先生や看護師さんたちに教えてもらって、マフラーを編んだ。今までに編んだことがないし、不器用だし、力も上手く入らないしで、上手くは編めない。それでも一生懸命編んでいた。

起きている時はずっと編んでいた。それ以外はすることがなかった。

「誰にあげるの?」と編み方を教えてもらっている看護師さんに聞かれたので、「秘密」と答えておいた。茶化した答え方だったけど、

言えば問題になるかもしれないと思ったのもある。

気分が悪くても頭が痛くても、構わずに編み続けた。編みあがる前に死ぬわけには行かなかった。どうしても完成させなければならぬ。なんとなくそう思っていた。

編みあがったとして、どうやって渡すかが問題だった。先生に頼むわけにはいかない。

折よく冬ちゃんと梢ちゃんが見舞いにやってきたので、頼んでおいた。子供なら騒ぎはよくわかってないだろうし、親友だからきつと紅葉の頼みはなんとしてでも叶えてくれるだろう。

「絶対だよ」と真剣な表情でお願いすると、

「了解」と二人ともいつになく真剣な表情で答えてくれた。

それからしばらくして、向田紅葉は病院の一室でその短い生涯を終えた。友達や先生など多くの人間に看取られての最期だった。

まだ桜には早い季節、外には小雨が降っていた。

8

微かに暖色に彩られた秋の風が一陣舞って紅葉した銀杏の葉っぱを吹き上げた。空は高く青く澄み渡っている。遠くで鳴いた鳥の鳴き声がどこまでも響き渡っていた。

「涼しくなってきたね」と隣を見上げながら紅葉は言った。手を触れることが出来そうなくらい近くに、修兄ちゃんが歩いている。二人はかわうそ園へ向かって静かな住宅街を歩いていた。

「今年の夏は少し暑すぎるくらいだった」

「秋は好き？」

「嫌いじゃない」

「そ、私は好き」

歩きながら紅葉は少しうきうきしていた。向かっている先に何が

待っているのかを、修兄ちゃんには言っていない。ただ「ちょっと、かわうそ園まで遊びに来てよ」とだけ言って連れ出した。「何のよう？」と訊かれても上手くはぐらかしている。少しはびっくりしてくれるだろうか。

「こうやってね、涼しくなってくるのも、空がずっと向こうの方まで澄み渡っているのも、なんだか空気が深としているのも、みんな好き。何より好きなのは、ほら、葉っぱが色づいてる。お花の色とりどりの色もいいけど、私は秋の葉っぱの暖かな色のほうが好きだな。だけど、少しだけやるせなくなっちゃう」

「何故？」

「だってほら、紅葉は落ちちゃうでしょう」紅葉が指さした先で、ちょうど銀杏の木から一枚の葉が揺れ落ちていた。「私が落ちてるようで、やだ」

「紅葉は死んでいるわけではないよ」と修兄ちゃんが言った。「葉が落ちたって幹が生きている。幹が生きていれば、また来年はえることが出来る」

「じゃあ、葉が落ちるのは本体のため？」

「というより、葉も合わせた全体で一つなんだと思うけど」

「紅葉なんて、結局部品に過ぎないんだね」

「そうともいえるだろうけど。でも、人間にとっては違うだろう」

「どう違うの？」

「紅葉した葉は綺麗だ。たくさんの人たちが、色づいた秋のこと好きだと思うよ」

かわうそ園は静かだった。今日は休日で、ほとんどの子供は親に連れられてどこかへ行っている。それに合わせてほとんどの先生たちもお休みだ。残っているのは、親の都合がつかなくて迎えに来られなかった少数の子供たちと、その子供たちを一応監督するために残された先生だけだ。

当然、紅葉は居残り組だ。お母さんの顔なんてここ何年も見ていない。

「こんな日に、入っていいの？」修兄ちゃんは少しためらいがちに入っていった。確かに、こんな子供たちのほとんどいない日に、外部の人間が入ってくることはあまりない。

「ほら、ここ」と紅葉が導いた先は集会所だった。修兄ちゃんを先に促して、ドアを開けてもらう。

入って何かに気づいたように、修兄ちゃんは「ん？」と声を上げた。なんとなく予想していたことだけど、修兄ちゃんはたいして驚かなかった。

「なんだ、後輩か」

修兄ちゃんの視線の先には、桃ちゃんがピアノの前に座ってピースしていた。「どーも。私のためにお集まりいただきて光栄至極」

「演奏会だよ。ほら、修兄ちゃん座って」

集会所の真ん中にはピアノと対座するように椅子が二つ置かれていた。よく見れば、室内は折り紙で作られた装飾が施されていて、小さなパーティーのような雰囲気を作られていた。しかし三人だけがいる室内はがらんとしていて、むしろ少しさみしいくらいだった。

「ほら早く。約束してたんでしょ、桃ちゃんの演奏を聞くて。桃ちゃん、今日のためにたくさん練習したんだよ」

「なるほど。そんなことのために、紅葉ちゃん、悪かったね」

修兄ちゃんは素直に席につく。その隣に、紅葉も座る。

「悪くなんてないよ。私が言いだしたんだもん」

一応演奏会という名目にする 것도、内緒で修兄ちゃんを連れ出すことも、室内の飾りも、全部紅葉が発案したことだった。そういえば、何かを企画することは初めてのことだった。

「では、少し緊張しますが」と桃ちゃんが礼をした。

紅葉が拍手を送る。付き添いといった様子で修兄ちゃんも手を叩いた。

桃ちゃんが演奏を始めた。『亡き王女のためのパヴァーヌ』だ。

修兄ちゃんはいしばらく腕組みをしたまま聞き続けていたが、やがて「へたくそだな」とぼそりといった。

「む、なんとひどいですな」と、桃ちゃんは演奏を続けながら反応する。

「そもそも、テンポが速い。好き勝手弾いてるんだろう。この曲は本来もう少しゆったりとした曲だ」

「あのね先輩。もしかしてプロと比べてませんか。言っとくけどこっちは素人なんですからね」

喧嘩が始まるのかと紅葉は思ったが、よく見れば二人ともどこことなく楽しそうで、そんなやりとりを楽しんでいるようだった。

喧嘩しなくてよかったけれど、それはそれで、なんとなく面白くない。

器用なもので、言葉を挟みながらも桃ちゃんは演奏を続けていく。

「修兄ちゃん、この曲、『亡き王女のためのパヴァーヌ』っていうんだよね」

「うん」

「パヴァーヌって何？」

「僕もよくは知らないが、確か舞曲曲のことだったとおもう」

「ブトウ？」

「ダンスだ。ダンスのための曲。まあ、本来はこんなテンポの速い曲じゃなくて、ゆったりとした曲なんだが」

「わかりましたよ。そんなにいうなら」と桃ちゃんが言って、曲は少しゆっくりになった。

ダンスか。

この曲で。

王女。そう、お姫様は、どんなダンスを踊ったのだろう。

紅葉は立ち上がり、

曲に合わせて、

踏み出し、

踏み出し、

回転——しようとしたところで足がほつれてよろめいた。

「うーん、難しいな」

気を取り直して、

もう一度、

踏み出し、

踏み出し、

回転し、

「うん、みいちゃん、上手い上手い」桃ちゃんが嬉しそうに叫んで、
また少しテンポが速くなる。

曲に合わせて、

踏み込み、

回転、

ステップ、

ジャンプ。

「上手いもんだ」修兄ちゃんが手を叩いた。

「みいちゃんかわいい。妖精みたい！」

「いや、王女だ」

「王女？」紅葉は呟く。

紅葉は目を閉じ、

曲に溶け込もうと思った。

曲と一体となって、舞おう。

見えない糸に操られているように、

紅葉は手を振り上げ、

足を駆けさせ、

舞う。

王女のように。

自由に、

高貴に

美しく。

拍手の音が聞こえた。

紅葉は目を開け、修兄ちゃんを捉え、
手を差し伸べる。

修兄ちゃんは立ち上がりやさしくその手を受ける。

二人で舞おう、と一步目で修兄ちゃんは足をもつれさせよろめいてしまった。

「全く、もう」紅葉は笑った。

気を取り直して、

修兄ちゃんが紅葉の手を取り、

二人でステップを踏んだ。

修兄ちゃんに促されるように、

紅葉は自分の思うままに、

駆け、

跳ね、

回り、

飛び、

舞った。

やさしい曲が聞こえる。

音が自分の中に溶け込んでいくようだ。

自分が音に溶け込んでいくのかもしれない。

静かに、

やさしく、

高らかに、

美しく、

伸びやかに、

自分は世界の中に溶け込んで、

自由自在に、何でもできる。

温かく美しい曲の中で、

王女のように、

紅葉は踊った。

「なんだか結局、みいちゃんのための演奏会みたいになっちゃったみたい」紅葉が渡したジュースで一息つきながら、桃ちゃんが言っ

た。

「それでいいだろう。なかなか綺麗な光景だった」と修兄ちゃんが言った。

「はい。みいちゃん、かわいかった」

「ああ、疲れた。けど、楽しかったあ」喉が渴いていた紅葉はジュースを一気のみした。

「こんなに楽しかったのは生まれて初めてかもしれない、と思った。また、やろうね」と楽しそうに笑った。

亡き王女のためのパヴァーヌ（後書き）

基本、想像のみで書いてるんで、粗はものすごくあると思われますがご容赦ください。まあフィクションですので。けど、こりやおかしいってところがあれば言っていたければ幸いです（直さないとは思いますが）。

二万字くらいでスパッと終わればいいのですが、上手くいきませんでした（後悔はしていません）。だいたい期間も開いてしまいました。次はもっと軽く書きたいです。次…次か…。とりあえずまたここで完結にしようと、何か書けばまた投稿します。では

ロイヤルロード

0

カーテンが閉まっているせいで、部屋の中は薄暗い。パソコンの液晶画面からもれる光が青黒い影を作っている。

ドアが開いて黄色い光が差し込んできた。人影が入り込んできて、ドアが閉まると共にその像も消える。

部屋の中に入ってきた女の子が、パソコンの前に座っている男性に声をかける。

「まあた電気もつけないで引きこもりですか。灰島さん、オタクですか、吸血鬼ですか。ニンニク嫌いの十字架嫌いですか。そのうち人の生き血を求めてさまようようになるんでしょう。ああやらしい」
桃山桃は奥のほうへ進み出ていき、カーテンを開いた。光が差し込んできて室内が明るくなった。

「何ヶ月ぶりだ？」灰島修吾はまぶしさに目を細めながら呟いた。

「さあ」桃山は慣れた様子で二つ分のインスタントコーヒーを淹れる。

差し出すと灰島は寝起きのような表情で受け取り、一口飲んで顔をしかめる。「苦い」

「苦いのが好きでしょう？」桃山は微笑む。

「大して好きでもないが」と灰島は返す。そのくせ灰島は砂糖やミルクを入れたコーヒーを飲まないことを桃山は知っている。

「私が働いている喫茶店でおいしいコーヒーを淹れますよ。是非飲みに来てください」何度も言ったことのある台詞で、また桃山は誘った。

「暇になったら」と、これもいつもの台詞で灰島は約束を濁した。

「忙しいんですか？」

そうでもない、という返答を予期していたが、意外にも「まあ」と返された。

「論文を書いているのですか？」これはしかし間違った質問だ。灰島は年中論文か何かを書いているからだ。

「最近ある人物の論文を読んだ」灰島はくたびれたというように伸びをした。「それ以来どうも焦っているようだ。よくない傾向だ」

「どんな論文ですか？」

「天才って言葉は嫌いだから使わないとして、優れた論文だ。着眼点のよさ、論理の鋭さ、文章の切れ、どれをとっても僕なんか足元にも及びそうにない」

「誰ですかそれ。どっかの偉い教授ですか？」

「いや…」灰島は苦い表情をしていた。「院生だ。僕と同じ。この春からこの大学に入ってきた」

1

中西雄介はコーヒーにミルクを入れない。

苦いものが格別好きというわけではない。ただ、苦いコーヒー外の中に流れ込むとき、生き返ったような心持ちになる。甘いコーヒーは好きじゃない。生きていると感じるためには、それは刺激が少なすぎる。

コーヒーが運ばれてくるまでの間に、中西はポケットから煙草を取り出し、火を点けた。肺にしっかりと煙を行き渡らせてから、大きく吐き出す。肺の中に煙を入れると、頭の中にまでもやがかかったような気がする。そして中西の脳の回路のほとんどは進路を閉ざす。中西はただひたすらに紫煙をくゆらせるだけの存在になる。

それは死と似ていた。

自分が煙草を吸うのは、死に似た経験をしたいからだ、と僅かに働いている中西の脳は思った。煙草を吸わないときの自分は、ただひたすらに生を渴望する人間だ。いつか死ぬことを思っただけに生き続けようと思う人間。生きることとは変化することだ。それは死とどれほど違うのだろう。

煙草を吸っていると、そんな、無意味なことばかりが頭に浮かぶ。たぶん思考の回路の大半が遮断され、単純化されるからだろう。単純化されれば思考は安らかになる。活性化した思考は見なくていい不安や焦燥にまで目を向ける。結果、人間は強迫的になる。頭のいい人間は不幸だ、ということだ。

人間は原初、単純だった。誰も自分が死ぬであろうことなど知らなかったはずだ。その間は、誰もが幸せだっただろう。それがいつの間にか、いつか自分が死ぬことを知ってしまった。それから恐怖が始まり、闘争が始まり、嫌悪が始まった。誰も生きたいなんて望んでいないのに、死への恐怖のせいでどうすることも出来ない。

仕方がないので、みな倦怠と上手く折り合いをつけながら生きている。芸人を見て笑うことも芸術と言われるものを見て感動したと思いつくことも人を愛することも、そうした折り合いの一種だろう。ときどき、中西は煙草を吸いたくなる。たぶん、それ以外に安堵の方法を知らないのだろう。

題名は知らないが、静かなクラシックの音楽が流れている。喫茶店の中には中西のほか客はいない。

中西は煙草をくゆらせて、先日のことを思い出すともなく思い返していた。

そこは芽姫大学文学部講義棟の一室で、七瀬准教授のゼミとして論文の構想発表会が行われていた。

論文構想発表会とは、学生が今度書かなければならない論文の構想を発表して、他の学生の意見を募り、一人では気づくことの出来ない論文の修正点や別の角度からの視点を発見し、今後の論文製作に活かそうというものだ。七瀬准教授の言葉を借りれば、「要するに他人の論文にいちやもんを付けあって、他人の意見を有効活用しましょう」という会だ。多くの学生にとっては、他人の意見を有効活用する機会としてよりも、発表の日までには一定のレベルのもの

を製作しておかなければならないというある種の締め切りとして価値のある会である。

その日は中西の発表の日だった。六十名ほどが座れる教室に学生は二十名弱で、そのほとんどが七瀬准教授のゼミ所属である。中西は教壇の前に立ち、学生たちに向かい合っていた。

中西は既に最低字数の三倍以上の量の執筆を終えており、時間的に全部を発表するわけにはいかなかったので論文の核心となるべき一章の概要を発表することにした。

中西の発表のあと学生たちに意見が求められたが、誰も手を挙げる。七瀬准教授に指名されて意見を述べさせられた学生たちも、文章の誤字脱字を指摘するだけで、内容に触れるものはいなかった。もう少しわかりやすい文章に直さなければならぬかもしれないな、と中西は思った。過不足なく他人に伝わるということも、優れた論文に求められる条件の一つである。

授業時間も終わりに近づき、誰の意見も出なくなってきたころ、七瀬准教授が思い出したように一人の学生に向かっていった。

「そういえば灰島君、まだ発言していなかったね」

当てられた学生がまだ一度も意見を述べていないことには、中西も気づいていた。構想発表会と言っても授業の一環であり、学生は何らかの意見を述べるのが求められる。ゆえに他の学生たちは場にとって無意味な発言であっても一度は声を発していた。多分その学生はやる気がないのか、消極的な性格なのかどちらだろう、と中西は思っていた。

「灰島君は嵐山教授のゼミなんだが、是非今日の発表を聞きたいと参加していてね」七瀬は教室のみんなに紹介するように言った。「灰島君。君の意見を聞かせてもらいたい」

「はい」灰島と紹介されたその学生は返事をして、しかしちよつと考え込むようにして黙った。「……意見はありますが、やめておきましょう」

引っかかる言い方だった。しかし中西はあえて追及せず、七瀬に

任せることにした。

七瀬が灰島に言った。「意見があるのなら言ったほうがいい。どんなところから論文の発展に繋がるものが出ないとも限らないし、灰島君しか持ちえない視点というものがあるはずだ。もし今までに出た意見と同じだというのなら、同じだということを灰島君自身の言葉で説明すればいい。そうすることで、また違った発見があるかもしれない。だから論文に対して自分の言葉で意見することは、必ず中西君のためになるものだし、灰島君自身のためにもなるかもしれない。とにかく、これは授業でもあるんだし、出し惜しみはしないでもらいたいんだけど」

「わかりました」むしろそれが当然であるかのように灰島は意見を述べ始めた。「この論文は実に見事で、すごいと思う。飛躍に次ぐ飛躍で、とても僕なんかには思いつかないような視点ばかりだ。この構想のまま進んでいけば、びっくりするようなものが出来ると思う。是非このまま進んでもらって、完成させてもらいたい。完成したら是非、一番にとは言わなくても、早いうちに、読ませてもらいたいと思う」

「どうもありがとう。そのくらいなら簡単なことだ」意見というよりは希望と言った方がいいその発言に、中西は少し拍子抜けした思っていた。思わせぶりな前ふりに、少なからず身構えていたのだったが。

しかし灰島の次の言葉が意見の核心だった。その発言に中西の心臓は凍りついた。

「ただ、この論文は、作品論としては成り立たないんじゃないかと思う」

灰島はそこでいったん言葉を切った。

「なるほど」と中西は言った。表面上は冷静にしていたが、頭の中は混乱が始まっていた。作品論としては成り立たないというその指摘は、的を射た話だと中西は直感していた。「それは、何故？」

灰島は理由を説明し始めた。

「発表を聞いた限りでは、この論文は＜貧困＞をテーマに田名部幸成『T氏の生活』を読み解くというものらしい。中西君の論文では、取り上げた小説の中で行われる殺人が貧困によってなされたとしている。確かにこの小説を読めばそういう印象を受ける。殺人を犯した登場人物は悲惨な生活をしていたらしいことが語られるし、別の登場人物を通して路上生活者の実態を描き出している。しかし果たして殺人の理由を貧困に求めることが正しいのだろうか。僕はこの小説を二回読んでみたけど、貧困という言葉はどこにも見つからなかった。これはあくまでも僕の解釈なんだけど、この小説において殺人は別の理由によってなされたもので、貧困とは結びつかない。もちろんこの小説のサブ・テーマが貧困であることを否定しない。だからこの論文には価値があると思うし、是非このまま進めていて欲しいと思う。でも……」

そこで灰島は話すのをやめた。言葉が見つからないというよりも、全てを言い切って中西に致命傷を与えることを躊躇っているように見えた。

「作品論としては成り立たない」と中西は灰島の言葉を引き継いだ。中西は床が崩れてどこまでも落ちていつている感覚を味わっていた。灰島の指摘は全て正しいと思った。そして灰島の指摘の正しいことは論文の瓦解を意味していた。

何より、論文が成り立たないことを指摘されるまで気づけなかったことが悔しかった。

「なるほど、確かに君の言うとおりだ」中西にはわからなかったが、内面の混乱に反して表面的には実に沈着に振舞っていた。「失敗だ。また一から書き直さなきゃならないと思う」

「やっぱり……そうなるか」灰島は諦めたような表情を浮かべた。

「完成した論文が読みたかったんだけど」

「いや、指摘には感謝する」

「ちよっと待って中西君。折角今まで進めてきて、分量もかなり書いている論文を一から書き直すというのはちよっと現実的じゃない」

ここまで静観していた七瀬准教授が口を挟んだ。「そもそも、本当に作品論として成り立たないのかどうかは考えてみないといけないし、成り立たないとしたら、上手く修正していくことを考えていかなくてはならない。これはみんなにもいえることなんだけど、論文を進めていくうちに当初の考えと異なる結論になるなんてことはしょっちゅうなんだから。そこからいかにまとまった論文にするかっていうのは、ある種の技術として、身に付けていかなければならないものだと思う」

准教授の言っていることはわかるし、正しいことだと中西は思った。しかし中西は今まで書き進めていた論文を破棄する決意を固めていた。

一から書き直そう。締め切りには間に合うだろう。

授業終了の時間がきて、チャイムが鳴った。灰島はすぐに教室から出て行った。七瀬准教授が、論文についてはまた後で話そうと言ったので、中西はうなずいた。敗北感が自分の中を満たしていることに中西は気づいた。冷静になるには時間がかかるだろうと思った。煙草が吸いたかった。

コーヒーが運ばれてきたのに気づいて、中西は煙草を灰皿に押し付けた。苦いコーヒーを飲むと、脳の回路が刺激されて複雑な思考が戻ってきたような気がした。

中西は今、大学近くの喫茶店、「アグノスティック」に一人で座っている。散歩ついでに立ち寄るにはちょうどいい場所で、胃が震えそうなくらい苦いコーヒーを出すので中西は気に入っている。

店内には静かなクラシックが流れている。店の片隅にランドピアノが置かれているが、中西は弾かれているのを見たことがない。誰かが弾くのもかもしれないし、オブジェなのかもしれない。そういえば、シックなその色は落ち着いた店内によく似合っていた。

中西は大学院生だった。地元の大学の文学部を出たあと、遠くはなれた芽姫大学にやってきた。毎日、小説を読んでは論文を書いて

いる。小説を読むことは昔から好きだった。大学で研究の面白さを知った。このまま研究者の道を進もうと思っている。

近くに知り合いはいなかった。友達らしい友達も出来ていない。寂しくはなかった。研究は面白かった。級友たちはあまり研究に熱心ではなく、話が合わない。

わざわざ地元を離れて芽姫へやってきたのは、現在中西の指導教授である七瀬准教授の教えを受けたからだだった。大学生時代彼の論文を読んで圧倒された。それは深い教養に裏打ちされた緻密な論理で構成され、かつ新しいものを作り出してやろうという野心に溢れていた。何より、文学への深い愛情が感じられた。

ただ、七瀬の講義は少し退屈だった。七瀬は彼の人柄を反映してか、やる気のない生徒にもわかるように丁寧な授業を心がけているようだった。中西にはわかりきったことを何度も繰り返しているように感じられた。それでも七瀬の革新的な論理は刺激的で楽しかった。

灰島との出会いは中西にとって大きな敗北だった。たった一言で灰島は中西に決定的なダメージを与えた。彼の存在は中西の心を痛打し、動揺させた。

中西は煙草の火を消すと、目を閉じて店内のBGMに耳を傾けた。静かな音楽は中西の体内を満たすように流れている。

混乱は今はない。新しい論文の構想も、もうほとんど固まっている。ある程度方向性が決まってしまうえば、あとは書き進めるだけだ。締め切りには間に合うだろう。前以上のものになるかどうかはわからないが、してみせるつもりだった。

敗北感は今も消えない。それは中西をがんじがらめにして身動き取れなくするようなものではなかったが、しかし確かに中西の中に残っているのだ。ときどきコーヒーマシンの苦味のように中西の内奥から沸きあがってくる。そういう時は、コーヒーマシンの苦さで中和するか、煙草の煙で忘れてしまうしかない。

研究で勝敗を考えたことはなかった。ただ、誰も知らないことを

発見することが楽しくて続けてきた。研究は力の誇示ではない。もっと純粹なものだ。

だから、敗北感を感じている現在の自分が嫌だった。自分が矛盾した存在であるように思った。気が狂いそうなくらいの嫌悪感だった。そうした自分は初めてだった。

クラシックはありがたかった。それは綺麗なものだった。綺麗なものに触れていれば癒される。

灰島との勝敗は考えないようにしたかった。少なくとも、論文にそんなものを持ち込んではいけない。

しかし、この敗北感はどうすれば昇華させることが出来るだろう。

2

喫茶店「アグノスティック」のドアを開けたとき、ギターの音が聞こえてきた。懐かしいと中西は思った。昔よく聞いた曲だ。リズムに合わせて英語の歌詞が続く。ピーター・ポール＆マリーの『ブルウィン・イン・ザ・ウィンド』だ。

中西は窓際の席に座ると、注文をとりに来た喫茶店のマスターにコーヒーを頼んだ。中西とはちょうど対称の位置に当たる壁際に小さなスペースが出来ており、そこに一組のバンドが収まっている。向かって左側にギター、右側がベース、背後にドラム、そして彼らに囲まれるように中央にスタンドマイクが設置されており、その前で女の子が一人歌っている。

土曜日の夕方だった。西側の窓から夕日が差し込んでいる。珍しいことに客が七割ほどの席を埋めており、みなそのバンドの方を向いていた。バンドの曲は店内の天井にいくつか設置されているスピーカーからも流れてきていた。

曲が終わると客の中から拍手が起こった。女の子がペコリと頭を下げると、すぐ次の曲に移る。次の曲はサラ・ヴォーンの『ラヴァーズ・コンチェルト』だった。

注文のコーヒーをマスターが持って来たので、中西は尋ねた。

「なにかの催し物？」

マスターはうなずいた。「ええ、土曜日の夜はこうして近くの大
学の軽音部が来てくれるんです。ライブっていうほどのもんじゃな
くって、ま、BGM代わりでね。やかましい？」

「いえ」中西が首を振ると、マスターは満足げに戻っていった。

マスターの言うとおり、バンドは決して大きな音を出してはいな
い。しつとりと、あくまで落ち着いた雰囲気を崩さない形で演奏し
ている。普段のクラシックのBGMが洋楽に変わったただけのように
思えた。

中西は芽姫大学に入学して以来、何度もこの店に足を運んでいる
が、こんな催しがあるのは知らなかった。常連とはいえ、ただコー
ヒーを飲みにくるだけなのだから仕方がない。マスターと話をする
こともないし、大学の軽音部に知り合いがいるわけでもない。

中西はバンドの曲を聞くとともにしに聞いていた。いつもはここで
コーヒーを飲みながら文庫本を読んだり考え事をしたりする。今日
もいつもと変わらず、バンドの曲をBGMに文庫本を読むだけだっ
た。

バンドはママス&パパスの『カリフォルニア・ドリーミング』を
やり、アバの『チキチータ』をやり、カーペンターズの『トップ・
オブ・ザ・ワールド』をやった。『トップ・オブ・ザ・ワールド』
がボーカルの女の子の声に最もあっており、一番よかった。女の子
は軽快で快活な声をしていた。

曲が終わるごとに中西も他の客に倣って拍手をした。

何曲か聞くうちに、何故この日に限って客が多いのかわかるよう
な気がした。バンドは上手くなかった。何度も間違えたし、リズム
も揃っていない。練習不足は中西のような素人の耳にも明らかだっ
た。

しかしボーカルが別格だった。

まるで彼女の周りだけがきらきらと輝いているかのようだ。

確かに彼女は聞くものの耳に染み入るような声を持っていた。彼女の澀刺とした声は聞くものの耳に入り、胸を打ち、興奮させ、そして笑顔にさせた。それは例えばクラシックのプロ演奏家並みの上質さを持っていた。簡単に言うと、彼女のライブは金が取れる。

中西はコーヒーの入ったカップを持ってカウンター席へと移動し、ニコニコとライブに聴き入っているマスターに話し掛けた。

「このライブは毎週やってるんですか？」

「ええ」白髪で温厚に年を重ねてきたようなマスターは笑顔で答えた。「毎週土曜日に、だいたい五時くらいからね。出演バンドは、その週によって違う。都合がつかなきゃ誰も来ないこともある。その辺は、まあアバウトにやってるから」

「このバンドは？」

「お客さん、大学生？ 芽姫？ 曲山？」マスターは中西の質問には答えず、逆に質問した。この喫茶店の近くには国立芽姫大学と私立曲山大学の二つが並立している。

「芽姫。の、院生。この春から」

「桃ちゃんにはファンが多いよ。彼女目当てでくる客も多い」

「桃ちゃん？」

「ボーカルの娘だよ。彼女は桃山桃って言って、芽姫のOGだね。ここ一年くらい、ピアノ弾いてくれたり、歌歌ってくれたり、こっちとしちゃ助かってるよ。繁盛するからね」

「でしようね。彼女の声にはその価値がある」

「プロになれて言ってるんだけどねえ。全くその気はないみたいで。定職にも就かずライブハウスでライブやったり、うちでライブやったり、色々やってるみたいだ。忙しいときにウェイトレスしてもらうこともあるから、会うことがあるかも知れないよ」

「ふうん」中西はコーヒーを啜った。「サインでももらいたいな」

「それは無理だ。彼女は誰にもサインを書いたことがない。プロじゃないからね。一緒に写真を撮ってくれといわれても断るし。私もそれでいいと思う。彼女をアイドルにする気はないからね」

「でも、もったいないな」

マスターは少し考えてから言った。

「同感だ」

次の月曜日、いつものように喫茶店へやってくると桃山が働いているのを見つけた。マスターが言っていたようにウェイトレスを務めているらしい。

中西が窓際の席に座ると、桃山が注文を取りにやってきた。

「やあ」と中西が言った。

「やあ」と桃山も返した。客にする言葉づかいではない。「ご注文は？」

「桃山さん？」

桃山は返事の代わりにピースサインを作る。写真を撮って応ずるべきなのかもしれないと思ったが、もちろんカメラなど持ってきていない。

「この間君がライブしているのを見たよ」

「ん、そう？ 楽しかった？」

「ああ」中西はうなづく。

「そらよかった。じゃ、今度の土曜は…えっと、あなた…」

「名前？ 中西。中西雄介」

「中西さんも歌おっか」

「なにを？」

「何でも。私ピアノ弾くし」

「何故？」

「楽しいから」

「なるほど」中西は笑い出すのを何とかこらえた。「桃山さん、サインもらえる？」

桃山は首をブンブンと振った。「迂闊にサインしないことにしてるんです。保証人って怖いから」

桃山の冗談(?)に構わず中西は色紙とペンを差し出した。いつ

桃山に会ってもいいよう、バッグの中に入れておいたものだ。

「私、プロじゃないから……」

拒否の言葉だった。

「プロにはならない？」

「興味ない」

「人には持って生まれたものがある、と俺は思う。ある種類のものを持って生まれた人間には、他人に対して果たさなければならぬ義務がある、と思う。文豪が小説を書いて読者に発表するようなものだ。君はそう思わない？」

「職業選択の自由って、私、好きですよ」

「君には力があると思う。歌というか、歌もそうだし、人を魅了する何か――。それも、人を動かすに足るほどの大きな力だ」

「歌うのって、私、好きだな」

中西は煙草を取り出して、吸う。煙の色を見て、自分が充分な量の息を吐き出したことを確認する。桃山は目元に微笑を浮かべたま立ち去らずにいてくれた。客がまるでいないのが理由かもしれない。

「歌は不得意なんだ。音痴でね」

「じゃ、一緒に歌おう。私はステージで歌うから、中西さんは客席で。それなら歌えるでしょう？ みんなも一緒に歌ってるから。そしたらきつとみんな楽しい」

「桃山さんは面白いね」

「よく言われます」桃山はあははと明るく笑った。「気障な人は面白いねって言って、優しい人は個性的だねって言って、正直な人は変だねって言うの。ゼーンぶ、おんなじ言葉。でもいいの。無関心な人は何も言わないから」

「気に障ったなら謝る」

「全然。それでも私はすぐくまともに生きているつもりだし、ちゃんと考えて生きてる。それでも人と違うっていうんなら、でもそれは当たり前の話だから。私は私で、私は私にしかねなかったって

いうだけの話だから。それでも友達はたくさんいるし、今までとても楽しかった。これからもとっても楽しいと思う。中西さんとも友達になれたし。だよね」

「…ん、ああ」桃山というのは妙な人間だと思った。行動原理は天真爛漫な子供のようにでもあり、しかし話したときに受けた一つの印象では怜悧で明晰な人間のようにでもある。少なくとも何も考えていない能天気な人間ではないようだ。

桃山はニヤツと笑った。「友達だったら、歌おっか。一緒に」

「俺は音痴だ」中西は跳ね除けた。

3

電話機が鳴っていた。何度目かの着信音で中西はそれに気づいた。執筆の手を止め、腕にしている時計を見た。午前二時に電話をかけてくる非常識な人間は誰だろう。

中西はマウスを操作して、書きかけの文書を保存した。ちょうど興に乗ってどんどん書き進めたいところだった。中断するのは惜しいような気もした。しかし別段腹も立たない。自分の場合、勢いだけで書いた文章はつまらないものになると、中西は思っているからだった。

机の上を手探りして煙草とライターを取ると、席を離れて受話器を取った。受話器を肩で挟みながら火をつける。

「もしもし」

「あ、先生ですか」

「菊地君か」

受話器からは落ち着いた様子の女性の声が流れてきた。聞き知った声だった。中西に対してかかってくる電話の、八割まではこの女性からだった。「用件は？」

「朗報です。すぐにお伝えしたいと思って」

中西は煙を吐き出してから、灰皿が手元にないことに気づいた。

「ちょっと待ってくれ。灰皿がない」と言っておいてから、机から灰皿を取り上げて戻る。「やれやれ落ち着かない。一応訊くけど、今何時だと思ってる？」

「ええと、一時五十七分です」相手は受話器の向こうで時計を確認しているように答えた。

「俺がいつてるのはそういう意味じゃない」菊地はこれまでも何度も非常識な時間帯に電話をかけてきている。「が、まあいい。朗報って？」

「直海賞に先生の小説がノミネートされることになりました」

「ふうん」中西は気のない返事をした。

中西は今小説を書いて生活している。大学を出てすぐ新人賞を受賞し、作家生活に入った。自作がベストセラーになったことはないが、実験的な小説を書く作家として多少の注目を得、何とか生活に困らずやっている。

菊地綾音は中西の昔の担当編集者だった。確か、プロになって三年目くらいに担当になった。以来菊地は装飾のない意見をずけずけと言ってくる。その意見は素直にうなずけることもあれば、議論になることもしばしばだった。他にも攻撃的な意見を述べてくる編集者はたくさんいたが、着眼点の鋭さという点で彼女は図抜けていた。「嬉しくないのですか？ 直海賞ですよ？」

直海賞というのは過去の文豪直海やおよろず八百万を記念して設けられた文学賞で、新進の作家を顕彰するために与えられる。選考が同時に行われる芥台賞と並んで、文学賞には珍しく受賞者が大々的に報道される賞で、作家にとっての登竜門的な賞だった。

「うん、あまり嬉しくない」

「去年芥台賞にノミネートされたときもそんな感じでしたけど……何故ですか？ 受賞できないと思ってらっしゃるのですか？」

「というより、賞に興味がないんだ。俺が小説を書くのは、どちらかといえば研究のためだから」

「しかし、直海賞にしろ芥台賞にしろ、その年のベストセラーを左

右するほど大変な賞です」

「取ったら話題になるだけの賞で、たいした権威もないよ」

「しかし出版社とすればこれを取るか取らないかは大きな違いです。作家だって、取れそうなら血眼になって取りに行きます」

「そうさせているのは出版社だと思うがね。まあ、こんなところでそんな議論をするつもりはない。そんなことを報告するために俺の執筆の邪魔をしたの？」

「小説を書いていらしたのですか。失礼しました。新作ですか？」

「うん……書下ろしで、秋ぐらいに文庫で出るはずだ。君のと同じやないが」

「へえ、先生が長編を書くなんて珍しいですね。それとも短編集ですか？」

「長編だ。向こうの担当がどうしても一度長編を書けてしつこくてね。色々と借りもあるし、仕方なく引き受けた。折角の長編だから、今度は小説っぽいものを書くつもりだ」

「そうですか、楽しみです。でも残念だな。私が担当のままだったら、絶対私の方が先に書かせたのに」

「そう、君が最初に言ってたんだな。もっと通俗性の高い長編を書けと」

「先生にはにべもなく跳ね返されましたけどね」

「君は生意気な新人だった」

「でも、先生はもっと売れるべきでした。今でもそう思ってます。先生みたいな才能が埋没しているのは理不尽です。先生はもっと読者にアピールすべきです」

「文学の価値はそんなところにはない。いや、もちろん娯楽としての価値は非常に高い。だが、それだけではいけない。文学にはもっと様々な可能性がある。俺の役目は、その可能性を一つ一つ試すことにあると思っている」

「しかしエンタテイメント性も認めているのでしょ。でしたら、もっと娯楽性を深めてもいいのでは？」

「だから最近はそうしている。だから直海賞にもノミネートされた。それで充分じゃないか？ それ以上は、もっと適任が何人もいるよ」
「はい。ええ…何度も議論してきたことですね。電話ですし、この辺で引き下がらしましょう。しょせん編集者なんて権限はないんですから」

「何人もの作家がその逆のことを思っているだろうが……。で、用件はそれだけ？」

「ああ、私の担当の水野誠一郎が新作を書き上げました」

その言葉に中西は鋭く反応した。「何故それを先に言わない。何枚？ 内容は？」

「いえ、まだ受けとったばかりなので……。彼女、手書きですから。今から社に帰ってパソコンに起こします。約束ですから、それから中西さんにメールします」

「そうか……。いや、興奮しても仕方ない。よろしく頼む」

「ほんととは、他の作家さんの原稿を見せるなんていけないんですけど……まあいいか。まだ目を通してないですけど、歴史小説というか、伝記小説みたいな感じですね」

「なるほど」

「中西さんが言ってたような、ノンフィクションではないですが」

「いや、彼女は構成力があり丁寧な心理描写が出来るから、そういうのもありだろう」

「私もそう思います。今度ので彼女確実にステップアップしますよ。あとは黒木淳ですが、行き詰まっています。雑誌連載の話もあるんですが、今の状態じゃ二の足を踏んでますね。他社の編集者とも話したんですが、ほとんど書いてないみたいです」

「そうか、面白い作家なんだが」

「いや、彼ならそのうち殻を破るでしょう。私も何とか彼の帰ってくる場所は確保しておきたいと思ってるんです」

「よろしく頼む。いや、俺がよろしく頼むのも変な話だが」

「ええ、はい、努力します。では報告はこれくらいですね」

「そうか」

「邪魔してすいませんでした。いい小説書いてくださいね」

と言って菊池は電話を切った。

中西は煙草を吸うのをやめ、立ち上がってコーヒーを淹れた。苦いコーヒーが中西の胃袋を刺激した。

研究から実作に移ったことは中西にとって生涯何度目かの挫折だった。実作も研究のうちだと自分を慰めてみても、後悔は何度も襲ってきた。研究を辞めたのはそれが自分に向かなかったからでも楽しくなかったからでもない。ただ、研究者が等しく持つであろう一次創作への欲望を捨てきれなかったためだ。

小説を書くことは楽しかった。大学時代、思考した理論をことごとく実行していく。上手く行くこともあれば上手く行かないこともあった。上手く行かないときは理論を修正する。そうしていくうちに新しい理論がひらめき、また実践する。その繰り返しだ。

そのような、理論先行の小説を書いているため、売上は悪い。自称評論家たちの評価が高いことと、一部のもの好きな読者によって中西の生活はなんとか成り立っている。

菊池は何故か担当を外れてからも頻繁に連絡を入れてくる。ときどき一緒に食事をして、文学のことを話し合う。彼女とは意見の合わないことが多かったが、しかし意見をぶつけ合うことも楽しいことではあった。

中西は他の小説家の動向も知りたがった。大学時代にテーマにしていたのは近代文学だったが、現代文学にも優れた文学は多いと思っていた。というより、文学の可能性を広げることが現代文学にしかできないことだった。

菊池は編集者であるだけに現代作家たちの動向をよく知っていた。コーヒーを飲み終えあとをきちんと片付けてから、中西はパソコンの前に座りさっきの続きを書き始めた。

中西は七瀬准教授の部屋の扉をノックして、中に入った。七瀬は「ちょっと待って」とだけ言って、パソコンを操作してこっちへ来た。恐らく書きかけの原稿を保存したのだろう。部屋の奥が七瀬の作業場、仕切りがあつて手前側が生徒などと面会する応接間になっているようだった。机の前の椅子を中西に指し示し、自分はその正面に座る。

中西が七瀬の教えを受けるようになって一年弱が経過していた。その間に中西は論文を三つ、論文と呼ぶには短すぎるレポートを五つ提出していた。大学の学生として驚異的な量である。

「どうでしょうか」と中西が切り出した。中西が言うのは、今度行われる文学研究会で発表する論文のことである。それは学外の人間や教授も参加して行われる、比較的改まった研究会で、中西も論文を発表することになっている。院生が参加することは珍しいことではないが、発表する原稿にはそれなりのレベルを求められる研究会だった。そのためか、七瀬のゼミから発表するのは中西だけである。「悪くない。というより、中西君の論文は今さら僕がどうこういうレベルじゃないようだ。一応、文法の間違^{あか}いとかを探して朱を入れしておくけど、内容自体はこのままでいいと思う」

「そうですか。安心しました」

「あとは締め切りに間に合うようにしてください、と、僕がいうのはこれだけです。コーヒー飲む？」

「あ、はい。じゃ、頂きます」

「中西君はここが地元じゃないんだっただね。東北のほうだったっけ？ 一人暮らしには慣れた？」

「ええ、何とか生きてます」

「一度訊こうと思ってたんだけど、何でわざわざこっちに来たの？ 東北の方にも文学部はあるでしょう」

「七瀬（准）教授に教わりたかったからですよ」

「へえ、中西君でもお世辞言うんだ？」

「いえ、あの、本当なんです」

「へーえ、もの好きだね」七瀬はコーヒーを二つ持って戻ってきて、自分の分を丹念にスプーンでかき回し始めた。砂糖を何個も入れたらしい。

「俺も一つ聞きたいことがあったんですが」と中西がコーヒーに口をつけながら言った。こっちにも砂糖が入っているのか、いつもより少し甘かった。

「なに？」

「灰島っていうのは何者ですか？」

「彼は嵐山教授のゼミに所属している学生だよ。嵐山教授は知っているね？　僕と同じで、日本文学の教授だ」

「講義を受けたことはありません」

「そりゃそうだ。教授は開講していない」七瀬はコーヒーに口をつけた。「苦いな。嵐山教授といえば、僕が若いころ知らない人間はないといわれたほど有名な教授だったんだよね。どういうことか、最近は今研究にも手をつけていないようだ」

「変な人ですね」

「この世界には多い」

「灰島は院生ですか？」中西は灰島のことには話を戻した。

「そう。大学生のときに二年留年している。多分進学に興味がなかったんだろう。気にはかけてたんだけどね。進学したんだから、漸く研究者になる決心をしたのかもしれない」

「優秀ですか？」

「うん、そうだね……」七瀬は意見を述べようとする口を飲み込んだ。「中西君はどう思う？」

「彼の論文を読みました。優秀です」中西は即座に言った。実際に、あの灰島に意見された日以来手にはいる限りの灰島の論文を手に入れた、飢えた犬のように読みふけていた。彼への敗北感を別のものに変えたかったからだ。しかし論文を何本も読んでいくにつれ、敗北感はむしろ深まっていくようであった。

「緻密に精巧に論理を積み上げていく。彼のやり方なら間違いを犯すことはないでしょう。漸進的に研究の成果をあげていく。彼のような研究者こそ、理想的でしょう」中西はしかし、あくまで冷静な様子を崩さなかった。

「ふむ」七瀬は満足げに頷いた。「概ね同意見だ。付け加えるなら、少し慎重に傾くきらいがあるというところか」

「いえ、あれでいいのだと思います」

「僕は中西君のことも評価しているよ。君は、これからどうするの？」

「これから、というのは？」

「実は一回聞いてみたかったんだ。中西君は研究者を志しているの？　つまり再来年博士に進んで、どこかの大学に就職して、ということだけど」

「そのつもりです」

「わかった。じゃあそのつもりで僕も指導することにしよう。だって、正直、今の君なら僕がわざわざ指導する必要もなく、勝手に研究者になれるだろうけど」

「ありがとうございます」

「ただ、これから先は長いし、どんなことでつまづくかもわからない。そのときはしっかり粘り強くやってもらいたい。僕なんかは何度もつまづいて、それでも何とかやってるから、何でも相談して欲しいと思うし、僕以外にもどんな人を頼ればいいと思う」七瀬は一度言葉を切って、コーヒーを飲んだ。「けど、君みたいな人はそんなにやってしまうものなんだけど」

そのとき、教授室のドアがトントン、と鳴らされた。七瀬が立ってドアを開けると、そこにいたのは灰島だった。

「ああ、灰島君。悪いけどちょっとだけ待ってくれる？」

と七瀬が言っているのが聞こえた。自分との話の区切りをつけるつもりなのだと思って、中西は席を立った。既に七瀬との用件は終えている。

「俺はそろそろ退席します」

「ああ、そう？」なにを考えることがあるのか、七瀬は少し考え込んだ。

その間に灰島が中西に気づいて「ああ、中西君か」と声をかけてきた。

「よう」と卑屈にならないよう気軽に応じる。

「研究会で発表するそうだね。僕も聞きに行くことにしている」声音は柔和だったが、灰島は真剣勝負に赴く剣士のような鋭い眼光をしていた。

まるで俺が採点してやると言わんばかりのその態度に中西は少しむっとした。

「そっちこそ、最近何か論文を書いてないのか？」

「ああ、まさにそのことで来たんだよ。一本苦心しながら書いてみたんだけど、うちの師匠はあてにならないから、七瀬（准）教授に見てもらってたんだ」

苦心しながらという殊更な言葉が、中西にはむしろ灰島の誇らしげな自信を感じさせた。

「うん、それなんだけど、もう朱は入れ終わっているし、すぐに渡すことが出来る。だけど……」七瀬は中西の方を見た。「中西君も見えない？」

「はい？」

「中西君に意見を出してもらえば、必ず灰島君の論文のためになるし、もしかしたら中西君のためにもなる。灰島君、どうだろう」

「ええ、それは僕はありがたいです」灰島はうなずいた。自信があるようだった。

中西は嫌だった。灰島の論文はもう何本も読んでいる。読むたびに、その地道で堅牢な論理にため息をつかされてきた。翻って自分の論文を思うとき、自分の思考が如何に飛躍によって成り立っているかを思い知らされる。

中西の飛躍に次ぐ飛躍というやり方の方が挙げられる成果は大き

いはずだ。灰島の一步踏み出すごとに足場を踏み固めるというやり方ではいつまで立っても前に進まない。

しかし灰島の地道な論文を読むたびに、足場の薄弱な論理の怖さを思わされる。次に踏み出すべき地面がそこにはないのではないか、踏み出した瞬間奈落の底へと転落していくのではないかという恐怖に慄かなければならなくなる。それは中西のやり方を糾弾されているようでもあった。

「読みましょう」覚悟を固めてから中西はうなずいた。研究者として生きていく以上、いつまでも灰島におびえているわけには行かないのだ。

中西は決闘へ向かう剣士のように鋭い表情をしていた。

学生の間、中西は他の学生がだらけた生活を送ってしまうのとは違い規則正しい生活をした。毎日日付が変わる前には眠り、七時間前後で起きる。睡眠が少ないのも取りすぎるのも思考にとってよくないことだと思っているからだ。

料理は不得意だったが、できるだけ自炊した。野菜を多く使うようにしていたし、脂っこいものはあまり作らなかった。食事を抜かすこともほとんどなかった。

掃除もよくしたし、ゴミを溜めることもなかった。取った授業は体調が悪いとき以外全て出席した。

別に意識的に自律的な生活をしているわけではない。ただ自然にそうありたいと思った生活をしているだけだ。夜遊びが好きなら毎日遊んだだろうし、面倒くさがりだったら好きなだけ自堕落な生活をしただろう。

だから中西は自分が真面目であるとも優等生だとも思ったことがない。ただ好きな生活をしているだけだ。

中西はよく図書館へ行った。図書館では当然ながら本を読んだ。本を読みながら、しかししばしば別のことを考えていた。論文の構

想を練ることもあったし、もっと別の、例えばプロ野球の好きな選手のことを考えたりもした。図書館の静かで開放的な雰囲気と考え事に適していたのかもしれない。純粋に読書を楽しみたいときは日が落ちてから家で読むようにしていた。

中西はよく散歩をした。散歩をするときは何も考えないようにしていた。風景を見るのが好きだった。澄んだ空が好きだった。道端の花が綺麗に咲いているのが好きだった。知らない道が好きだった。季節の匂いが好きだった。そうしたものに触れるためには、思考は余計なものだった。頭の中を空っぽにして、中西はよく歩いた。

歩く場所はどこでもよかった。まだよく馴染んでいない町を足の向くまま歩くこともあったし、大学のすぐ傍にある丘山に登ることもあった。よく知らない場所からなんとなく見当をつけながら帰るのが楽しかった。ごく稀にいつまで経っても帰り着けず、バスや電車を使わなければならないこともあったが、だいたいなんとなく降り着けるのだった。バスや電車の中で静かに座って町並みを眺めるのも好きだった。

歩いているとき、時々、ピン、と思いつくことがある。それはだいたい次に書こうと思っている、あるいは書いている論文のことだった。何も考えないようにしているはずなのに、何故か急に何かが無い降りるように考え付くのだった。

そしてそれはいつもとてつもない考えのように思った。今まで誰も考えたことのない画期的で革新的な考えだと思った。自分は世界一の天才だと、頭の片隅でそんなことはないと苦笑しながらも思った。そしてそんなときは、世界の全てをわかったような気になるのだ。世界の真理を解き明かしたのだと。

しかしそれはいつも、一瞬で消えてしまう幻想に過ぎないのだった。

そうした思い付きを、中西はわざわざメモに取ったりしない。メモ帳を持ち歩いていた時期もあったのだが、いつの間にか嫌気が差してやめてしまった。散歩はもっと純粋なものでなければならな

った。

読書をした後などは大学内をよく散歩した。大学の中だけでも知らない場所が多いものだった。運動場や部室棟など普段近寄らないところも含めてあちこち歩き回った。

今もそんな風に歩き回っていた。大学という場所は基本的に開放的な場所なので、自分とは関係のないところを歩いていてもとがめられることもない。

体育館の脇道を行って行き止まりになったところで引き返そうとすると、「中西さーん」と一際大きな声で呼び止められた。呼ばれた方をみればテニスコートがあった。

コートの中心に桃山がいた。

中西があっけに取られていると、桃山が「中西さーん」ともう一度呼びかけて右手をブンブンと大きく振っていた。桃山はジャージ姿にテニスラケットを持っていた。手を挙げて応えようと今度は手招きに変わった。

出入り口から入って見ると中の様子がよくわかった。桃山はコートの片側の真ん中に立っており、反対側のコートに別の誰かが立っている。彼女もラケットを持っている。多分試合をしているのだろう。

ラインの外側に、くたびれた様子の学生たちが何人も座っていた。桃山と一緒にテニスをしている集団、ということなのだろうか。テニスサークルなのかもしれない、と中西は思ったが、それにしては誰一人としてテニスウェアを着ているものはなく、多くはジャージ姿で、ひどいのはジーンズだった。

ラインの外側にいる連中は二十人ほどだろうか。よくみると、どうも大学生に見えない人間も多く混じっていた。中学生くらいにしか見えない女の子や、三十代のような男性。大学とは老若男女様々な人間が入学できる学校だが、しかし中学生くらいの子供が入学するケースは極めて稀なことである。いちいち詮索する気は中西にはなかったが。

「やあ、桃山さん」コートの内側に入らないようにしながら、中西は桃山に声をかけた。

「中西さん暇ですか？」

「まあ、暇っちゃ暇だ」実際、このあと予定があるわけではなかった。

「じゃテニスしましょう勝負しましょうあっち行ってください」

「いきなり言うなよ」

「斉木さーん。交代来ましたー。休んでくださーい」桃山は声を張り上げて反対側のコートにいる人間に言った。多分桃山と試合していた人間が斉木というのだろうし、斉木はもう疲れてしまっただけで交代したがっていたのだろう。コート外でへばっている連中に交代できそうな人間はいない。

「桃山さん。俺、運動する格好してないんだよね。それに、テニスなんてしたことない」

「大丈夫です。出来ます。とにかくあっち行って構えてください」押し切られるようにして反対側のコートへ行き、斉木さんと思われる女性からラケットを受け取った。何故この場所にジーンズを着ている人間がいたのかわかったような気がした。

なんとなくラケットを持って中腰で構えていると、向こうの桃山がボールを高く上げて打ってきた。ジャンピングサーブというやつなのだろうが、それにしても動きがぎこちなかったしボールはへなへなだった。桃山も初心者なのではないだろうか。

とりあえず来た球を打ち返したが、上手く打てずにネットに引っかけた。仕方なくそのボールを拾い上げて桃山がしたようにサーブを打とうとしたが、ボールはラケットに当たらなかった。運動は得意じゃない。ちゃんと当たるように下から打った。

ルールも何もあったもんじゃなかっただろう。とにかく来た球を打ち返すだけの遊びだった。ツーバウンドだろうがスリーバウンドだろうが構わず打ったし、打ち返せなかったときは拾ったところから再開した。

テニスなんてもんじゃない。ただの子供の遊びだ。

五分もすれば息が切れてしまったので、交代してもらった。体力はないほうだ。だいたい、いきなりやれといわれてやれるもんじゃない。コートを出るとその場に座り込んでしまった。汗が服に染み込んで気持ち悪かった。

ほい、と何かを差し出されたので顔を上げてみると、スポーツドリンクだった。これは大学生くらいの男が中西にスポーツドリンクを差し出している。中西は謝して受け取った。カラカラの喉にスポーツドリンクは美味かった。

「友達ですか？ 桃山さんの」ドリンクをくれた大学生は中西の隣に座った。

「はい」

「俺もそうです。桃山さんは友達の友達でした。俺がその友達を歩いていると、桃山さんが通りかかってその友達と話しはじめて、なんかついでのいつの間にか俺も友達にされちゃってました」

「変な人だよねえ、桃ちゃんって」後ろから声がしたので振り返ると、今度は十代に見える女の子が話しに加わってきた。

「誰とでも友達になろうとするし、いつだって楽しく遊ぼうとする。本能の赴くままにいきてんねありゃ。子供だね、子供」

「のわりに、きっちり参加してんじゃねーか」彼女の友達だろうか、彼女と同年輩の女の子が彼女の肩を掴んだ。「楽しそうにテニスしてたのは誰だよ」

「そりゃ、さ、あんなに嬉しそうに誘われたら、断れないじゃん。暇だったし。みんなだってそうでしょ」

その言葉には誰も応じなかったが、しかし中西の見る限りみな肯定の表情をしているようだった。

桃山には人を惹きつける何かがあるとみた自分の目は正しかったと思った。

「おい、新入り、こっちこいや」呼ばれたので見てみると、全身垢まみれでよれよれの服をきた初老の男性に手招きされていた。その

周囲にも二三人、同じような格好の人間がいる。

「ホームレス、ですか？」

「おうよ。そんなんでも桃ちゃんの友達にゃあ違いねえ。桃ちゃんフアンクラブさ」

中西は今さら驚かなかった。

「おめえよ、勘違いすんじゃないぞ。誰だってよ、男なら一度は桃ちゃんに惚れるんだ。あんな明るくってかわいい娘他にいねえかな。男じゃなくなっちゃったっているかもわかんねえ。ま、そんな魅力的な娘さ、ありゃ。だろ？」

「さあ？」

「でもな、誰一人としてその想いを持続けたものはいない。なんでわかるか？ 人間には分ってもんがある。分相応不相応ってやつだ。あの娘には、力がありすぎんのさ。恋人ってのは、隣で一緒に走り続けるやつのことだろ。誰だって、あの娘の隣で走るのは無理なんだ。あの娘と一緒にいるうち、いつか、諦めちまう。あの娘に並べる人間なんて、いやしない」

「彼女の力によく認めているつもりですよ」

「まあ実際問題、そこまで行かずに告白したやつもいるんだけどな。若気の至りってやつかな。違うか。そいつがどうなったか知りたいか？ 教えねえ。自分で確かめろ、そんなもん」

5

灰皿には大量の煙草の吸殻がたまっている。映画が終わって中西はリモコンを操作してDVDを消した。煙草の袋に手を伸ばし、もう一本火を点ける。黒いテレビの画面の中に白い煙が微かに浮かんだ。

少し前にロードショーされた、話題にもならなかった映画だった。原作が好きな小説で、暇が出来たので見てみることにした。

原作から内容が大きく改変されていた。受ける印象も違う。中西

はそれが悪いことだとは思わない。映画には映画にしかできないことがある。小説には小説にしかできないことがある。もちろん、多くの小説から映画が生まれているからといって、小説が映画の材料に過ぎないわけではない。小説の方が映画より価値があるなどとも思わない。

差し当たって、やらなければならない仕事はなかった。仕事がないわけではない。締め切りが近い小説は既に書き終えてしまった。中西は執筆速度の速い作家だった。今までにスランプで書けなくなつたという事もない。多分、どこかでこれはビジネスだと割り切っているところがあるからだろう。

深夜二時を過ぎていた。この仕事に就業時間というものはない。毎日決まつた時間に執筆する作家もいるし、書きたいときに書く作家もいる。中西もどちらかといえば時間を決めずに書くほうだった。徹夜することもあるので今の時間はことさら遅いわけでもないが、仕事もないのに起きている時間でもないだろう。そろそろ寝ようかとも思っていたが、何故か今日は電話がなるような気がして、なんとなくベッドに向かう気が起きなかった。

灰皿を洗うことにした。ヘビースモーカーではないと思っていたが、最近吸う量が増えた。洗っても洗ってもすぐに灰皿が一杯になつてしまう。中西は不精な人間ではないので、溜まる都度きちんと洗っていた。

中身を捨て、流して洗おうとしたところで玄関の呼び鈴が鳴つた。「こんばんは」スピーカーをオンにすると、女性の声が流れてきた。菊池綾音だ。

「何の用？」予想が外れた、と思いながら中西は言った。

「ええ、ちょっと飲もうと思ひまして。今忙しいですか？」

「それなら電話すればいいのに」

「ああ、いえ、先生のうちで。お邪魔でしょうか？」

「うちで？ …まあ、ちょっと待って」と言つて中西は玄関まで行き、ドアを開けた。

そこには廊下の明りに照らされた菊池が一人と、暗い夜の空があった。賃貸マンションの五階だ。

「ほら、日本酒。残念会です」と菊池は手に持った一升瓶を差し出した。

「まあ、入って。何の残念会だ？」

「直海賞落選したでしょう？ 先生が落ち込んでいると思って。すいません、変に期待させてしまっ

て」菊池は勝手知った様子で中西の部屋に上がりこみ、台所でグラスを用意する。彼女が担当だったころ、ときどきここに来たことがある。

「君ね、あまりひとりで独身男性の部屋に上がりこむもんじゃないよ」

「先生も水割りでもいいですか？」

菊池は手際よく用意を終えると、居間のソファに座り込んでしまった。

「少しは話を聞け」

「先生、私に何かするんですか？」

「俺はしないが」

菊池は笑った。

「大丈夫です。先生のことは信頼してますから」

やれやれ、と思いながら中西もグラスを取り、椅子に座る。

「じゃ、とにかく乾杯しましょう」

「なにに？」

「落選残念でしたとこれからも頑張ってくださいの乾杯です」

中西は無視してグラスに口をつけ、煙草に火を点ける。アルコールは好きじゃないが、請われて断るほど無粋じゃない。

無視されたことを気にする様子もなく、菊池もグラスを傾け始めた。

「今回の落選は編集者としても一ファンとしても、本当に残念でした」

「そりゃありがたいが」中西も菊池の対面にある椅子に座る。「別に俺は落ち込んでない。前にも言ったように、別に受賞したかったわけでもないし」

「先生は少し変わってますね」

「君に言われたくはない」

「政治しなかったのが悪かったんでしょか。私からしたら、先生の作品がナンバー1でした」

「作品の優劣を論ずるつもりはないが、受賞作は妥当だった。藤城さんは五度も候補になっているし、受賞が遅すぎるくらいだった」

中西が言った藤城とは藤城成城という作家のことで、今季の直海賞の受賞者だった。藤城は既にベストセラーを何作かものにしていく中堅作家だ。

「藤城さんは今まで運がなかったですよ。今までのノミネート作が全部他社の雑誌だったから」

「そういうところが芥台賞と直海賞の弱みだ。雑誌社が主催しているから、受賞作に社会的な偏りが出る。商業的に仕方ないんだが」

「商売に関係のない賞が必要なのかも知れませんが」

「うん……。いや、俺たちはプロなんだ。売上のことは考えなきゃいけないし、会社のことも考えなきゃいけない。ある意味、自分たちが食っていくことも考えなきゃいけない。作品の価値が全てっていうのは、プロとしては失格だ」

「でも、編集者としては、それはこっちの甘えのような気もするんですよ」

「もちろん、そっちも売ればいいっていうんじゃない、文学全体のことを考えなくちゃいけない。まあ、だからこそ面白くもない小説を書いている俺なんか食っていけるんで、今の状態もそれなりに正常なんだろうが」

「先生は人気ありますよ」

「一部にはな」と言って、中西はグラスを傾けた。もう中身が空になっていた。アルコールには強い方じゃなく、もう少し酔いが回っ

てきたようだった。冷蔵庫の方へ行って、空いたグラスにカルピスを注いだ。

「もう飲まないのですか？」菊池もグラスを空けてしまい、二杯目を手ずから注いでいた。

「酒は好きじゃない」

「そうですか」菊池は二杯目を一気にあおり、少し考えるようにしてから「先生、私失礼なことを言います」と言った。

「なに？」

「最近の先生は変です」

菊池は三杯目を注ぎながら言った。

ほう、と中西は息を吐いた。菊池は酔っているのか、それとも酔った振りをして本音を言おうとしているのかも知れない。何が出てくるのかと思った。

「どんな風に？」

「それは……」菊池は言葉に詰まった。「つまりません」

「何が？」

「小説です。先生の小説はおかしいです。間違ってます。少しも面白くない。先生、いったい何を考えているのですか？ 何故あんなに面白くもないものを書くのです？ あなたはそんな作家ではないでしょう？」

「そうかな」遠慮なく面罵されて少し腹が立ちかけていた。「面白く小説を書いているつもりなんだが」

「そうです。その通りです」酔っているにしては菊池の口調は平生と全く変わらない。「あなたは確かに面白い小説を書いています。きっと最近のあなたの小説を万民が歓迎するでしょう。きっとベストセラーになるでしょう。しかしそれは大衆に迎合した楽しいだけの小説です。信念も情熱もない薄っぺらなほら話です。来季の直海賞は取れるかもしれませんが。あなたはベストセラー作家になれるかも知れません。でも、そんな、そんなものが、あなたの書きたかったものですか？」

中西は仕事机に置いてある煙草をとろうとして、やめた。煙草に頼ることは逃げになると思った。

「読者に受ける作品を書けど、君が言ったんじゃなかったか？」

「呆れた」心底呆れたという口調で、しかし全くよどみなく菊池は言った。「私のせいにするのですか？ あなたはわかっていたはずです。私は読者に媚びろなんて言っていない。小手先で小説を書けなんて言っていない。私はあなたの作品にとってプラスになることをしろと言ったのです。あなたはわかっているでしょう。あなたはあなたの矜持と情熱を捨ててはいけなかった」

中西は無意識のうちに煙草を取り上げて、気がついて放り捨てた。菊池は立ち上がり、中西の放り捨てた煙草を拾い上げ、丁寧に箱の中に戻した。

「先生、私ひどいことを言いました。ごめんなさい。忘れてください。なかったことにしてください。お酒を飲みましょう。いえ、先生は飲まないのでしたね。代わりに私が飲みます。高かったのです、これ」

中西は菊池の手から瓶を取り上げた。まだカルピスの残っていた自分のグラスに注ぎ、一気に飲み干した。妙な味がした。

一瞬、世界が揺らいだ。目の前が真っ暗になった。アルコールには弱いほうだ。

目の前に菊池の顔があった。「先生、大丈夫ですか？」菊池の声が遠くで聞こえた。

妙に腹が立ってきた。

「……何でもかんでも知った風な口、聞きやがって」

「はい？」

「俺だって……」思いつく限りの言葉で罵倒してやろうと思った。一つも思いつかなかった。混乱していた。泣きたくなった。泣くわけにはいかなかった。「ちくしょう、関係ないだろう君は。俺が俺の作品をどう書こうが、俺の勝手だ。知ったこっちゃないよ君は」
「そんな、なんてひどいことを」はじめて菊池の声が震えた。「関

係ない、なんて……。……いえ、そうですね、私が悪いのです。先生はもう寝やすんでください。私は私で一人で飲みます」

不意に、中西は我に帰った。自分がなにを言ったのか知った。菊地の顔が曇っているのをはじめて見た。

「ん……。む、少し酔ったようだ。すまない、もう大丈夫だ。君はもう帰った方がいい」

「いえ、先生を放つてはけません」

「大丈夫だ。ひどいことを言ったようだ。すまなかった。取り消すから、どうか気に病まないで欲しい」菊地が台所に立って、水を持ってきてくれた。一飲みすると少しは気分が和らいだ。

「ありがとう。俺は大丈夫だから、気にしないで帰ってもらっていい」

「あの、でも……。」菊地は少し言いにくそうにした。

「どうした？」

「あの、まだ私が持って来たお酒は残っているのです」

「なんだと？」

「ですので、それだけは飲んで帰ろうと思います。ああ、気にしないで、中西さんは寝やすんでいてください。一人で飲めますから。……。中西さん、どうしました？」

中西は呆れて笑っていた。

6

拍手を聞きながら中西はギターを下ろした。万雷の拍手は彼に向けられているのではないことを彼は知っていた。賞賛とは異常へ向けられる花束である。彼の目の前にはスタンドマイクを前にして小柄なからだを一杯に跳ねさせて拍手に答えている女の子の姿がある。彼女は今、中西のギターに合わせて『フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン』を歌った。彼女は最高のボーカリストだ。

ボーカルは桃山だった。

中西は懷から煙草を取り出し火を点けた。手が少し震えている。コードを抑える力を込めすぎたのかもしれない。桃山は振り向いて中西に握手を求めた。セッションが終わったときの彼女の儀礼らしい。

長い間ギターは弾いていなかった。高校時代、暇をもてあまして練習した。それだけだった。人前で弾いたこともなかった。ましてやライブをしたこともない。ただ好きなように音を鳴らしていただけだ。だから上手くない。

数日前、中西は喫茶店で頼んだコーヒーに手もつけず、煙草を吸っていた。吐き出した煙が天井へ昇っていきやがていつしか消えていくのを何とはなしに見ていた。何も考えていない。何も考えていないのは心地よかった。

「や、中西さん」桃山がやってきた。注文をとりにきたのはマスターだったので、桃山がウェイトレスをしているとは思っていなかった。

「ぼやっとして、思索ですか？」

「そんなところだ。桃山さん？」

「はい」

中西はゆっくりと煙草を吸い、短くなったので灰皿に押し付けた。「俺は昔ギターを練習していたことがあった。ビートルズに憧れていてね」

「彼らは私も好きです」

「一度、歌ってくれないか？ 俺の演奏で」

「わあ、それは楽しそう」桃山は快く了承してくれた。

ただし曲は『フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン』を指定してきた。中西は『フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン』を弾いたことがなかった。

「ライブをするときは、一度は必ずやる曲なんです」と桃山は言った。「聞かせたい人がいるの。どうしても一度は聞かせて、馬鹿にしたような顔で、だけど笑っているような顔で、ふーん、なんて、

楽しいんだかつまらないんだかわかんないような感想を吐かせてやりたいと思ってるんだけど。そして私は告白するの。王子様王子様、私をあなたのお姫様にしてください、ってね。だけどあの人一度も来やしない」

それから数日間かつての勘を取り戻しながら必死で練習したが、上手く弾けただろうか。少なくとも、ボーカルに値するような演奏ではなかっただろう。演奏を終えた今、少しの満足と後悔があった。握手をしながら中西は桃山に言った。拍手はまだやんでいない。

「桃山さん、俺と一緒に来ない？　つまり、俺の故郷までついてきてくれということなんだけど」

「ありがとう」桃山は笑顔をみせた。「でも、ごめんなさい。私は行くわけにはいかないの。私には、うーん、なんていうかな、もう王子様がいるから」

「運命の相手ってやつ？」

桃山は首を振った。「ううん。運命のことは知らない。運命なんて私は信じてないから。だけど、どうしても。何度考えたの、この人じゃないんじゃないかって。だけど、どうしても、どうしたって。この人じゃなきゃだめなんだ。って。死ぬまで一緒にいたいって、なんか思うんだ。だから……」

中西は苦いものを嚙んだようにくくつと笑った。「それはいい」という呟きは多分拍手にまぎれて桃山には聞こえなかっただろう。

拍手が途切れる前に中西は舞台を降りた。桃山は舞台に残り、別のバンドとライブを始めた。中西はカウンター席に向かい、マスターにコーヒーを頼んだ。

「いい演奏だったよ」

「このコーヒーは美味かった。いや、ここの雰囲気、マスターの人柄、ときどきあるライブ、全部含めて俺は好きだった」

「どこかへ行っちゃうの？」

「いいえ、帰るんです」

「もうここには来れないんだね？」

「ええ」

出されたコーヒーはいつものように苦かった。

「さて」ライブが続いている中、中西は席を立とうとした。

「いいの？ 桃山さんを待たないで」

「ええ、やるべきことは終えました。あとはもう一人。それが俺がこの町で出会った全てだ」

中西は立ち上がった。曲が終わったのか拍手が巻き起こった。

「結局、完敗だったな。研究も、それに……」中西の呟きは拍手にまぎれた。

「元気でな」マスターの声が後ろから追いかけてきた。

「マスターも」振り向かないで中西は手を振った。

次の演奏が始まる前に中西は店を出た。

店内は薄暗かった。狭苦しい空間で、しかし空調が効いているのか案外空気はよどんでいない。手にビールのジョッキを持った男女がいくつかのテーブルに別れて談笑している。彼らの心底楽しそうな顔つきはあたかも世の中に悲しみが存在していないかのようだ。

中西は煙草に火をつけた。ここは禁煙ではない。アルコールに弱い中西は最初一杯だけでもうジュースに変えていた。

芽姫大学文学部の飲み会が行われていた。学部全体の親睦会という名目で行われ、中西の見知らない学生も多い。教授も英米文学やアジア文学といったさまざまな文学部の教授が出席していた。

親睦会とは言うものの、各々気の合った仲間とグループを作って飲んでいるようだった。最初は同じゼミの友人と話していたのだが、その友人が別のグループに混ざっていつてしまい、少し手持ち無沙汰だった。

灰島の姿を見つけて中西は近づいていった。灰島は席の隅のほうで一人つまらなそうにジュースを飲んでいた。

「よう」と中西は声をかけた。

「よう」と灰島も応じた。

「意外だな、灰島が出席しているとは」

「うん、まあ、こういう場は苦手だ」

「飲まないのか？」灰島は一杯目からビールを飲んでいない。

「アルコールは嫌いだ。自律的な思考ができなくなるから」

「同感だ。俺は弱いほうじゃないが、あまり過ぎさないようにしている。アルコールが入ると思えば拡散して、論理的な働きをしなくなる。こういう場なら少しは仕方ないとは思うんだが」

「怖いよ。普段の自分とはまるで違う思考をしてしまうことに。人間は結局細胞の集まりでしかないんだという事実を突きつけられる。思考も脳細胞の働きの結果でしかなく、外的物質によって容易に改変可能だという事実に愕然とする。アルコールは嫌いだ」

「お前、友達はいるか？」と中西は訊いた。

「少ない」灰島はふと気づいたような顔をした。「どうして？」

「俺は高校のころには気づいたよ。社会には見えないルール、ルールと言うか習慣みたいなものがあって、人間はその中で互いを了解しながら生きているんだって。その網のようなものの中でなら他者を捉えられる。逆に言えば、そこから外れた人間は理解する、理解したと思ひ込むことができない。だから、人間は自分を社会の網に適合させていかなければならない。そうすることが、生きていくってことなんだろう。そう思わないか？」

「思うよ」と、灰島はうなずいた。「だから僕は自分を社会に適合させる努力はしている」

中西は吹き出した。「それでも、か」

「やっぱり外れているように見えるか」灰島は少し考えてから言った。「努力はしている。外れているという自覚もある。でも僕には自我もある。誰にだってあるだろう。人には中心点があって、そこからいかに社会的な人格に近づけることができるかということなんだろう。人間には限界がある。限界は人それぞれだ。僕は努力しているし、これ以上は僕の人格を侵す事になる。それは僕には耐えら

れない。充分じゃないかな。これ以上適合させる必要もないだろう」
「人間、色々だ」中西は楽しかった。自分も人から外れたところがある。自分を社会と適合させようとして、しかしそれは口で言うほど簡単なことではない。

それがさして苦でもないのは、中西には研究があるからだった。研究している間は社会との関係を封鎖することができる。孤独に真理を追い求めることができる。自分にはそういう生き方がある。灰島もそうだろう。

「人間に優劣があるかな」と灰島が訊いてきた。

「ない」中西は断言した。「その根拠としては、例えば人間の多様性が挙げられる」

「そうかな」灰島は反駁した。「常識的にはそうだろう。しかし実際はどうかな。誰もがオリンピックに出られるわけではないし、誰もが長く生きられるわけでもないし、誰もが他人と明るく話せるわけでもない。なぜこんなに、個々によって明白な差があるんだろう。人間は平等でもなければ世の中に条理はないんじゃないだろうか」

中西にはわからなかった。中西はこれまで自分の生き方を否定しなければならぬような挫折をしたことがなかった。個々の差のあることは認めるがそれは優劣とは関係のないものだと思っていた。

「でも、少しわかる気がする。灰島の論文を読んだよ。学問の王道というべきものだ」

「王道？」

「学問に王道なしの、ロイヤルロードじゃない。学問のあるべき道。学問のとるべき姿だ。ある小説でそういう使い方をしているのを見て、俺も王道を肯定的な使い方をしている。王道っていい言葉だろう。……君の論文は、癪だが、すばらしかった。とても勝てないと思った。わかっている。研究は勝ち負けじゃない。でも、君にはどうしても勝てないと思ってしまう。敗北を感じている」

「質の悪い冗談だ」

「冗談じゃない。君の研究態度は、地盤を固めながら一步一步踏み

しめていくというものだ。遅々としても確かに研究を進歩させていく。あれこそが学問のあるべき姿だ。学問の王道というものだ」

「馬鹿な」灰島は少し声を荒げた。「僕は……僕こそ中西には勝てないと思っていた。君の革新的な論理にはどうしても敵うべくもないと……。何故だ。君の研究こそ文学を高めていくものだ。君の論文は野心に満ち飛躍的で、必ず文学の新しい道を切り拓いていくものだろう。それこそが……君の言う学問の王道だ」

「なんだと……」中西は愕然とした。とすれば、お互いに相手に対して敗北感を抱いていたということになるではないか。

「妙なものだな」灰島が言った。

「妙だ」

どちらからともなく苦笑した。

「君は研究者の道を歩むのか？」

「うん……そうあれたらいいと思う。僕はそういう風にしか生きられないから。君もそうだろう？」

「俺は……」中西は少し言葉に詰まった。「故郷に帰ることになった」

「故郷に？ 学校を辞めるということ？」

「そうだ。気ままに勉強できる立場じゃなくなったんだ。手はないでもないが、俺がやめるのが最善だ。だから俺は学校を辞めることにした。なに、研究は野にあってでもできる」

「うん……でも……」灰島は気落ちしたように見えた。「さびしくなるな」

「今日話せてよかった。一度はこういう機会を持ちたかったんだ」

「ああ、僕もそう思って今日はここへ来た。」

「いい論文を書けよ。そして俺に読ませてくれ」

「そっちこそ。いや、君ならどこにいたって論文を書くだろう。君の論文なら有名になるだろうから、僕が手に入れる機会は容易にあるだろう」

「そう、俺たちはそうやって研究者として生きていくんだ。乾杯し

ないか？」

「ああ、今日くらいはアルコールもいい」

「いや、俺たちにそんなものは似合わない。そんなもので思考を紛らせる必要はない。そうだろう？」中西はニツと笑った。

灰島も笑って「そうだな」と言った。

二つのジュースが運ばれてきて、無言で杯を合わせた。カンと鋭い音が響いた。」

それからすぐ中西は芽姫を去った。

それ以来灰島修吾とも桃山桃とも会っていない。

7

受話器を置いてから、椅子に戻って中西は煙草に火を点けた。最近馬鹿みたいに煙草の量が増えている。大量の煙に頼らなければ、もうぼんやりすることも出来なくなってしまったらしい。

それは明らかに墮落だった。

さっきの電話では、国が中西に賞をくれるらしい。何という賞だったか、聞いたはずだがもう忘れてしまった。多分受賞理由は多年にわたる芸術への貢献うんたらだろう。

芸術への貢献などしていない。貰いたくはなかったが、プロになる以上貰えるものは全て貰うと、プロになるときに決めた。その決意のせいで、今まで何度意に染まぬことをしてきただろう。

いつの間にか国から賞を貰う年齢になってしまった、と中西は思った。いつからか年を数えることをやめてしまった。調べればいくらかでも確認できる。わざわざ覚えておくほどのことではない。

煙草を吸い終わってから中西は小説の執筆に取りかかった。ただ

主人公が活躍して読者を楽しませるだけの小説で、中西が書く必要もない小説だ。直海賞を受賞して以来、そんな小説の依頼が増えた。実験作を書きたかった中西は気乗りしなかったが、プロであるからという理由で受けられる限りは引き受けてきた。そのうちそんな小説の依頼しか来なくなってしまった。

いつの間にか、文学の可能性など追い求めることがなくなり、ただ生活のためだけに小説を書くようになってしまった。文学の研究書を読むこともなくなった。

中西はいくつかのベストセラーを出している。仕事をしなくても死ぬまで生活できるくらいの貯蓄はある。

ならば何故未だに小説を書いているのか、という自問を、今はもう中西はすることはしない。その自問を発することは、自己嫌悪へと繋がらなければならぬからだ。自己嫌悪へ正面から向き合う勇気が、中西には既にある。

昔はしていた。

何故小説を書くのか。

まだ文学の可能性を広げるといふ仕事をなせるはずだからだ。

ならば何故実行しない？

自分は既に地位があり、会社や読者に責任があるからだ。責任のあるうちは果たすし、果たしながら少しづつやるべき仕事をやっているだけだ、と思える。

それはしかし嘘だ。

何度も実験作を書こうとしてきた。そして実際に書いてきた。しかし書くたびに、次第にこんなことをして何の意味があるのかという思いにとらわれるようになった。文学の発展に寄与するのではなく、ただ奇抜なことをやっているだけなのではないか、という気がしてきた。文学の真理はもっと別のところにあるのではないかと、やがて実験作を書くことが苦痛になった。自分には文学の可能性を広げることなど出来やしないと、思ってしまう怖かった。

そのうちに読者受けのことだけを考えて書くようになった。それ

でも手を抜かなかったからか、それとも今までに得たネームバリューのおかげか、娯楽性だけを考えて執筆した小説の売れ行きはよかった。

小説への情熱をなくしながらも小説執筆を続けているのは、未だに新しいものを書く希望を捨てていないからに過ぎない。やりたいにもかかわらずやらないという自己矛盾を中西は抱えている。

行き着く先は自己嫌悪しかない。

もう自嘲は疲れてしまった。ただ惰性で仕事をしているほうがいい。

高級ホテルの広間で授賞式は行われた。国が主催しているだけあってさすがに規模が大きな授賞式だった。

まだらに置かれたテーブルの上には手触りのいいテーブルクロスがかけられている。その上に並べられた料理の数々は目もくらむような高級品ばかりだった。

部屋は広かったが出席者が多いので広くは感じない。各界の第一人者から集められた出席者はみな高級そうなスーツやドレスに身を包み、地位の確かさからくる余裕を漂わせながら近くの人たちと談笑していた。

中西は隅のほうで一人つまらなそうに食事していた。今さらこんな場に気後れするようなこともない。自分も含めて、出席している人間がみな表面を着飾ることにだけ長けた偽者に見えて仕方なかった。

そんな不機嫌な様子で他のものに接して、向こうまで不機嫌にさせることもあるまい。出来るだけ孤立し、話しかけられたときは挨拶だけしてやり過ごすことにしていた。

「中西さんじゃないですか」と声をかけられたときは、さすがにやり過ぎすわけにも行かなかった。面識のある中堅の作家の土田遥堅だったからだ。土田とは雑誌の企画で何度か対談したこともあり、

縁が浅くない。

「おめでとうございます。これで中西さんも偉人の仲間入りですね」
「褒章なんざ、何の価値もないさ。二階へ担ぎ上げられて、下から梯子外されるようなもんだ」

「どうしたんですか？ えらい機嫌が悪いですね」

「年だな。最近、世の中のものが全部不愉快に見えて仕方ない」

「まだ若いじゃないですか。いい加減俺らに時代を譲ってくれらしいのになって、仲間とよく話してますよ」

「逆だ。お前らが育ってないから、俺がまだまだ現役でいなきやいかん」これは半分嘘で、中西は後輩に当たる作家たちを充分認めている。しかし自分の予想をこえるような作品を書くものがないことに対しては不満に思っている。

「おお怖い。みんなにも伝えときますよ。そうだ、今日は菊池女史が来ていますよ。もう会われました？」

「菊池女史とは誰のことだ？」

「我らが敏腕編集者、菊池綾音女史のことですよ。我々は女史には全く頭が上がりませんよ。僕らが若手の時代は、散々世話になりましたからね。悪いところは容赦なく指摘してくるし、しかもその全てが的確なんだ。僕なんか原稿渡したとき、また紙の無駄遣いしたねえって言われたことがありますよ。そのくせ行き詰まったときはすごく暖かいんだ」

「菊池君か」中西は驚いたが、表情には出さなかった。「懐かしい。もう数年会っていない」

「そうなんですか？ よく言われましたよ。中西雄介を見習えって。君もあの人ぐらい意識を高く持ちなさいって。それに、よく中西さんの話するんですよ。あんなにすごい作家はいない、あの人と仕事が出来たのは私の誇りだって」

「そうか。いつの間にか疎遠になってしまった。俺もあのころが一番よかったような気がするよ」

昔はあれだけ頻繁に連絡していた菊池とは、実際にここ数年全く

会っていなかった。少しずつ連絡する機会がなくなり、いつからかぷつぷつと途切れてしまった。

菊池の気持ちはわかるような気がした。文学に対する情熱を失ってしまった中西に愛想が尽きてしまったのだろう。中西も引け目があつて無理に連絡をとろうとは思わなかった。

「じゃ、今日は数年ぶりの再会ってことになるんだ。ちょうどいいから俺連れてきますよ」

「いや」中西は手で制した。「悪いがよしてくれ。会うのはよそう」

「何故ですか？ あつ、そういうことですか」土田が意地の悪そうな表情をした。「なあに、男と女なんて会つちまえば意外とさっぱりできるもんですよ。俺だって別れた女とよく遊びにいくもん」

「そういうことじゃない。というかお前、それは品性を疑うぞ」

「ひでえ。とにかく連れて来ますよ」土田はいそいそと去つていった。

菊池に会いたくはなかった。会えば幻滅した表情をされるだろう。今の中西の著作を、彼女が評価しているはずはない。そんな表情を見るのは嫌だった。もしかしたら感情を隠して取り繕った表情をするかもしれないが、それはそれで嫌だった。

来るんじゃないか、と思つた。このあと受賞スピーチがあるので、逃げるわけにもいかない。

遠くから土田が女性を連れてくるのがわかつた。一目で菊池だとわかつた。菊池を見るのは数年ぶりだったが、少しも変わっていないような気がした。

気を利かせたつもりか、土田は菊池を案内しただけで、こっちは来なかった。

まずなんといおうかと考えていると、向こうから口火を切つた。

「最近の先生は、いけません」

数年ぶりに会つて、第一声から否定だった。それをたいして驚かなかったのは、そうあるべきだと思つていたからかもしれない。

「駄目かな」

「いけません。読者に媚びています。最低です。もう引退すべきなのではないですか？ 書くべきものが尽きたのでしょうか」

今までになく、辛らつな言葉だった。しかし腹も立たなかった。それは自分でも考えすぎるほど考えてきたことだったからだろう。

「そうしよかな」

「はい、そうすべきです」

「でも、俺には責任がある。会社とか…」

「大丈夫です。私がなんとかします」

「君は会社を立ち上げて独立したんだってね。でもまだ小さいんだろう？ 無理はしないほうがいい」

「作家を守れない編集者なら、いりません」

「俺の小説を待っている読者もいる」

「情熱を失った作品を読ませるほうが失礼だとは思いませんか？」

「君は強くなったな。いや、強かったのか」

「先生は弱くなりました。それとも弱かったのですか？」

中西は少し考えた。今までの自分のことを改めて考えてみようと思った。

「多分、弱かったんだろう。…そうだ、弱かったんだ。今まで気づかなかった。そうか、俺は元々弱かったんだな」

中西の後ろに、この授賞式のスタッフが来ていた。そろそろスピーチを行うので準備して欲しいと言われた。

「頼ってほしかった」振り向いて壇上へ向かう中西の背中に菊池の声が追いかけてきた。「弱音を吐いてほしかった。助けてほしいと言ってほしかった。です」

壇上のスタンドマイクの前には、別の受賞者のスピーチが行われている。

その後ろの椅子に座り自分の順番がくるのを待ちながら、中西は考えていた。

自分は今までなにをしてきたのだろう。

長い間、自分は何かを成し遂げられるのだと思っていた。何かを成し遂げられると思って、今まで生き続けていた。走り続けていたと言ってもいいだろう。

物心がついてからは、文学の可能性を広げるといふ、それだけを目標にしてきた気がする。

ずっと全力で、一切とは言わないが手を抜かずに取り組んできたと思う。

だが結局は何事も成し遂げることは出来なかった。

研究は捨て、実作は行き詰まった。

前の人のスピーチが終わって、中西が紹介された。

「では次は中西雄介さんのスピーチです。中西さんは多年に渡り多彩な文学活動が続け、文学に対する多大なる貢献を果たしました。今回はその偉大なる成果を讃えての授賞です」

中西はのろろとマイクの前に進み出た。

進みながらも中西は考えていた。

自分は一体今までなにをしてきたのだろう。何も果たせてはいないではないか。何かを成し遂げられると思っていた自分は、結局何も成し遂げるこゝとなしにここにいる。自分はその人間ではなかったのだ。

何故だ。

何故自分にその力がないのだ。何故天は自分にそれを与えてはくれなかったのだ。

手は抜かなかったはずだ。真面目に、真摯に人生と向き合ってきたつもりだ。それとも、まだ足りなかったというのか。確かにその通りだ。

自分は文学の王道を行くつもりで、いつしか簡単な道へと流れてしまっていた。確かにそれは罪悪だ。しかしならばどうすればよかったというのだ。あのまま無意味な苦闘を続ければよかったのか。

マイクの前に立った中西を聴衆は拍手で迎えた。

それとも、望んだことが悪いというのか。何かを成し遂げようと

などと、大それた希望だというのか。

しかしならば何故生きるのだ。生きるには希望が必要なのではないのか。

なんなのだいたい。

拍手は次第に静まり、しかし一向に話し始めようとしない中西に聴衆はざわめきはじめた。

壇上で、中西は泣いていた。

ロイヤルロード（後書き）

新しいの書きました。

三万字超えましたか。もう少し少なくなりたいんだけどなあ。まあいいか。

十月ですか。まあいいんだが、もう少しさっさと書きたいんだけどなあ。

作中に登場する小説とか作家とかは当然フィクションですよ。王道って言葉を肯定的に使った小説は実在する。王道っていい言葉ですね。

ロイヤルロードだちょっと意味が違ってくるらしい。タイトルにしようと思ってたからどうしようかと思ったけど、まあいいか、ということでのこのタイトルです。

もうそろそろこの物語も終わりかなあ、と思いつつ、また次も書くかもしれません。とりあえずやっぱり完結にします。

あと、この小説全体のタイトルを変えるかもしれませんが。というか変えます。そのうち。特に意味のない仰々しいタイトル（いわゆる中二病ですね）で、まあいいかなあと思ってただけど、変える。

走

1

雰囲気の良い店内だった。静かに流れるBGMに、よく太陽の光を取り入れながらも明るすぎない照明。十ほどあるテーブル席は半分ほど埋まっていたが、店内の雰囲気を反映してか高声で話している客はいない。

「いらっしやいませ」笑顔がかわいらしい、しかし決して礼節を忘れないことを感じさせるウェイトレスがドアを開けて入ってきた大学生ほどの男性二人を出迎えた。二人であることを確認すると空いている席へ案内した。

案内された二人はそれぞれバッグを置きコートを脱ぐとやれやれと息をつきながら座った。片方が「何で久しぶりの再会が喫茶店だよ」と呟いた。

その文句ともつかない言葉に、もう片方が「仕方ないだろ。飯を食うには中途半端な時間だし、そっちがあまり時間ないって言うんだから」と反駁する。

「別に会わずに帰ってもよかったんだけどな」さっきと同じウェイトレスが注文を取りに来た。メニューをちらっと開いて確認する。「俺コーヒーでいいや」

「コーヒー二つ」相棒の言葉を受けてもう片方がウェイトレスに注文する。ウェイトレスが引き下がるのを確認してから目の前の男に向き直った。「高校三年間と、今三回生だから、六年ぶりか」

「もうそんなになるか」

「数えようによっては四年ぶりだけだな」

「夏予選か」

「打てなかったなあ」

「負けたのはうちだけだな」

「話しかけようとしたら避けやがって」

「何話していいかわからなかったんだよ」男は話題を変えるように目を伏せた。「怪我だって？ どこ？」

「右足。腱だからちよつと長いな。来年の秋には間に合うだろうけど、……もう終わりだろうな」

「間に合わせろよ」

「元々レギュラーじゃねーんだよ。それでブランクもできて何を間に合わせるっていうんだよ」

言葉を受けた男がため息をつく。少し沈黙の時間ができた。

BGMが替わって、今でも人気のあるロックバンドの昔はやったバラードソングが流れ始めた。

「懐かしいな」「懐かしい」どちらともなく言った。

「こうしてお前と向かい合っていると、なんか昔に戻った気になるな」と、先に愚痴をこぼしたほうが言った。

「ああ、お前もだいぶ変わったけど、でもよく見るとぜんぜん変わってないようにも思える」

「どっちだよ」と、少し笑う。「あの頃はなんか悩みが多かったな。今から思えば大したことないだろうってことなんだけど、悩んで、沈んで、周囲にあたって」

「なんだよ、お前、今はもう悩みなんてないって言い草だな」

「そりゃ俺だってもう大人に――」

コーヒーが運ばれてきたので、ちよつと会話を止める。

「いや、大人になったつもりでも、やっぱりまだ悩みは多いなあ」

「結局、上手くいかないことだらけだよなあ」

「だらけだ」

「今日帰るんだろ？」

「ああ。特急の予約もう取ってある」

「なんで県外に出たんだよ」

「都会に行ってみたかったんだよ」

「今度はいつ帰ってくるんだ？」

「さーな……」コーヒーを口に運ぶ。「でも次があるなら」

「ん？」

「次はみんな集めようぜ」

2

目の前がかすむような感覚に一瞬とらわれ、規則正しい呼吸のリズムが一瞬崩れた。隆起しすぎた肺は寸時の間隔を置いてなだらかに萎んでいく。大丈夫だ。意識はまだはっきりしている。

フータ（五十嵐風太）は地方都市の郊外の道路を走っていた。往復合わせて五車線の広い道路上を車が足早に流れていく。歩道の上にもさまざまな人間が行きかっていた。談笑しながら自転車で下校中の高校生、買い物帰りの主婦、近所に散歩に来た親子連れ、またはフータと同じようにランニング目的の男女。

フータは小刻みな呼吸を繰り返した。汗が頬の上を伝っていくのを感じる。玉のようなという比喻が比喻に思えないほどの汗だ。十月というのにやけに蒸し暑い日だった。気温の割りに、水分が奪われる。

流れる汗はむしろ心地よかった。自分が生きているのだと自覚する。痛めつけなければ、自分が生きていると感じることさえできない。何故人は生きているのだろう。生きなければならぬのだろう。一呼吸ごとに、排気ガスの混じった空気を体内に取り込む。それでも自分の部屋の空気よりはましだった。部屋の中でじっとしていると細胞が壊死していくような感覚に襲われる。とすれば流れる汗はむしろ再生だった。

走り去るフータの後ろを影が長く尾を引いている。夕日だ。歩道橋の上でフータは夕日に目を奪われた。燃える火の橙は目に痛くなかった。湿気の不快さが脳裏から消えた。町が山が朱に染まっている。

俺はなにをしているんだろう。

頭を掠めた問いを、フータは振り払った。そんなことは考えたく

ない。考えても答えの出ない問いだった。

また走り出そう、と思ったとき、ふと見知った顔を見つけた。

「シューゴ（灰島修吾）じゃないか。よう、なにやってんだ」

フータと同じ中学生くらいの男子が、歩道橋の下で立ち止まった。この暑いのに下は長ズボンのジャージで、Tシャツは汗でびしょ濡れだった。

「フータ君か。見ての通り、走ってる」

「お前もか。俺もランニングだ」膝に手を突いて息をしているシューゴを見ると、フータはなんとなくおかしくなってきた。「しかし、似合わねえなあ」

シューゴはフータと違って文化系といった人間で、むしろ運動音痴と言ってよく体育の時間などでもいつもまごついているような様子が見受けられた。そのシューゴが学校外でトレーニングしているのは、どうにもイメージとちぐはぐだ。

「どうしたんだよ。部活でもはじめんのか？」

「いや、体力がつけばそれでいい。だいぶ走れるようになってきた」といいながら、シューゴの息はまだ整っていない。

「ただ、自己ベストを出したいと思ってるんだ」

「何の？」

「持久走」

「ああ、毎年冬にあるあれか」

「うん。走るのはなかなか面白い」

「そっか、でも偉いな。誰も見てないところで努力するとか、えれーよ」

「フータ君もそうじゃん。部活やってんだっけ？」

「ああ、俺は……」フータは少し口ごもった。

「いや、なんとなくだよ。意味ねー」

「ああ、そうだね。その通りだ。意味ない」

「なにがだよ」

「何事も」

シューゴはどうも妙な人間だった。

シューゴはおそらく変な人間だった。流行っている番組も見ないし音楽も聴かない。そもそも人と話そうという意思があまり見えない人間だった。いつもクラスの隅っこでむっとり小説を読んでいる。クラス内でいつしか形成されてしまったいずれの仲良しグループにも所属していないようだった。

しかしそんなシューゴが孤立していないほど、二年三組は雰囲気の良いクラスだった。誰もがお互いに声を掛け合い、談笑しあった。シューゴはクラス内のちよつと変な人間として位置づけられ、溶け込まれていた。シューゴもその位置を甘んじて受け入れていた。

例えば、クラス対抗の球技大会で、円陣を組んだとき「じゃ、今日はシューゴに掛け声をかけてもらいましょう」などと誰かが言う。シューゴが「三組勝つぞー」と言えば周囲がいつせいに「応!」と気合を入れるのだった。

シューゴが数学と日本史では誰にも負けなかったことと、へりくだらず孤高を保っているように見えたこともクラスの特殊な位置を占めることができた理由だったかもしれない。

クラス委員のデカ（伊川啓司）は篤実な性格で人当たりもよく、雰囲気の良い三組の中心人物の一人だった。デカもシューゴのことをよく気にかけて、かつある特殊な人物として敬っていた。

ある昼休み、席で読書していたシューゴの前の席にデカが座った。

「シューゴ、ナナ（立花奈々瀬）のことは知ってる?」

「そりゃ、まあ」クラスメイトの名前くらいは、いくらシューゴでも知っている。

「シューゴとはどういう関係?」

「クラスメイト」一体他にどういう関係があるんだ、とシューゴは思った。

「それだけ?」

「それだけ」

そっか、とデカは息を吸い、「俺は彼女が好きなんだ」と言った。
「へえ、そりゃ、おめでとう。……めでたいの？」

「別にめでたかねえよ」

「ふうん。それで？」

「それが僕とどう関係があるの？」と言うほどシューゴは角が立っていない。

が、デカの用件がその報告だけでもないと思った。

「うん。ナナはシューゴと付き合ってるって」

「へえ」

「付き合ってるの？」

「初耳だ。こりゃ、ちょっとしたニュースだな。驚いた」と答えた。
「誰が言ったの？」

「そりゃ、ナナだよ。そうか、やっぱり付き合っていないか」デカは
安堵と困惑が入り混じったため息を吐いた。

「話したこともあるかないか」

「そうだよな。これはどういうことだろう」

「それは、僕に聞いている？」

「聞いてない。けど、何か妙案があるか？」

「そうだな、僕が三歩歩いたら全ての記憶を失ってしまうほどのう
かつな人間だったか、ナナさんが実はパラレルワールドから来た人
間だったかのいずれかだろう」

「どっちなら俺に有利なんだろう」

「どっちでも大差ない」とシューゴは言い、「生きてりゃあとはあ
んまり大差ない」と言い直すように付け足した。

ナナは数学の授業中あくびをかみ殺した。授業と言っても、問題
集の答えをただひたすら解説していくだけの授業だ。解説するソト
ケン（外村健人）先生の話も真面目なだけで面白くない。

ほとんど無意識のうちに、席が三つ離れているデカのほうに目をやってしまう。真面目なデカはきちんと板書をノートに取っているようだ。ちゃんと授業を聞いているから成績もいいのだろうと感心する。

ふと、デカの顔が上がって、目が合った。ナナは狼狽してすぐ視線を外す。

自分は何をやっているんだろう、と心臓が高鳴った。恥ずかしくて死にたくなった。

デカから告白されたのは、もう一週間ほど前のことだ。それからというもの、一切口をきいていない。それもそのはずだ。デカの告白を断ったのは自分なのだ。

それでよかったのか、今でもかなり思い悩む。間違っていたと思うこともあれば、どうせ仕方なかったことだとも思うこともある。どうして人は時によって思うことが変わるのだろうか。同じ人間なのにどうして思いがふらふらとして定まらないのだろうか。それとも同じ人間だというのが幻想なのか。

チャイムが鳴って、昼休みだ。お昼はいつもヤコ（笹倉都）とロク（萱嶋六津子）の三人で食べる。それが仲良しグループだ。ただ、三組は仲のいいクラスなので、別のグループとなんとなく一緒に食べることもある。

今日はどうなるだろうか、などと考えていたら、いつも真っ先に席に駆け寄ってくるヤコよりも早く男子のシューゴがやってきた。仲のいいといっても男子と席を囲むことはほとんどないし、第一シューゴはあまり人付き合いのいい生徒じゃない。

一体何の用だろうと首を傾げるよりも早くロクが声を投げかけてきた。ロクはいつもはきはきしている性格で、よくクラス中に聞こえるような大声を挙げることがある。

「おう、シューゴどうした？ ナナに告白か？」

ロクは何気なく使ったのだろうが、告白という単語は今のナナにはあまり聞きたくない言葉だった。

「告白ならもつと人気がないところですよ」とシューゴは平然とロクに返す。

「じゃ、どうしたの？」と割って入ったのはヤコだった。ヤコはロクと違っておっとりしているので大声を挙げることはない。ナナの隣で首をかしげていた。

「用」とだけシューゴは言った。会話というより発声と言ったほうが近い。

「ナナに？」

「うん」

「何の？」

「用」

「だから何の？」

シューゴは少し考えるように首を傾げた。「あんまりおおっぴらに聞かれていいようなことでもないと思う。だからいつでもいいから、ちよつと時間をくれればありがたい」

「二人きりで、かよ」これはロクが言った。ロクももうナナの隣まで来ていたので、大きな声ではない。

「言い方はよくないけど、まあそうだ」シューゴは周りを見渡す。

「ロクさんのせいでなんか注目が集まったな」

「私のせいじゃねーよ」とロクは否定したが、それは難しい問題だとナナは思う。「やっぱり告白じゃねーか」

「告白ならもつと人気がないところですよ」とシューゴはさっきと同じことを言った。「むしろ僕は巻き込まれたんだけどな」

その言葉で、ナナはシューゴがなにを言いたいのか大体わかった。ヤコとロクにわからないように言ってくれたのがありがたかった。

ナナが「今から、でいい？」と言うとシューゴはうなずいた。「ごめんヤコ、ロク。先にお昼食べちゃってて」

時間をかけたくないの教室から出てすぐのところで話すことに

した。室内から誰も様子を伺っている気配のないのは、多分ロクさん辺りが上手くみんなを制してくれているのだろうとシューゴはあたりをつけた。

「手短に行こう。このあと昼休み中に本を借りに行きたいんだ」シューゴは壁にもたれかかった。ナナもシューゴに倣う。

時折他クラスの生徒が通り過ぎるが、廊下で話す生徒など腐るほどいるので誰も気にもかけない。

「デカのことだね」とナナのほうから切り出した。ナナはもう用件を察しているだろうと思っていたので、シューゴはあまり驚かなかった。

「うん。どういうこと？」

「デカはなんて言ってた？」

「彼はナナさんのことが好きなんだってさ」

「それから？」

「ナナさんのことが好きで好きで夜も寝らんない」

「そういうのはいいや」

「ああ、手短に行くんだった」シューゴは天を仰いだ。自分はあまり真面目な人間じゃない。人付き合いが苦手なだけだ。「僕がナナさんと付き合ってるんだってさ」

「ああ、やっぱりシューゴに言ったか」ナナはあーあと言うような表情をした。「ごめんね。迷惑かけた」

「ま、確かに迷惑だな」とシューゴは口だけで言った。実際、この程度の迷惑は迷惑のうちに入らない。「ただ、巻き込まれた以上いきさつくらいは知っておきたい」

「デカに告白されたんだ」

「うん。手短に行くんだから、『なんて言われた？』とか『どんな表情だった？』とかは訊かない」

「そりゃ、私だって言わない」シューゴの言葉に、ナナは苦笑する。

「で、私は断ったわけ」

「『ごめんなさい。私はあなたが嫌いです』」

「とは言わなかった。言えなかったんだなあ」

「代わりに吐いた嘘が、僕と付き合っている、か」シューゴは鼻で笑う。「すぐばれる嘘だ」

「そうかな。すぐばれたかな」

「そりゃそうさ。ナナさんと僕じゃあまりに吊り合わない」

「なんかそれ、腹立つな」

「褒めてるんだよ。とにかく、突拍子もなさ過ぎる。嘘を信じさせるんなら、もっと他の人選があっただろう」

「だからこそ真実味がある、とも言えるんじゃない？」

「だからデカは僕に真偽を確かめに来た。僕は話した。とすればやつぱり賢明な人選じゃなかった」

「話したか。うーんそうだね。話すよね。デカはなんて言ってた？」「なんとも。しきりに首を捻ってるんで、仕方ないんで僕が訊きに来た」

「優しいんだねシューゴは」

「面白半分だよ」

「面白い？」

「半分」後の半分は迷惑だ。

ナナはううんと自分の考えを確かめるようになった。

「そうだね。別に嘘がばれてもいいと思ってた」

「ばらしてよかったんならよかった。安心した」

ただ、ナナの真意がわからなかった。何を思ってナナはわざわざ嘘を吐いたのだろう。デカに何かを報告したいと思っていたが、しかしそこまで訊くべきなのだろうか。

シューゴが迷っていると、ナナが口を開いた。

「デカは本当に私のこと好きなのかな」

「それは僕は知らない。ただ、デカは口先だけで物を言う人間ではないと思う」

「好きってなんなのかな」

「そんなことを僕に言われても困る」

「だよねえ」とナナは笑う。「私、デカのこと好きなんだ」

ふうん、とシューゴはうなずいた。そんなことも僕に言われても困る、とは言わなかった。

「でも、好きってなんなんだろう。なんか私、ほんとにデカのこと好きなのか自信ないんだ」

「これ、悩み相談になってない？」

デカにしろナナにしろ、ちょっと自分のことを信頼しすぎだ、と思った。

下校の時間、誰かに呼び止められたので、多分ブンスケ（加来美美輔）だと思ったので無視していると、いきなり蹴りいれられた。ブンスケはいきなり蹴り入れてくるような野蛮人ではない。

「ってーな。誰だよ」フータは腰を抑えながらうめき声を上げた。

「人のこと思きし無視してんじゃねーよ」振り返ればクラスメイトのロクだった。ロクは女のくせに男みたいな言葉遣いをする。

「無視したからって蹴るなよ」

「あたしじゃねーよ。今のはヤコの蹴りだ」

「えっ、マジで？」

見ればロクの隣にはやはり同じクラスメイトのヤコがいる。ヤコは小学校から知っているが、やはりいきなり蹴ってくるような野蛮人ではない。

「あの、ロクちゃん、私蹴ってないよ？」

「ヤコの代わりにあたしが蹴ってやったんだ」ロクはなぜか得意げな表情だった。

「で、何の用だよ」

「用があるのはヤコだよ」

「ふうん。何の用だよ、ヤコ」

「あー、そのー」あまり男子としゃべるのに慣れていないヤコは口ごもってしまったようだった。

「帰るとこだろ。一緒に帰ろうぜ」と、ロクが助け舟を出した。

「一緒に？」フータは首をかしげた。別にヤコやロクと仲が悪いわけではないが、かといって一緒に帰るほどこいいわけでもない。「別にいいけど」

「よっしゃ、じゃ行こうぜ」とロクに促されるままに歩き始めた。

一緒に帰るといっても、あまり社交的なわけでもないフータはなにを話そうかと思い悩んでいると、ロクが少しわざとらしいくらいに「そうそう」と声を挙げた。

「今日のシューゴにはびっくりしたよな」

「シューゴがどうしたんだよ。ああ、昼休みナナに話しかけたこと？」

「あたしは告白だと思うんだけどさ。ヤコはどう思う？」

「どうもこうも、シューゴ君、告白じゃないって否定してたじゃない」

「シューゴが告白？」フータは吹き出した。「似合わねー」

「確かに。シューゴは機械人みたいなどこあるからな」

「機械人って？」

「感情がない」

「確かに表情が少ないってことはあるな」

「でも感情がないってことはないでしょ。人間なんだし」とヤコは冗談でも人を悪く言うのは好きではないらしい。

「でももうちょっと笑ったり怒ったりすりゃいいと思うけどな、あたしは」とロクはぼそつと言ったかと思うと、急に「あっ」と大声を挙げた。

「あたし忘れもんしたから戻るな。じゃ、二人で帰ってくれ」

「なに忘れたの？ 私と一緒に戻るよ」とヤコが申し出たのをロクは首を振った。

「いいからいいから。ヤコとフータは先に帰ってくれ。じゃな」と言って一目散に戻っていった。

「なんだあいつ」

「さあ」

残された二人で首をかしげていたが、とにかく帰ることにした。気まずい沈黙が続いた。さっきはロクがいたからなんとか間が持っていたものの、ヤコと二人きりではなにを話せばいいのかわからない。

「結局なんだったんだろうな」

「なにが？」

「シューゴのナナに対する用事」

結局話題として選んだのはさっきの続きだった。

「あー、うーん、あ、告白とか？」

「結局告白なんだ？」

歩幅が違うせいか、ヤコはフータに遅れがちになる。小走りにさせるのも悪いので、フータは意識してヤコに合わせるようにした。

「何にも思いつかないもんだねえ」

「でも、ナナはもてそうだもんなあ」

「そうなの？ そうなんだとは思ってたけど、やっぱりそうなんだ。

……フータ君も好きだったり？」

「いや、俺は違うけど、クラスで言えばタク（藤堂卓也）とか、ドラ（木野隆治）とかナナが好きなんだってさ。あと、多分デカもナナのこと好きだと思う」

「ナナは人気だねえ」

「ヤコはどうなん？ 告白されたりとかねーの？」

「全然ないよ。したこともされたこともない」とヤコは首を振ったあと、ためらいがちに「フータ君は？」と訊いた。

「俺もない。むかつくことにデカはあるんだよな。断ったらしいけど」

「むかつくんだ」

「そりゃむかつくさ。断ったのも、ナナのことが好きだからなんだと思う。確かめたわけじゃねーけどな」

「フータ君はデカ君と仲いいんだね」

「あー」とフータはどっつかずの返答をした。

「……ねえフータ君」とヤコは口調を改めた。本題に入るみたいだった。

「どうして部活辞めたの？」

諦めるべきなんだろうと思う。告白するというのは決着をつけるということであり、断られるということは望みがないということである。

多分それでも前に進んでいるんだろう。前に進むことがそんなに偉いのかわからないが、生きるといえるのはとりもなおさず前に進むということである。だとしたら、執着は後退だろうか。

「で、結局どういうことになるんだ？」とデカは目の前に座っているシューゴに言った。クラスには少しずつ人が集まってきているが、始業の時間まではまだ間がある。

「そんなことは知らない」シューゴは少しうんざりしたというような様子だった。それもそのはずだ。本当ならシューゴには関わりのないことだ。

「ナナは一体何を考えているんだろう」

シューゴの話に拠れば、ナナは自分のことが好きらしい。ならば何故デカの告白をナナは断ったのか。

「そんなことはわからない」いい加減シューゴは憮然としていた。デカも申し訳ないと思ったが、しかしこんな雲をつかむような話、他に相談できる相手もない。

「シューゴ頭いいんだから、ちょっと考えてみてくれよ」

「数学と人間とは違う。数学には必ず解がある。人間にはない。ある場合もあるかもしれないがない場合のほうが多い。そんなもん相手にしてどうする」

「たくさん小説読んでるじゃないか」

「小説はあくまで小説だよ。少なくともイキモノじゃない。イキモノ

ノってのはとらえどころがあるようでないから厄介だ。僕の専門じゃない」

「俺はこれからどうすればいいんだろう」

「それこそ僕の知ったこっちゃない。大体人間なんてできることなんてしてるんだから、したいようにするしかない。デカは一体どうしたいの？」

「俺のしたいこと？」 そんなことは簡単だ。「ナナと恋人になりたい」

「恋人になってどうする」

「それから？」 デカはしばらく考えた。「……ああ、どうもしないな。出来ねー」

「そうなの？ 恋人同士ってのはおしゃべりしたりデートしたりエッチなことしたりするもんじゃないの？」

「そりゃおしゃべりしたりデートしたりエッチなことしたりしたいさ。でも俺にはその暇がない。部活があるからな」

「部活だって休みくらいはあるだろ」

「ないんだよ。放課後も休日も全部部活だ。部活のない日は自主練。学生生活部活に賭けてるからな」

「そりゃすごいな」 シューゴは心底感服したと思った。「でも、ならなんで告白なんかしたんだよ」

「まあな。俺だってせめて三年になって引退するまでは、と思ってたよ。だけどなあ」

デカが照れたように黙ったので、シューゴは「なんだよ」と促した。

「俺の席から、ふとした拍子にナナの横顔が目に入るんだ。真っ向から見るわけじゃないけど、視界の端に写るんだな。横顔だけど、すごく綺麗なんだ。もう、彼女の周囲だけ光っているような感じなんだ。そんでずっとナナの顔を見ていると、たまにナナもこっち向いて、目が合うんだ。そんなことが毎日毎日続くんだ。一体どう我慢しろっていうんだ」

「……もはや惚気にしか聞こえん」シューゴは話にならんと横を向いてしまった。

「そーじゃないよ。そーじゃないけど、……ああ、シューゴ、人を好きになったことないか。なんかもう、理屈じゃないんだよ。理屈じゃなくて、だから、どうしていいかわかんねー。自分がどうしたいのかも、どうしたらいいのかもわかんねーんだ」

何故走っているのかと、時々、人に訊かれたらなんと答えようかと考えることがある。暇つぶし、健康のため、走ることは気持ちいいから。どれも正しいようで、どれも間違っていると思う。理由はない、という答えもおそらく偽。理由はあるが、おそらく言葉では捉えられない。

何故生きているのかという問いに、上手く答えることができないのと同じことだと思う。言葉で答えられる答えとはせいぜい、死ぬのが怖いから、くらいだ。言葉で答えられないのなら、あとでできることは生きてみせることくらいだ。生きていれば、少なくとも自身にくらいは生きている理由がわかってくるかもしれない。

とすれば走るのも同じことだ。走る理由がわかりたければ、わかるまで走っているしかない。

走るごとに風景は違って見えた。走る時が違うのだからそれはあまりにも当然のことでありながら、シューゴには不思議に思えた。普遍なる物は現世には存在しない。存在するとすればそれは思惟の世界の中だけなのだろう。

うつつとは不思議なものだ。何故か現の物は移ろい変わってゆく。何故か同じ場所にとどまることができない。目には見えないわけのわからない力によって時は流され物は変化を繰り返す。瞬間の次の瞬間にはもう同じものはどこにも存在しない。

シューゴは家の近くの道路を走っていた。休日になればたまに走る。決まったコースはない。ただ気の赴くままに走る。決められた

コースより少しだけ面白い。限界が来たら止まる。もういいやと思
ったらそこより少し先まで我慢する。限界を超えることはしない。
競争相手は誰もいない。それでいいと思う。人間なんて所詮、先天
的に個別に備わった限界を超えることなどできないのだ。

走っているとクラスメイトのフータに会った。走っているときに
フータに会ったのはこれで二度目だった。

「よくやるなあ」とフータが言った。シューゴはかなり息が切れて
いる。おそらく運動音痴の自分がトレーニングしていることにフー
タは感心しているのだろう。

フータも汗にまみれているが、まだずいぶん余裕がありそうだ。
基礎体力の差があるのだろう。

「僕は真面目に走ってるわけじゃない」シューゴは膝に手を置いて
肩で息をしていた。「ただなんとなく気ままに走ってるだけだ」

「それでいいんじゃないの？ 俺だって走りたいから走ってるだけ
だぜ」

「フータ君は部活やってるんだろ？ だったら鍛錬は不可欠だ。た
とえ嫌なときでも練習しなくちゃいけないんじゃないの？」

「まー、そうなんだろうな」フータは照れたように笑った。

「でも俺、部活辞めたからな」

「そうなんだ。どうして？」

「真面目に練習するのが嫌になったんだ」

「なるほど」理解できない理由ではない。

「なら何故今走っているの」という問いを、しかしシューゴは発
しなかった。部活動と私的な活動の差は強要と自発にあるのではな
い。統制と気ままにある。部活動では自発的に、強要された過酷な
トレーニングを行うことはできるが、勝手気ままな活動を行うこと
はできない。例えば、シューゴのランニングがもし部活動なら、そ
の日の気分によってコースを変えるということは不可能だろう。

「でも部活をしてないんだったら、鍛錬の成果を発揮する場所がな
くて困るだろう。特にフータ君みたいに運動のできる人間だったら」

シューゴはフータのことを格別に知っているというわけではなかったが、しかしクラスメイトとしてフータが運動のできる部類に入ることくらいは知っている。

しかし、フータはううんとうなった。「でも、俺はレギュラーじゃなかったからな」

「ふうん。フータ君でもだめなのか」

シューゴにとっては運動のできるものはみな同じに見えるが、やはりどの世界も奥行きは深いらしい。フータが闊歩できない世界に、もし自分が入ったらどうなるだろうとシューゴはため息を吐く。

「レギュラーになりたかったけどなあ」とフータの声は落ちた。「でも辞めちゃった」

レギュラーになれないまま辞めてしまったフータを非難する気は、シューゴにはなかった。才能の差は絶対だ。人間には生まれ持った超えることのできない影というものが確実に存在する。それなら勝負すべきは自分自身ではないだろうか。

しかし、ならば何故人は他人と競争するのだろうか。人に勝ちたいと思うのだろうか。

他人と比較することで自らの価値を見出すということだろうか。人が社会の中で存在している以上、そうした価値観を否定することはできない。人は他人との関係性の中でこそ自らの価値を見出すことができるだろう。

それすらも人の弱さだといってしまうことはできる。しかしそうした弱さを持ったものこそ人間なのだろうと思う。

自分は何かで他人に抜きん出ることができるだろうか。シューゴにはわからなかった。

「じゃ、俺もう行くわ。がんばれよ」と言ってフータは行ってしまった。

シューゴは、自分のほうからもフータにがんばれと声をかけるのを忘れていた。

ナナのことは親友だと思う。誰よりも長い時間一緒にいて、多くの嬉しいことや悲しいことを一緒に経験してきた。どんなことがあろうとナナはヤコを裏切ったりしないと思う。それはヤコも同じことだ。

しかしだからといって全部言ってしまうのは違う。親友とはなんだろう。信頼して、信用して、それでも踏み越えられない一線。微妙な距離感。最も近い他人。

しかしそんなことを言ってしまうえば全ての人間がそうではないか。お父さん、お母さん、友達、先生、好きな人。どの人にだって、ヤコが経験してきたすべてのことを洗いざらい話していくわけにはいかない。そもそも、全てのことを話すことなんて、したくたってどうすればいいのか。

言葉なんて万能じゃない。伝達したくたってきれいなものはある。

ヤコの感情だってそうだ。私は今何を考えていて、何をしたいと思ってるんだろう。何故そんなことすらわからないのか。自分にすら、伝わらないことはある。言葉って万能じゃない。

ナナが何か悩んでいるのも知っている。わざわざ訊いたりしないのは、ヤコがナナに相談しなかったのも同じことだからだ。人に何かを相談するためには、人に言うことができるくらい悩みが成熟していなければならぬ。

ナナは今、目の前にいる。昼休みだ。いつものようにロクがいなのは、部活の集まりがあるとか言って行ってしまったからだ。ロクはああ見えて写真部に所属している。

「私さ」とヤコが切り出した。改まるのも変だが、他に言い出す方法を知らなかった。

「フータ君とは小学校から一緒なんだよね」

「うん」とナナが少し怪訝そうにうなずいた。「いつか聞いたことがあるね。二回くらい同じクラスになったことがあるんだっけ？」

「小一と、三年と、六年のとき」と、ヤコはナナの記憶違いを訂正する。「中学に入ってからのは今年が初めてだから、計四回かな」

「小中一緒の子も結構いるけど、四回なら多いほうかな」

「だからってわけじゃないけど、フータ君のことはなんとなく気にしてるんだよね。好きとかってわけじゃないけど」

この辺の微妙な感情のことは、余人なら早合点されてしまうかもしれない。でもナナとロクならそんなことはないと思えることができた。親友の効用だ。

「うん」ヤコの期待通り、ナナはまだ本題を断定しないよという顔で先を促して見せた。

「フータ君ずっと野球をやってきたんだ。小学校のときはソフトボール部だったけど、すごく上手かったし、高校行ったら甲子園行くんだってずっと言ってた」

「うん」

「なのにフータ君、野球部辞めちゃったんだ」

今まで無表情にうなずいていたナナが、びっくりしたという表情をした。「そうなんだ。知らなかった」

「私も。デカ君に訊くまで知らなかった。新チームになって少ししたら辞めちゃったんだって」

「どうして？」

「わからない。デカ君も知らなかったし、フータ君本人に訊ねてみても、『もー嫌になったんだ』って言われただけで」

「もう嫌になったんじゃない？」

「それならそれで、嫌になった理由があるはずでしょ。でも……」

「それは教えてくれなかった」

「訊いたら、『まーいーじゃん』って言われた。それ以上は訊くなつてオーラが出てて、それ以上は訊けなかった」

「そっか」ナナはちよつと真面目な顔をして考えていた。「で、ヤコはフータを野球部に戻したい、と」

「え?。」

「だってそういうことでしょ。一途に夢を追っかけていてほしいんだ。その気持ちちょっとわかるな」

「そうじゃないよ。ただ……」ヤコは自分の考えの整理をつけるように言葉を切った。「変な話だけど、納得してほしいんだ、私」

「納得してほしい？　納得したい、じゃなくて？」

「そりゃ私かもやもやしてるってのもあるけど……。……うん、私、フータ君にちゃんと納得してほしいんだ。だってそうでしょ。ちゃんと理由が言えないってことは、自分でも何か葛藤があるってことでしょ」

「そうとは言い切れないと思うけど……。その可能性もあるか」ナナは考えるように首を捻った。「でも、フータが納得してないとして、ヤコに何ができる？　それは結局フータの問題でしかないんだから、フータ自身がどうにかするしかないんじゃない？」

「うん。そうなんだよね」そのことはヤコもわかっていたが、何も思いつくことがなかったのだった。「私には何もできないかあ……」

「外野はただ見守るだけ、だよ。……あ」ナナは何かを思いついたように声を挙げた。「じゃあヤコがチア部に入るとか。そしたら実際応援できるし」

「私がチア部に入るの？　それは無理だよ。私運動神経ないし」

「ヤコのチア姿に釣られてフータも野球部に戻ってくるかもよ」

「ななななにをいってるのナナ。そそそそそそんなことあるわけないでしょ」

「いやそりゃ冗談——、冗談にならなかったかこりゃ」ナナはちよつと笑った。

「でも真面目な話、フータに何かしてもらいたいんだったら、ヤコも動かなきゃいけないんじゃないかな。そもそも私たちにできることなんてないんだし」

「うーん」

「ま、しっかり考えて決めなさい。私に言えることはこれだけだよ」
「うーん、でも」

藪をつついたら蛇が出た。それからしばらくの間、ヤコの頭の中には「でも」と「しかし」が渦巻くこととなった。

これで最後だということで、ブンスケ他五人の野球部がフータを説得に来たのは冬の初めごろだった。こんなにもフータを引き戻したい人間がいるというよりも、ブンスケ以外は無理やり連れてこられたのだろう。

ブンスケはフータと仲がよかったので、何度も説得に来た。それでもフータは首を縦に振らなかった。

辞めることは誰にも相談しなかった。誰にも理由を説明しなかったからだ。ブンスケはいいやつだったが、むしろだからこそ弱味を見せなくなかった。結局ブンスケを裏切るような形になってしまったのは申し訳なかった。それでも何も言いたくなかったし、戻るつもりもなかった。

辞めたことは後悔していた。毎日毎日本当にこれでよかったのかと自問した。それでもそれは想定内のことだった。辞めるときに考えたのは、どちらにせよ後悔するのならどちらがより後悔せずに済むかということだった。辞めた今よりも、ずるずると部に残っていたほうが後悔の念は強かっただろう。

だから誰になんと言われようと部に戻るつもりはなかった。ヤコがチア部に入っただけのは想定外だったが、自室の隅のほうで咽び泣くことでかろうじて思い留まった。あれは本当になんか卑怯だと思う。だから最後といわれた今回も決してうなずかなかった。ただはぐらかすだけで本当の理由も説明しなかった。

「別にお前が言いたくないならいいよ」とブンスケはさびしそうに言った。こんないいやつに会えることができたのは本当によかったし、その友人に本当のことを言えない自分の小ささが嫌になった。「じゃーな。また部活とは関係ないところで遊ぼうや」そう言ってブンスケは去っていった。まだ友人を続けようといってくれたことが

ありがたかった。このままブンスケと友人を続けることができるなら、いつか理由を説明することが出来る日が来るだろうかと思った。自己嫌悪にとらわれながら机に肘をついてぼけっとしてしていると、

「ブンスケはよくやるよなあ」と後ろで誰かが言った。
デカだった。

「なー。マジであいついいやつだ」

「お前が辞めてしばらくの間、あいつ誰ともキャッチボールしなかったからな。俺の相棒はフータだからって」

「そーか」自分は最低の人間だと思った。

「別に俺はお前が辞めようが知ったこっちゃないけどな」デカはフータの隣の席の椅子を乱暴に引き、乱暴に座った。

「親友に何も言わずにいきなり辞めるようなやつ、親友なんかじゃねー」

「誰が誰の親友だったんだよ」

「そーだな。小学生のころ一緒に甲子園行くんだったって誓い合った仲は別に親友って呼ばねーもんな」

「そーだよ。デカなんて別に親友じゃねー」

「お前がいないせいで俺がチームのエース任されちゃってせいせいしてるよ」

「エースで四番かよ。むかつくな」

「そーだよ。お前がいないせいでな。これで彼女でもできれば万々歳なんだけどな」

「てめー、甲子園で優勝するまで野球一筋に生きるって約束はどうなったんだよ」

「約束した相手が野球辞めちゃったんだから、反故だよ反故」

「ちえ、甲子園を甘く見てやがる。お前以上の選手なんて県内でもゴマンといえるんだからな。練習しろ練習」

「だったら戻ってこいよエース」

エースという言葉にフータは机を叩いた。

「俺はエースじゃねー」

「なりたかったら練習しろよ。毎日家でゴロゴロしてたってエースの座は転がり込んでこねーぞ」

「エースってのはな、チームで一番上手いやつがなるもんなんだよ。チームのやメンバーが、こいつなら任せられるってやつじゃないとマウンドを踏んじゃいけねーんだよ。そいつは俺じゃなかった。俺はなれなかった」

「だったら死ぬ気で練習しろよバーカ」

「お前が死ぬ気で練習しろよバーカ」

鏡の中の自分が、自分ではないと思うことがある。どうにもよそよそしい他人にしか思えない。あれ、あなたそんな顔してましたっけと声の一つもかけてやりたくなる。さすがにむなしすぎるのでやらないけど。

それはそうだ。あれは鏡であって自分ではない。鏡に映った自分はただの像に過ぎない。だとしたら、結局自分の本当の姿を自分の目で見えることはできないのだろうか。

ナナは自分の家の洗面台の鏡と向かい合っていた。鏡の中の自分はこつちを正面から見据えている。

ねえ鏡の中の私、あなたの本当の気持ちを教えて？ と心の中で問う。

答えはない。当たり前だ。

どうして自分のことすらはつきりとわからないんだろう。どうして人の好意を受け入れなかったことでこんなにも悲しい気持ちになるのだろう。考えに考えて自らだした答えを、自ら素直に受け入れることができないんだろう。

冬のある日、デカが日曜日にある練習試合の観戦に来ないかと誘ってきた。改めて告白の返事が聞きたいということなのだろうと思った。

ナナは断った。

「そっか。なんかごめん。未練がましくて」とデカは謝った。

謝る必要なんてないとナナは思った。むしろ謝らなくてはならないのはこっちのほうだ。でも、何故謝る？ そんな理由はない。

夏の初め、告白を断ってからナナはデカのことを目で追うようになった。いや、正確には目で追うのを止めることができなかったというべきだろう。ずっと前からデカのことを意識していたのだ。振ってからもずっとデカのことが好きだった。時折目が合うと、心臓の辺りが苦しくなった。

だからやっぱり、自分が悪いんだと思う。素直に自分の心に従うことができない自分。素直にデカを信じることができない自分。憎たらしくデカの心を見透かしてしまう自分。

「デカ、野球がんばってね。試合見には行かないけど、私心の中で応援してる」

「うん。サンキュな」

それで終わればいいものを、ナナは言葉が続けずにいられなかった。

「デカ、野球頑張ってたね。もっともっと頑張って、練習して、甲子園、行くんでしよう。それがデカの夢なんだろう。こんなところでサボってちゃ、駄目だよ。デカ、頑張って。私、ずっと応援してる」
なんだか泣きそうになってきたので、そこで言葉を切って会話を止める。最後は「じゃ」とだけ言って駆け出していた。

それでデカとの関係には全部の決着がついたのだと思う。

鏡から離れて、ヤコの番号に電話をかける。何回かのコールのあとにヤコが出た。誰かに話を聴いてもらいたかった。こういうとき親友がいるのは本当にありがたい。

「ナナ、どうしたの？」

「ヤコ、ごめん。ちよっと聴いて」

ナナは今まで誰にも話してこなかったデカと自分とのことを話した。デカに告白されたこと、その告白を受け入れなかったこと、それでも自分はデカのことが好きだということ。

ヤコは余計な言葉を挟まず、ただ相槌を打ちながら話を聴き続けてくれた。

「デカはね、私を好きだって言ってくれるけど、うん、それは本当なんだと思う。思うけど、でも、それは本気じゃないんだよ。だって私、デカのこと好きだからわかるんだよ。デカはさ、野球が好きなんだよ。野球に打ち込みたいと思ってるんだよ。私はそれを邪魔しちゃいけない。ううん、本当は私が入りこむ余地なんてなかったんだよ」

「うん」

「私、本当に自分が嫌になる。デカを好きなのに、今でもね、好きなのに、でも、デカが私のことだけを見てくれないのが嫌なんだな。だから、野球に打ち込んでるデカを受け入れらんない。野球頑張れって思うけど、それは確かにそう思ってるけど、でも同時にどうしても野球なんかしてるのって思っちゃう。どうして私のことだけ見えてくれないのって。だから、だから私」後の感情は言葉にならなかった。

しばらくして、もう言葉が続かないのを見極めるようにヤコが「うん」と言った。

「ナナ、今から遊びにいこっか」

「え？」

「日曜だし、ロクも呼んでさ。たまには街に行って、買い物しよう。かわいい服買って、映画見て、それから喫茶店で甘いパフェでも食べようよ」

3

フータたちが通う中学校では毎年冬に持久走がある。各学年二時間ずつを割いて一日で行われる。男女別れてスタートし、学校の敷地内をぐるっと男子は五周女子は三周してゴールとなる。三学期が始まってからは体育の授業は持久走の練習に当てられ、生徒たちは

せつせと自己タイムと競争することになる。

持久走当日、二年生が寒空の中ジャージ姿でグラウンドに集まっていた。スタート前まで各々が自由に準備運動をしている。

シューゴを見つけたフータは組になってストレッチすることにした。

「どうだよシューゴ。あれからもちゃんと走ってたのか」フータがランニング中にシューゴに会ったのは結局二回だけだった。

「走ってたよ。だから去年よりはいいタイムが出せると思う。フータ君も自己ベスト出せそう？」

「ん、そうだな。俺はタイムもそうだけど、勝ちたいやつがいるんだよな。だから目標はそいつに勝つこと」

「人との競争か。僕には考えられないな。僕はせいぜい去年の自分と競争するだけだ」

「いいじゃねーか。自分に勝つってすごいことだと思うぜ」

ナナはデカに励ましの言葉をかけようと思っていたが、今は日常ほとんど口をきいていない状態なので声をかけることができなかった。そんなナナを見かねるようにロクとヤコがデカに近寄っていた。

「デカ、調子はどーよ」

「まあまあかな。野球部でも結構走りこんでるから、上位狙ってくよ」

「デカ君、ナナが、頑張れって」

「え、ナナが？」

「言ってなかったぜ」

「言ってなかったんかい」

「あ、でも、心の中では応援してると思う」

「ん、そっか。じゃあ百人力だ」デカは何かを振り切るように気合を入れた。「ナナにも頑張ってって言っといってくれよ」

ヤコはずっとフータのことを目で追っていた。フータはシューゴと組になってストレッチを行っている。今日は調子が良さそうだ。ヤコの視線に気づいたロクが、「フータのどこにも行くか？」と声をかけた。

ヤコは恥ずかしいというように首を振った。

「でもさ、チア部入ったのだってフータのためなんだろう？ 頑張れの一言くらいかけてやれよ」

「うーん」

やれやれという表情をしてロクはフータのほうへと向かって行った。ヤコもおずおずとその後ろに従った。

「よ、フータ。調子はどーよ」

「さーどーかなー」

「ヤコがチア姿で応援するってさ」

「ななななにいつてるのロクちゃん。わわわたしそんなのしないよお」

「チア姿なら学年一位取れるってさ」

「陸上部に勝てっつーのか。うーん」

「いや、私やらないよ？」ヤコは首を振った。「あ、でも頑張ってるフータ君。私応援するから」

「おう、任せとけ」

持久走では例年運動部が上位を占めた。特に長距離走を主にする陸上部は走りが違った。スタートからトップを走りゴールまでスピードが衰えることはなかった。陸上部についていけるのは運動部でも体力のある者だけだった。

スタートからフータはトップ集団についていった。今は帰宅部とはいえさすがは元野球部だった。最後まで着いて行く体力はないが、どうせ終盤体力勝負になるのなら先にリードしておきたかった。いくら自主練していたといっても、野球部と帰宅部では普段のトレ

ニング量に差がありすぎる。

二周目までは陸上部についていったが、三周目から遅れ始めた。少しずつ前との差は開いていったが、後ろとの間の貯金を使い切るまでにはまだまだ時間があるはずだった。

四周目に入るころにはもうばて始めていた。後ろにいた者でフータを追い越すものも出始めていた。最初に飛び出したツケが来ているのは明らかだった。それでもまだデカに抜かれてはいなかった。体力を振り絞って足を動かす。

最終周に入ってもまだデカの姿を見なかった。体力はもう限界に近かった。こうなればあとは気合で走るのみだ。大きな差ではなかったが、昔から長距離走ではデカに勝てなかった。それが、球の威力も切れも劣るようになってきたのは中学に入ってからすぐのことだ。

週の半分くらいに差し掛かったころ、ようやくデカがフータに並んできた。ここまでは想定どおりだ。あとは根性勝負だ。

「へっ、帰宅部の割には頑張るじゃないか。捉えられないかと思っ
てひやひやしたよ」

「うっせ。余裕ぶっこいてると勝っちゃまうぞ」

「勝ってみろよ」

「たりめーだ」

実際そこからは体力よりも意地と意地の勝負になった。どちらも一歩も引かず並んだままで最後の直線に入った。体力勝負なら、スタートから飛び出したフータが遅れをとるだろう。根性だけで体力の差を凌駕しなければならない。

フータはどうしてもデカに勝ちたかった。デカに野球で勝つことは諦めた。デカとの差がつき始めたのは一年の夏ごろからだ。それからどれだけの努力を重ねても差は縮まるどころか広がるばかりだった。何度振り払っても才能の差を直視しないわけにはいかなかった。デカの二番手に甘んじたまままで野球を続けることはどうし
てもできなかった。

野球部と帰宅部だ。これからどんどん差がついていくのだろう。

多分今回がデカに勝つ最後のチャンスだ。

息が切れる。

心臓が高鳴る。

視界が霞む。

よくやった、もういいじゃないかと自分の中の悪魔が囁く。

ふざけんな、まだだ。

まだ俺は負けちゃいねえ。

これから一生負け犬として過ごすとしても。

今この瞬間の俺は負けちゃいねえ。

体に力が入らない。

足首が痛む。

息のし過ぎで吐き気がする。

このあとどうなってもいい。

ゴールしたあと死んじまう気になりゃ気が楽だ。

今だけはどうしても逃げるわけには行かない。

ここで逃げたら一生逃げ続ける人生だ。

一生負け続けるとしても。

一生逃げ続けるわけには行かない。

ちくしょう。

足、動け。

こいつより早く。

こいつより前に。

フータとデカは、意地と意地をぶつけ合ったまま、並んでゴールした。

勝敗は誰にもわからない。

シューゴがゴールしたとき、持久走はもう終わりに差し掛かっていた。先にゴールした面々が、各々の仕方で体を休めている。まだ

走っている者を応援する者も大勢だ。

シューゴが天を仰いで息を整えていると、もう持久走を終えていたロクが近づいてきた。

「お疲れシューゴ。どうだった？」

「どうもこうもない」冬の空は馬鹿みたいに澄んでいた。「ま、自己ベストは出せた」

走（後書き）

前からもう一年ぐらいですか。早いですねえ。しょうがないけど、主人公の一人なのに桃山でなかったなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1196j/>

ぐれえとぴんく

2011年8月17日03時13分発行